

令和元年(2019年)度
インターンシップ報告書

茨城大学人文社会科学部

目 次

●令和元(2019)年度 インターンシップを終えて 人文社会科学部長 内田 聡……………	1
●令和元(2019)年度 人文社会科学部におけるインターンシップ 教授 井澤 耕一……………	2
●インターンシップ報告書 (第1部：公的機関インターンシップ)	
◇公的機関インターンシップ 准教授 添田 仁……………	5
(都道府県)	
◇茨城県庁・県機関……………	6
(都道府県・その他)	
◇農政部 畜産振興課(栃木県)……………	15
◇企画政策部 交通政策課(青森県)……………	16
(市町村・県内)	
◇日立市役所……………	17
◇守谷市役所……………	18
◇水戸市役所……………	19
◇筑西市役所……………	20
◇土浦市役所……………	21
(国際協力)	
◇JICA筑波……………	22
●インターンシップ報告書 (第2部：民間企業インターンシップ)	
◇メディア系インターンシップ2019 学生たちは何を学んだのか 教授 村上 信夫……………	23
(テレビ局関係)	
◇株式会社ジェイ・スポーツ……………	24
◇株式会社やんかわ商店……………	25
◇テレコムスタッフ……………	27
◇株式会社トラストネットワーク……………	28
(ラジオ局)	
◇株式会社茨城放送……………	29
(新聞社)	
◇朝日新聞水戸総局……………	30
◇東京新聞水戸支局……………	34
◇読売新聞水戸支局……………	35

(広告・PR)

◇株式会社フロンティア・エンタープライズ…………… 37

(県内企業・機関)

◇株式会社筑波銀行…………… 38

◇社会福祉法人 三富福祉会…………… 41

◇水戸プラザホテル…………… 42

(その他)

◇香陵住販株式会社…………… 43

◇NPO法人ドットジェイピー …… 44

●インターンシップ報告書 (第3部：PBL型インターンシップ)

◇専門科目「プロジェクト演習」におけるインターンシップ

人文社会科学部地域志向教育プログラム委員長 神田 大吾…………… 47

◇水戸市役所…………… 48

◇NTTコミュニケーションズ株式会社 …… 59

●編集後記…………… 66

・人文社会科学部インターンシップ担当

教授 井澤 耕一 教授 村上 信夫 教授 今村 一真

准教授 添田 仁

・プロジェクト演習 准教授 神田 大吾

・キャリアセンター

・インターンシップ スタッフ…………… 66

令和元（2019）年度 インターンシップを終えて



内田 聡（人文社会科学部長）

2019年度も人文社会科学部および人文社会科学研究科の共通科目「インターンシップ」を実施した。まずは、快く学生を受け入れていただいた関係機関各位に心より御礼を申し上げる。

この授業は20年目となり、派遣先は企業・官公庁・団体にわたり、茨城県内外へ、年によっては海外にも広がり、履修学生も増えてきた。現在は派遣先を公的機関と民間企業の2つに明確化して実施している（他学部生も履修可）。インターンシップの意味合いをも持つ「プロジェクト実習」の履修学生と併せて、今年度は40名が参加した。このなかには大学院の留学生2名の参加もあった。

インターンシップにはさまざまな手法や形態があり、企業側が主催するものもある。本学部のインターンシップは、2年次以上を対象とし、2週間で2単位の「インターンシップA」、および1週間で1単位の「インターンシップB」からなる。受講生は派遣期間終了後に本報告書に掲載されるレポートを作成するが、派遣先には終了時に評価書の作成もお願いしている。これにより、履修にともない身についた能力等の学習成果が幾分かでも可視化される。また、「プロジェクト実習」も本報告書にレポートを掲載している。

学生の就業意識も高まるなかで、本授業のバージョンアップを行っている。茨城大学における正規授業としてのインターンシップは、本学部の授業が先駆けであるが、これを全学的な取組みに拡大する試みも行われてきた。茨城大学キャリアセンターとの協力関係を強化し、事前準備を進め、ガイダンスを実施している。近年、大学の授業は変化を求められ、座学にとどまらず、学生が社会

の現場に出て行き、さまざまな課題を具体的に考え行動するタイプの授業が増えつつある。学生は1～2週間のインターンシップを通し、企業や行政機関の果たしている社会的意義、組織内での社員・職員の役割分担と協力関係、コミュニケーションの重要性等を理解し、積極的に取り組んでいることが、このレポートから読み取れる。

インターンシップを実施するには、派遣先の負担はもちろん、準備や事前指導を担当する教職員の負担も決して小さくない。交通費や宿泊費といった学生本人の経済的負担も生じる。しかし、教育効果の高い授業であるため、一人でも多くの学生が履修できるよう努力していきたいと考える。

最後に、受講生の皆さんには、受入先の協力があつての授業であることを忘れず、本授業を通して現場で見て話して得たことを、周囲の人と共有しながら、自身のこれからの学修や人生に大いに生かしていくことを期待する。

2020年3月

令和元（2019）年度 人文社会学部におけるインターンシップ

井澤 耕一（人文社会科学部教授）

1. 人文社会科学部におけるインターンシップ

2000年度に当時の人文学科によって始められたインターンシップは、2007年度から、インターンシップ「水戸近郊」とインターンシップ「広域」の2つに分かれて実施されていた。しかしなら「広域」と称しながらも、インターンシップの実施場所が市内であった、逆に海外インターンシップであるにも関わらず、「水戸近郊」で担当したりなどといった矛盾が生じ、インターンシップを志す学生にとって、結局どちらを選択すればよいのか一見して分かりにくい状況になっていた。

そこで私をはじめとした担当教員は協議を重ね、その齟齬を解消するために、2017年度から「派遣先」でグループ分けを行い、県庁や市役所などへのインターンシップを管轄する「公的機関」と、一般企業へのインターンシップを管轄する「民間企業」の2グループに分け、かつガイダンス等は2グループ共同で行うこととなった。

教務上の位置づけは、人文社会科学部の選択科目として、8月～10月を中心に実施し、1週間（実質5日間）程度であれば「インターンシップA」として1単位を授与、2週間（実質10日間）程度であれば、「インターンシップB」として2単位を授与している。

本年度も、学部のインターンシップ担当教員が中心になって実施にあたった。すなわち、公的機関は私井澤、添田先生、民間企業は村上先生、今村先生が実施の任に当たり、事務全般については学務Gの清家さんが行った。

また、本学のキャリアセンターの皆様にも、派遣

に係る事務的手続きや水戸キャンパスにおけるインターンシップガイダンスを主催していただいた。いつもながら汗をかいていただいた皆様には、特に記して謝意を表します。

(1) インターンシップ・スタートアップガイダンス（2019年5月15日および22日）

キャリアセンター主催によるもので、時間割の関係上出席できない学生の為、ガイダンスを複数回実施した。ここでは主に以下のことを説明した：

- ① 茨城大学インターンシップ制度について
- ② 人文社会科学部のインターンシップ制度について
- ③ 理学部のインターンシップ制度について（15分、理学部学務グループ）
- ④ 講演

今年度のガイダンスへの参加者は、延べ277人に上った。

(2) 学部インターンシップ特別ガイダンス（6月12日）及び派遣前ガイダンス（7月31日）

6月中旬、学部独自のガイダンスを開催し、特に民間企業へのガイダンスについて、村上先生から詳細な説明がなされた。そして7月下旬まで、掲示に拠って派遣希望者を募り、キャリアセンターおよび教員による受け入れ先との調整を経て、派遣が決定した学生を集めて派遣前ガイダンスを行った。科目として履修する者は必ず出席するよう伝えしたが、出席者が極端に少なく、公的機関においてはいわゆる「ガイダンスの補講」を行

わなければならなかった。この点については、学生たちへは猛省を促したい。ガイダンスでは、派遣期間中の注意点、日誌・報告書の書式、学生同士で報告書を添削すること、後日担当者別に行われる報告会に必ず参加することなどを説明した。また村上先生からインターンシップ参加に際しての留意点やマナーについてのお話をいただいた。

(4) インターンシップの実施（2019年8月～11月頃迄）

今年度は、最終的に公的機関インターンシップではのべ17名（うち2年次生5名、3年次生12名）、民間企業インターンシップではのべ23名（うち2年次生4名、3年次生16名、大学院生2名、その他1名）の学生が参加し、全体では40名であった（参考までに昨年度は公的機関には、のべ24名、民間企業インターンシップには、のべ31名の学生が参加した）。インターンシップ終了後、学生達からインターンシップの日誌などが提出された。

(5) インターンシップ報告会

11月から1月にかけて、担当教員ごとにゼミ形式の報告会が複数回開かれ、参加学生が本報告会で自らの体験を披露した。派遣先と仕事内容の紹介、感想および反省を発表し、それに対して担当教員や参加学生から質問をするという形式で行われたが、各人のインターンシップ経験を十分理解できる大変有意義な報告会となった。発表会後に報告書の最終稿が提出された。

最後に本年度インターンシップにおいて極めて残念なことがあったことを特に記す。インターンシップに参加した学生の中に、義務付けられていた報告書の提出と、報告会への参加を履行しなかった者が少なからずいた。このようなことが続けば、本インターンシップ派遣自体を中止することも考えなければならない。学生のみなさん、後に続く人のためにも、信義を守って行動してもらいたい。

今年度のインターンシップ実施に当たっては、各方面からの協力無くしては不可能であった。まず、本年度も快く学生の受入に御協力いただいた多くの公的機関および各種企業、団体の皆様に感謝を申し上げたい。さらに、学生への指導を熱心に行っていただいた先生方ならびに事務的なサポートをしていただいた学務Gの清家さん並びにキャリアセンターには感謝申し上げたい。本報告書作成に関しては予算委員会並びに学部執行部、また茨城大学からの配慮に負うところが極めて大きい。これらの内どれか一つでも欠ければインターンシップはスムーズに行われなかったにちがいない。この場をかりて改めて心から感謝する次第である。今後とも我々は歩みを止めることなくインターンシップの改良を図っていくので、皆様のさらなるご支援を茲にお願いする次第である。

(参考文献)

2018年度以前発行の『インターンシップ報告書』（茨城大学人文学部）

インターンシップ報告書 (第1部)

公的機関インターンシップ

公的機関インターンシップ

人文社会科学部准教授 添田 仁

茨城大学人文社会科学部では、2019年度、17名の学生を公的機関へのインターンシップに派遣しました。内訳は、茨城県庁など都道府県の機関に11名（茨城県庁9名、他県庁2名）、各市町村役場等に5名（県内同じ）、さらに国際協力・国際交流を推進する独立行政法人JICAに1名となります。昨年度の24名からいささか微減し、このうち5名が2年生でした。なかには、2年次に市役所でインターンシップを経験し、3年次には県庁で、といったように段階を踏んで市と県の両方で参加した学生も見られました。

学生の参加動機については、公務員を志望してはいるものの、その業務について不明な点が多いことから、まずは現場の様子を知りたいという思いで参加した学生が多いようです。また、本当に自分が公務員を目指しているのか、働きたい場所はどこか、といったような就職に対する自身の考え方を整理するために、「UIターン学生向け・青森県庁ハイブリッド型インターンシップ」のように、地元で公的機関と民間企業の両方を経験することができる企画に参加した者もいたようです。一方で、出身地に愛着を持ち、将来は大学で学んだことを活かして地域に貢献したいと考えている学生も見られます。とくに今年度は、茨城県の主要産業である農業と地域振興、公共交通の利便性向上、男女共同参画と女性の社会進出の推進など、現実の社会が抱える諸課題を認識し、それらの解決に向けた自治体の取り組みについて学ぶことを目的として参加した学生もいました。

学生の派遣先は、行政経営課、環境政策課、産業政策課、農業政策課、畜産振興課、交通政策課、都市計画課、中小企業課、厚生総務課、女性活躍・県民協働課、県税事務所、こども福祉課政策秘書課など多岐にわたっています。派遣先では、各種の見学、広報誌や資料の作成などの業務はもちろん、なかには農業職の受験者確保策と採用辞退者

防止策の計画立案、県内ブランドの画期的な広報のあり方についてプレゼンテーション、自治体に「若者を呼び込む」ための政策立案といった、自治体が抱える課題に対する基礎的な理解と問題解決のための発想力が試される貴重な経験をさせてもらった学生もいたようです。関係機関の皆様には、多彩な学びの機会をご用意いただいたことに深く感謝します。

参加した学生は、例年通り、公的機関の業務について、「受動的」「デスクワークが多い」という先入観を持っていた者が多かったようで、実際には、政策の立案や企画の運営などのようにクリエイティブな仕事も多いことに驚いていたようです。また、公務員の仕事の難しさにも気付いたようです。仕事の量が多いことはもちろん、とくに市民対応のなかで、相手の立場や年齢、その時々状況を見極めながら、「愛情」をもって臨機応変に対応することが求められることに対して、大学の学びでは身につけることができない姿勢と技術の重要性を痛感したという声が多くありました。その一方、指導していただいた方から「いくつになっても学び、自分を高められる仕事」であることを教えられ、新しい魅力とやりがいを見つけたという者もいます。

参加した学生たちは、インターンシップを通して大学では学ぶことができない、貴重な経験を得たようです。それはひとえに、お忙しいなかで学生を受け入れていただいた各機関の皆様のご尽力のたまものです。心から感謝し、重ねてお礼を申し上げます。

県庁の仕事を体験して

茨城県庁 総務部 行政経営課

法律経済学科 2年

北 舘 陽 佳

1. 参加の動機

私は将来、公務員として働くことを希望しています。しかし、市町村・県・国のどの行政規模で働きたいのか、また故郷に戻って働くのか、このまま茨城県に残って働くのか決めきれていませんでした。そこで、少しでも多くの自治体と関わって、地域や行政を知り、それぞれを比較して決めようという思いから、今回のインターンシップへの参加を決意しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私が派遣された総務部行政経営課は、改革推進と組織定数の2つのグループに分かれています。改革推進グループは、県庁における働き方改革やICTの導入を行い、職員が心身ともに健康で、意欲を持って働くことができる環境を整備し、職員のワーク・ライフ・バランスの推進と、仕事の生産性の向上を図ります。組織定数グループでは、業務が円滑かつ効率的に執行されるように、主に組織構成や権限に関することを決定します。

インターンシップ期間中は、県庁内や県議会の案内、行政経営課の業務に関する説明を受けた後、県北、県南への視察で出先機関を訪れたり、組織定数グループの業務体験をしたりしました。県南の視察では、環境科学センターや県南水道事務所を訪れ、県北視察では、常陸那珂港区・工業団地や常陸太田合同庁舎を訪れました。特に県北の視察では、実際に県北振興に携わる地域おこし協力隊の方からお話を聞くことができ、とても貴重な経験ができました。業務体験では具体的に、地方制度調査会の中間報告とりまとめ内容の整理を行いました。加えて、ICTの導入を試み視察に訪れた他県の職員の方への説明会に同席する機会もいただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は今回のインターンシップで、県庁の具体的な業務内容や、職場の雰囲気について知ることができました。インターンシップに参加する前は、公務員といえばパソコンに向き合う事務作業が多く、仕事はデスクワークが中心であるというイメージがあったのですが、実際に県職員の方から「現場の声を直接聞く機会を大切にしている」というお話を聞いたり、視察で地域おこし協力隊の方々と県職員の方とのやり取りを見たりする中で、人と深くかかわる仕事だという印象を受けました。また、県

職員の仕事は、同じ部署でありながら課によって、担う業務が大きく異なることに加え、短期間で異動を行うため、仕事をする上で学ぶ姿勢を絶やさないことが大切だと感じました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに参加すると、パンフレットやホームページ、説明会では知りえないことを体感することができます。私は公務員志望という漠然とした希望だけで、インターンシップに応募し参加しましたが、働く現場を肌で感じる事ができて、公務員として働きたいという意思がより強くなりました。また、インターンシップ期間中はさまざまな人と接するため、視野が広がり自分を見つめ直す機会にもなると思います。

最後になりますが、お忙しい中インターンシップを受け入れてくださった茨城県庁の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

公務員として働くこと

茨城県庁 県民生活環境部 環境政策課

法律経済学科 3年

阿内直哉

1. 参加の動機

私は、将来的な進路として公務員を目指しており、公務員として働くことについて理解を深めたいと考えていました。そこで、実際の業務を体験することで、インターネット等ではわからないような職場の雰囲気等を感じることができるのではないかと考え、今回茨城県庁のインターンシップに参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私がお世話になった県民生活環境部環境政策課は、環境企画グループと地球温暖化対策グループから構成されています。主に、環境学習、保全活動及び環境保全県民運動の推進、地球温暖化対策の企画、調整及び推進、再生エネルギーに係る施策の総合調整に関する業務等を行っています。

今回の5日間のインターンシップでは、茨城県の環境の状況や環境の保全及び創造に関して講じた施策をとりまとめた年次報告書である環境白書の作成作業、レジ袋無料配布中止の取組推進事業に関するデータ入力、茨城県地球温暖化対策実行計画推進委員会の運営の体験、涸沼・牛久沼水質保全計画推進連絡会議への同行をさせていただきました。環境白書の作成では、校正作業を体験しました。また、茨城県地球温暖化対策実行計画推進委員会では準備段階の会場設置から関わらせていただき、会議中は発言者の発言記録を残す仕事を任されました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップに参加して、公務員として仕事に取り組む姿勢を学ぶことができました。県庁職員の仕事は、一人でパソコンに向かった事務作業の多いイメージを持っていました。しかし、実際は、環境政策課以外の各課とも連携をとりながら、一人だけでは仕事をせずに、多くの方々と協力しながら仕事を進めていることがわかりました。普段から報告・連絡・相談を頻繁に行っており、仕事を進めるうえでコミュニケーション能力が大切であると実感しました。また、職員の方は委員会や会議で、資料にある進行中の計画について質問者に詳細な説明ができる知識を事前に身につけていました。その姿からは、多くの方が関係し、お金もかけているため、最初から最後まで自分の仕事に責任をもって取り組んでいることも学ぶことができました。

加えて、茨城県庁での仕事は大変やりがいのあるものだ、改めて知ることができました。環境政策課の業務だけでも多岐にわたりますが、県庁内には他にも数多くの課や部署があり、その中で定期的に人事異動があります。その異動により私たちの生活に結びついている様々な仕事を体験することで、日々自分自身を成長させることができる環境に魅力を感じました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することで、業務の内容や職場の雰囲気を知ることができ、自分の将来を考えるきっかけになると思います。どの業種であっても興味を持ったものには、インターンシップに参加していただきたいです。

また、インターンシップ中は職員の方と直接お話できる機会があります。その際、話の内容を理解したり、自分からの質問につなげたりするためにも、あらかじめインターネット等で自分がお世話になる職場や業務に関連する情報を調べておくことをお勧めします。普段なかなか関わることのできない、実際に働いている職員の方のお話から得られるものは、沢山あります。インターンシップに参加した際には、決して受け身にならず、多くの方と積極的にコミュニケーションをとることを意識しましょう。

最後になりますが、お忙しい中インターンシップを受け入れてくださった茨城県庁の皆様をはじめ、県民生活環境部の皆様に心より御礼申し上げます。5日間ありがとうございました。

県庁職員として働くこと

茨城県庁 産業戦略部 中小企業課

法律経済学科 3年

齊 藤 勇太郎

1. 参加の動機

私は公務員志望ではあるのですが、公務員が具体的にどのような業務を行っているのか、県と市町村ではどのような違いがあるのかなど、漠然とした理解だけで、知らない部分が多くありました。3年生になり、就職活動を見据えなければならない時期に入り、公務員志望でも、県庁や市役所、国家機関など、どの道に進むかの目標をきちんと定めなければならないという焦りがありました。しかし、選択し決定するだけの情報を持ち合わせていなかったため、焦燥感だけが募り、決めかねていました。今回このインターンシップに参加した一番の理由は情報収集です。実際に働いている人の話を聴いて、進路決定に役立てることができればという思いで参加を決めました。

2. 派遣先の概要と業務内容

中小企業課は産業戦略部に位置する課で、団体支援グループ・経営支援室・大型店グループから構成されています。主な業務内容は、中小企業の経営力強化と事業承継・事業再生の支援、地域商業・サービス業の活性化支援、小規模事業者の経営改善・経営力向上支援、中小企業組織化の推進、物流効率化の支援、大規模小売店舗立地法の運用、高度化事業の債権管理と組合の運営支援、被災中小企業等の復興支援などを行っています。

今回のインターンでは、中小企業の事業承継支援、経営革新事業、大規模小売店舗立地法の運用業務などを体験させていただきました。パソコンを使用した書類整理だけでなく、革新計画承認制度を実際に利用している企業や、事業承継支援ネットワーク事務局、水戸商工会議所など現場を訪問してお話を伺うなど、庁舎を飛び出した外での仕事も経験させていただきました。特に、中小企業課は県庁の他の課に比べても、外に出て県民の方と直接やり取りをすることが多い課であるということで、5日間のインターンシップ期間中ほとんど外に出ています。

インターンシップに参加する前は、公務員は庁舎内でデスクワークを行っているイメージだったのですが、中小企業課では、半数近い方々が毎日出張に出かけて、支援を行っている企業などを訪問し、アクティブに働いていたので、イメージの違いにとっても驚きました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して一番強く感じたことは、県庁職員の方々の茨城県や県民に対する愛情です。課によって扱っている業務内容は異なっていますが、茨城県総合計画の基本施策に基づき、それぞれが考えながら仕事を行うことで、人数が多い組織でも統率が取れ、またそこに、茨城をより豊かにしたいという思いが根底にあることで、一枚岩の結束があるなど感じました。公務員として働くには、郷土愛や奉仕の心が何よりも大切だと改めて分かりました。

また、インターンシップ期間中たくさんの職員の方々のお話を伺う機会がありました。県庁職員になった経緯や所属していた課の変遷など人それぞれ違って、他の課の仕事内容、民間企業との違い、試験勉強についてなど多くの情報を得ることが出来ました。私が今回インターンシップに参加した目的は情報収集だったので、目的は達成することが出来たと思います。この5日間は自分の将来を考えるためのいい経験になりました。今回得た情報をこれから役立てていきたいです。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することは、就職に対する自身の視野を広げることだと思います。インターンシップに参加する以前は新卒で試験を受けて公務員になるという道をたどるのが一般的だと考えていましたが、民間企業に勤めてから職員になった方、大学院を卒業して職員になった方など道は様々でした。インターンシップを通して、他大学の学生や社会人の方など普段接することのない人々と接することで、日常生活では得られない情報や考えを得ることが出来ます。より良い進路選択のためにも、インターンシップへの参加は一つの選択肢として考えてみるといいと思います。

また、今回お世話になった職員の方々並びに先生方、本当にありがとうございました。とても勉強になりました。

茨城県庁のインターンシップを通して

茨城県庁 産業戦略部 産業政策課

法律経済学科 3年

中野翔太

1. 参加の動機

私は、公的機関の政策について興味があり、大学においても、法律や政治学、行政学など関係する科目を中心に履修しています。しかし、学問として学ぶのは体系的です。そこで、学問としての知識を学ぶだけでなく、実際に実務の中でどのようにこれらが運用されているのかを知りたいと思うようになりました。また、私は県外の出身なので、特に茨城県の行政について関わろうと思いました。しかし、茨城県庁で勤務する公務員が実際にどのようなことを行っているのか、漠然としたことではわかりませんでした。なので、彼ら公務員がどのような職務を行っているのか、体験しようと思い、茨城県庁のインターンシップに参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私が実習先として派遣された産業政策課は、産業戦略部に属する課の一つです。課の中でも、総務・金融・産業企画・コンテンツ産業グループや地域産業振興室に分かれています。産業政策課の主要施策は、主に3つです。1つ目は、地域経済をけん引する中核企業として中小企業の、経営・研究開発・デザイン開発などの育成・支援を行うこと。2つ目は、中小企業の資金調達の支援のために中小企業金融の円滑化及び貸金業者の監督を行うこと。3つ目は、地場産業の振興・育成支援です。

インターンシップでは、5日間を通して各グループの業務を体験しました。金融グループでは、中小企業へ県が制度化する融資について重要な役割を有する茨城県信用保証協会を訪問し、中小企業の融資体制について学びました。地域産業振興室では、国に指定されている茨城県の地場産業である笠間焼について、実際に笠間市にある陶芸大学校や、笠間焼の陶芸家として活躍する方の工房を訪問しました。また、同じく結城紬についても、結城市にある繊維高分子研究所を訪問しました。コンテンツ産業グループでは、茨城県が新領域としてeスポーツ産業を振興しています。ここでは、eスポーツ関係者と大井川知事との座談会の会場設営補助を行い、見学しました。5日間を通して、県庁の外部に出かけることが多く、実際に行われている施策について目で見て体験することができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

一言で、「茨城県の産業を振興する」といっても漠然としたものです。そのためには、金融面からであったり、研究や人材育成の面からであったり、また新たな産業を開拓していくことでもあります。インターンシップ前は、抽象的な考えでしか捉えることができなかったことが、様々な視点から具体的に捉えることができるようになりました。また、県庁の仕事はデスクワークが中心だと思っていましたが、実際には外部を訪問することで、施策を取り巻く関係者とのコミュニケーションを密にしている、関係者との信頼関係を築くことの重要性を学びました。

大学で学んだことも決して無駄ではないこともわかりました。確かに、実際に業務を体験してみて、コミュニケーションであったり、書類作成であったり、働き始めることで学び習得していくであろうことも多かったです。しかし、その中でも用地取得や権利関係などで登場することがありました。これらは知識としてだけではなく、実際に道具として当然のように使われています。私が、県庁のインターンシップを志望した理由でもある、実際の現場での知識の使われ方を学ぶことができました。

4. 後輩へのアドバイス

様々な理由で茨城県庁を志望してる方々がいると思います。インターンシップ実習では、県のパンフレットやホームページだけではわからないことを数多く学ぶことができます。そういった意味でも、実際に体験することで自分の学びを深めるだけではなく、進路選択について重要な参考になると思います。一步を踏み出して茨城県庁のインターンシップに参加してみることをお勧めします。

最後になりましたが、ご多忙の中丁寧にご指導下さいました産業政策課の皆様へ心より御礼申し上げます。

将来に向けての大きな一歩

茨城県庁 保健福祉部 厚生総務課

現代社会学科 2年

栗田 咲希

1. 参加の動機

私はそろそろ自分の将来を考えなければならないと思っていたため、大学の長い夏休みを利用してインターンシップに参加することを決めました。しかし、私は将来何がしたいのかははっきりしておらず、派遣先を探すにあたってとても迷っていました。そこで見つけた茨城県庁のインターンシップは一週間程度のプログラムであったため、短い期間で茨城県職員の仕事や雰囲気を感じることができる絶好の機会だと思い参加を希望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

茨城県庁の保健福祉部には13の課があり、私は厚生総務課で5日間インターンシップをしました。厚生総務課には4つのグループがあり、総務、管理・医療大学、国民健康保険、医療福祉に分かれています。私はおもに国民健康保険グループと医療福祉グループにお世話になりました。

国民健康保険グループでは医療保険制度・保健事業の概要や保険給付・保険料に関する業務についての説明をしていただきました。また県庁内で行われた税務研修会に参加し、茨城県の国民健康保険料の収納状況や課題・方策についてのお話をうかがいました。さらに4日目には茨城県国民健康保険団体連合会を訪問し実際の業務現場を見学しました。医療福祉グループでは医療機関指導や後期高齢者医療制度・医療福祉制度についての説明を受けました。そして最終日には後期高齢者医療広域連合を訪れ、後期高齢者医療制度の概要や具体的な業務内容の説明をいただきました。

このほかに簡単な業務として、厚生総務課に関係がある新聞記事の収集や医療費の分析に携わりました。医療費分析業務では、厚生労働省から提供された医療費適正化資料のデータを加工し分析が可能な形態にしました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップへの参加を通しての一番の学びは、公務員の方々が普段どういった仕事をしているかを肌で感じられたことです。以前は公務員といっても具体的に何をするのかほとんどイメージがわきませんでした。しかし実際に職員の方々に囲まれて業務を体験するなかで、公務員の仕事はパソコンでの作業や電話対応といった基本的なことから、住民への広報、病院・診療所や歯

医者、薬局などへの出張といったことまで非常に多様であることがわかりました。さらにこれら多くの業務をこなすために、職員の方々はさまざまな制度の細かいところやその最新の情報まで、私たちが普通に生活しているうえでは触れないような知識を常に身につけていることも知りました。

また、職員の方々と積極的にコミュニケーションをとったことで、公務員の仕事内容以外の情報もうかがうことができました。どの職員の方も共通しておっしゃっていたのは、公務員は一度決まった担当に就いても数年経つとまた違う担当に就くことになるため、その度に新しい仕事を覚える大変さはあるが、そのぶんいろんな分野について学ぶことができる楽しさもあるということです。その他にも女性職員の方からは、将来結婚して子どもを産みたいなら公務員はとても良い職業かどうかがいきました。産休や育休の制度がしっかり整っており周囲から批判されることもないため、安心して休みをとることができる点が魅力だと感じました。

4. 後輩へのアドバイス

私は2年生のうちにインターンシップに参加して本当に良かったです。インターンシップは3年生になってからでも大丈夫だと考えている人は多いのではないかと思います。しかし参加することで今まで以上に自分の興味が広がったり、社会人の世界に足を踏み入れることができたりと、得られるものはとても大きいです。そしてそこから自分の将来を改めて考えるきっかけにもなります。参加するのに不安な気持ちはありましたが、職員の方々が温かく迎えて下さり5日間楽しくインターンシップをすることができました。とても貴重な経験になるので少しでも迷っている人はぜひ参加して下さい。

最後になりましたが、大変お忙しいなかインターンシップ生として受け入れて下さった厚生総務課の皆様へ深く感謝申し上げます。5日間丁寧にご指導いただき、本当にありがとうございました。

将来を考える機会

茨城県庁 県民生活環境部 女性活躍・県民協働課

法律経済学科 3年

古山 愛梨

1. 参加の動機

私は将来、地方公務員として働くことを希望しています。地方公務員と一括りにしても様々な職種があります。昨年度は地元、日立市役所のインターンシップに参加させていただき市政の在り方を学んだので、今年度は県政について学びたいと考えました。

また、私は男女共同参画や女性活躍推進に関心があることから、女性活躍に向けた取り組みを行っている茨城県庁県民生活環境部女性活躍・県民協働課でのインターンシップを志望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私がお世話になった県民生活環境部 女性活躍・県民協働課は、2つのグループに分かれています。

1つ目は、男女共同参画の企画・調整及び推進や女性の活躍推進に取り組む女性活躍グループ、2つ目は、県民運動の企画・調整及び推進や特定非営利活動促進法の施行に取り組む県民協働グループです。今回は主に女性活躍グループでの業務を体験し、最終日に県民協働グループの業務を体験させていただきました。

女性活躍グループでは、男女共同参画及び女性活躍についてのe-ラーニング・研究、茨城県男女共同参画審議会見学及び審議会結果のまとめ、メンター研修準備作業として配布資料の作成、一般事業主行動計画のダウンロード・印刷作業、女性活躍推進トップセミナーのチラシ作成を体験させていただきました。また、県民協働グループでは、NPO法人制度の学習、NPO法人設立認証申請書・事業報告書等の審査を体験させていただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は、今回のインターンシップを通して2つのことを学びました。

1つ目は、市役所と県庁の業務の違いです。昨年インターンシップに参加した市役所では、市民の方々と直に触れ合うような日常生活に近い業務が多いと感じました。それに対して、県庁はその業務を行っていく方針や大枠を考えていく包括的な業務が多かったように感じました。地方公務員と言っても、場所が変われば業務も大きく異なります。理解しているつもりでいましたが、今回のインターンシップを通してそのことをより強く実感しました。

2つ目は、与えられた業務を正確に行う重要性です。最終日にNPO法人設立認証申請書・事業報告書等の審査を体験させていただいた際、私は当初渡されたチェック項目に当てはまるかどうかのみをチェックしていました。しかし、途中で職員の方から文章の誤字脱字や「てにをは」にも気を配るとよい、と教わりました。たしかに、チェック項目はクリアしていても、文章として欠陥があれば正しい申請書・事業報告書とは言えません。細部まで確認する分もちろん時間はかかりますが、丁寧かつ正確に業務を遂行する姿に、地方公務員として責任を背負っていることを改めて実感しました。他にも、茨城県男女共同参画審議会等の会議や審議会では何日も前から入念に準備をし、当日も朝早くから不備のないように設営や参加者への対応をしている職員の方々を見て、働く上での姿勢を学びました。

他にも、職員の方々から地方公務員のやりがいや学生生活のうちにやっておくべきこと等直接お話を伺うことができ、これらはインターンシップという密接にかかわる機会があつてこそだと思いました。

4. 後輩へのアドバイス

今回のインターンシップは、私にとって県庁の業務内容や庁内の雰囲気を味わうだけでなく、将来の自分について見つめ直す貴重な機会となりました。インターンシップを経て、なぜ地方公務員を志望するのか自分の中で考えがまとまったように感じています。進路がまだ定まっていない人にとっては、自分の将来について考える絶好の機会だと思います。職員の方々は学生である私に親身に接してくれたので、不安に思っている方も是非負わずに参加を検討して欲しいです。

最後になりましたが、お忙しい中インターンシップを受け入れてくださった茨城県庁県民生活環境部女性活躍・県民協働課の皆様にご心より感謝申し上げます。5日間本当にありがとうございました。

地域農業を支える

茨城県庁 農林水産部 農業政策課

現代社会学科 3年

鈴木 楓子

1. 参加の動機

私は高校生の頃から社会問題や文化としての農業に関心がありました。また農業は茨城県の主要産業でもあるため、その農業振興の現場を知りたいと思い、茨城県庁の農林水産部農業政策課への派遣を希望しました。加えて私は、今年の夏季休業中に国、県、市、3種類の公的機関におけるインターンシップに参加しました。それら3者を比較し将来の進路選択に役立てたいと思ったのがその動機です。

2. 派遣先の概要と業務内容

私は茨城県の本庁舎に派遣されましたが、そのほとんどの期間、出先機関でお話を伺ったため、出先機関での業務について説明します。本庁舎ではほとんど行政職の職員が働いていますが、出先機関では農業職という農業分野の専門職の方が働いています。農業職の方は普及・研究・行政の3つの仕事をしており、これら3つの仕事をおよそ3年ごとに異動します。普及では、農家から農作物の病気などの相談を直接聞いて、それに対するアドバイスをします。また研究では農家が抱えている問題を聞き入れ、それについて研究をします。そして行政では、県の本庁舎で議会対応や出先機関への指示などを行います。

今回のインターンシップでの業務内容は農業職の受験者確保策と採用辞退者防止策の企画立案を行うことです。より多くの受験者を確保して競争率を高くすれば優秀な人材を採用することができます。また県では費用の問題から余分に採用を出すことがないため、もし採用辞退者が出てしまうと仕事に穴ができてしまいます。これらのことから受験者確保策と採用辞退者防止策を考える必要があるそうです。私は企画立案のため、出先機関にいる農業職の方を訪れ聞き取り調査を行いました。具体的には県南農林事務所、県西農林事務所、茨城県農業総合センター園芸研究所などを訪れました。その後調査の内容から企画立案をまとめて、県職員の方に提出しました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私はこのインターンシップを通じて地域農業を支える現場を知ることができました。農業職の方は直接農家と関わる機会が多く、何か問題があれば気軽に相談できる

頼れる存在となっています。このことから農業職の方が、1人1人の農家を大切にして信頼関係をつくってきたことが分かりました。

私は専門職ではなく事務職を志望しており、自分が農業職に就くことはありません。しかし農業職の方の話を聞き、茨城の農業を支える現場を知ることができたことは自分にとってとても有意義でした。また、今回のインターンシップと一緒に参加していた2人はどちらも農学部で農業職を目指しており、普段は関わることのない農学部のインターン生と関わることで自分の視野を広げることができました。

また、私は今まで県職員は本庁舎で働いているというイメージを持っていました。しかしながらこのインターンシップを通じて、出先機関で働いている方の存在を知り県職員のイメージが変わりました。加えて、仕事内容だけではなく職場の雰囲気を知ることができました。本庁舎と出先機関では雰囲気が異なっており、着ている服も違いました。本庁舎の方はスーツを着ていますが、出先機関の農業職の方は農家と関わる機会が多いため、わざと親しみやすいカジュアルな服を着ているそうです。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップでは普段はできない貴重な体験をたくさんすることができます。社会人に囲まれ、慣れない環境の中で緊張することもあります。その分得られるものも多いです。またインターンシップ生は1週間程しか職場におらず、何も分からないため仕事を任されることはありません。なので仕事をするを目的にするのではなく、職場の雰囲気を知ることが目的にして参加するとよいと思います。就職してから従来の職場のイメージとの違いに気付くのではなく、インターンシップに参加して就職前にそれに気付くことができればより自分に適した就職先を選択することができます。

県庁のインターンに参加して

茨城県庁 総務課 土浦県税事務所

法律経済学科 3年

島田夏海

1. 参加の動機

もともと公務員志望だったこともあり、3年になったら県庁か市役所など公務員のインターンに参加したいと考えていました。またそのインターンに参加することで来年の就職活動に向けて、公務員の仕事が本当に自分のやりたい仕事なのか実際に確認したいと考えていました。さらに、公務員の具体的な仕事内容や働いている雰囲気を知るために参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

茨城県庁の出先機関である土浦県税事務所に9月9日から9月13日の5日間インターンシップに参加しました。土浦県税事務所は、県南の地域の税金の課税・収税を仕事としています。県税事務所では、管理課、総務課、課税一・二課、収税一・二・三課があり、5日間でそれぞれの課をまわりました。

具体的な内容として、1日目は午後から県庁や県税事務所の概要説明、管理課の仕事を学びました。管理課は、窓口業務や案内係、収納管理、督促状の発布、過誤納付金の返付・充当業務の仕事を行っていることが分かりました。2日目は、県庁で部や課の説明や資料をもらい、午後には県議会を傍聴しました。3日目は、収税一課が取り扱う自動車税について説明、事務補助や現地調査を行いました。今回の現地調査は、亡くなっている方の自動車についての税金を徴収するため、名義変更の説明や自動車を使用されているかを確認しにいきました。4日目は、午前収税二・三課の仕事内容や危機管理の説明を聞き、事務補助を行いました。危機管理について、実際の事例の話聞きながら、信頼を無くさないために責任ある行動を行う大切さを感じました。午後は課税一課で説明、事務補助を行いました。課税一課では、県民税や事業税ゴルフ場利用税、軽油引取税を取り扱っています。最終日は、午前課税二課で仕事内容の説明、事務補助を行い、課税二課では、不動産取得税のみを取り扱っており、事務補助を行っている際も県民の方が相談にいらっしゃっていてとても忙しい業務でした。午後は若手職員との懇談会を行い、レポートを作成しました。懇談会では、和やかな雰囲気様々なお話を聞くことができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、学んだことは2つあります。

第1に、職場の雰囲気を、5日間を通して知ることができました。土浦県税事務所では、わからないことがある場合は周囲の人に相談し、一緒になって考えることが多く見られました。単独で仕事を行っているのではなく、課ごとに一体となって仕事を行っているということがわかりました。そのため、事務補助を行っていた際もすぐに疑問点を職員に聞くことができる空間で、働きやすい職場だと感じました。また、県庁の見学の際にも仕事の様子を伺い知ることができました。

第2に、県税事務所では税について取り扱っているため、特に他の課や部よりも法律や規則が多く、今大学で学習している法律の知識を活かすことができると感じました。そのため、県庁で働く上で私が活躍できる姿を想像することができました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップは仕事を知る良い機会になると思うので、まだ業界が定まっていない方は積極的に参加したほうが良いと思います。また、業界をいくつか迷っている方も参加することによって自分の適性や働きたい業界が明確になると感じました。さらに、業界が定まっている方も是非長期のインターンシップに参加することで新たな発見ができると思います。私は、3年生でインターンシップを行いました。2年生の時から積極的に行っていたらもっと多くの業界・企業を自分の目で見ると思うので、是非積極的に参加してみてください。応援しています。

インターンシップの経験を通して

茨城県庁 筑西県税事務所

人間文化学科 3年

栗野 日菜子

1. 参加の動機

私は将来の就きたい仕事に公務員を視野に入れて考えていましたが、その具体的な業務内容や仕事環境など、詳しい実態についてはよく知りませんでした。そんな中、夏休みの期間で茨城県庁のインターンシップに参加できることを知り、ぜひこの機会を通して公務員の実態を学びたいと思い、参加を決めました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私が5日間のインターンシップをさせていただいた茨城県筑西市にある茨城県筑西県税事務所は、総務課、課税第一課、課税第二課、収税第一課、収税第二課の5つの課があり、自動車税や法人県民税などの徴収業務を行っています。私は今回のインターンシップで、税徴収に関するデータをパソコンへ入力する作業や書類の作成・整理を行いました。また、直接税金に関する仕事だけでなく、税事務所で使用している公用車の月次利用実績の入力作業や不正軽油の分析試験など、多岐にわたる業務を体験させていただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

このような実際の業務を体験させていただいたことにより、自分の中で仕事の「責任感」に対する意識が変わりました。扱っている情報は非常に機密性の高いものであり、外部に漏らしてしまったり間違った情報で作業を進行してしまったりすると大変なことになってしまいます。しかし、どんなに注意していてもヒューマンエラーが発生してしまうことはあるので、決定するまでの何回ものチェックと発生した場合の迅速な早期対応が重要だそうです。自分の仕事に責任を持って一つの手続きに何段階も手順を踏み、着実に仕事を成し遂げることの大切さを実感しました。

また、県税事務所という立場上、県民との触れ合いの様子は温かいものだけではなく、時には厳しい対面となることもあります。職員が滞納者と直接接することもあり、精神的に疲れてしまう方もいるそうです。公務員になったからといって決して安泰というわけではなく、これはどんな職業の人にも共通していることですが、仕事で辛いことがあったとき、周りの人に相談したり、上手くストレスを解消したりして、体の面でも心の面でも自分の体調を整えることができるようにするのが大切だそう

です。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップでは税事務所独自のシステム機能を使い、本物の書類を取り扱いながら業務を行ったのでとても緊張しましたが、実際の業務を体験させていただいたことで、社会人としての仕事に対する姿勢を学ばせていただくことができました。当初は与えられた仕事をきちんとこなせるかとても不安でしたが、職員の方が優しく丁寧に教えてくださり、作業をされていて出てきた疑問点も質問しやすかったです。以前は公務員の表面的な様子しか知りませんでしたが、県税事務所のインターンシップで具体的な業務内容や職場の雰囲気に触れられたこと、税事務所働いている方々から、本庁と出先機関の仕事の違いや人事異動などのお話を聞くことで、公務員という職業についての理解を深めることができました。

将来目標としている職業が定まれば、それだけ早く対策を練ることができ、同期の人と差をつけることができます。インターンシップの経験はきっと職業選択の助けになると思うので、1、2年生のうちでも積極的にインターンシップに参加してみるのがよいと思います。

県職員としての姿勢

栃木県庁 農政部 畜産振興課

人間文化学科 3年

小島 未 聖

1. 参加の動機

私は地元での就職を考えており、また、以前から行政職について興味はあったものの、業務内容や仕事環境のイメージが掴めていないことに不安感を持っていました。しかしこのインターンシップに参加することによって、インターネット等で調べるだけでは分からない実際の雰囲気や業務の流れを知ることができると考え、出身地である栃木県庁のインターンシップに参加しました。今回のインターンシップにおいて業務体験することで、公務員への理解を深め、現場の方々からお話を聞くことで働くことのイメージを確立することができる。そのような最良の機会ということが参加の決め手となりました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私が配属された農政部畜産振興課では、農家から消費者への生産流通を手助けする業務を行っていました。畜産農家の補助事業などを行う企画経営担当、伝染病などの研究や管理を行う家畜衛生担当、肉や生乳、蜂蜜などの製品の流通や広告を担う生産流通担当、家畜に関する環境整備や管理を行う環境飼料担当という4つのグループに分かれて構成されていました。畜産関係の業務ということもあり、行政職の県職員は少なく獣医師等の専門職の県職員が多い部署であり、専門的な実態を教えてくださいました。

5日間のインターンシップでは、県内における畜産の現状の知識をつけた後に、グループ毎に具体的な業務内容や諸問題の対策に関する事項について学び、資料作成作業を行いました。企画経営担当では、主力になっている事業の制度や関わってくる法制度について幅広くお話しくださいました。家畜衛生担当では伝染病に関する対策や災害時における被害の資料作成を行いました。生産流通担当では県内ブランドのPR戦略を考え、他のインターンシップ生とともに画期的な広報についてのプレゼンテーションを行いました。環境飼料担当では県内の施設へと現地調査に同行させていただき、酪農家の方などのお話を伺い、畜産の課題について考えました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを経て、県庁の印象は大きく変化しました。デスクワークが基本で型にはまった業務を行っ

ていくようなイメージをしていましたが、実際は現地での調査を多く行い、施策をより良い形にしていく為に職員の方々が主体的に物事を行っていく姿を多く拝見しました。忙しいなかでも率先して改善するような行動の必要性を感じました。それに関して行政職の特色でもある異動についてお話を伺う機会が多くあったなかで、職員の方々のあらゆることに挑戦することができるのがやりがいであるという言葉が印象に残りました。今回畜産振興課での体験を行った中でも、業務の多彩さを知ることとなりました。異動の毎に新しい内容を学ぶ環境では常に挑む姿勢が求められるのだらうと思います。

それから課での体験のなかで、コミュニケーションの大切さに気が付くことができました。専門的な業務を行う上では、持つ知識では賅えない範囲というものは当然あり、人と相談することも必要となるでしょう。とりわけ異動の多い環境のなかで業務を全うする為にはやはり周囲とのコミュニケーションが必要であるという印象を持ちました。多くの人と関わりをもち、率先して物事を改善することは、現在の自分の課題点であり、大きな指針を得ることができたと思います。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップへの参加について不安を感じることも多いかと思います。しかしながら実際に参加してみると、職への印象や新たな魅力の発見、自分の課題を見つけるなど貴重な経験を得ることができました。現場で働く人を近くで見られ、教えていただける環境というものは今後の刺激となるのではないかと思います。

最後にご多忙の中、インターンシップの参加を受け入れていただき、ご指導いただきました畜産振興課の皆様方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

インターンシップは学びの場

青森県庁 企画政策部 交通政策課

人間文化学科 3年

田村 絵理

1. 参加の動機

私は将来公務員になりたいので、今夏はどこかの自治体のインターンシップに参加したいと考えていた時、地元、青森県で「UIJターン学生向け・青森県庁ハイブリッド型インターンシップ」が行われると知り、興味を持ちました。私がこのインターンシップに興味を持った理由は2つあります。1つ目は対象が青森県外の学生だからです。私は将来地元に戻るUターン就職か他県で働くIターン就職かで迷っていました。このインターンシップの大きなテーマは県外学生に青森県内で就職してもらうにはどうしたらよいかを考えることだったので、自分がどこで働きたいかを考えるのに最適な機会だと思いました。2つ目は5日間で県庁と民間企業の仕事を体験できるからです。私は公務員志望ゆえに、民間企業のインターンシップや就職活動はあまり考えていませんでした。しかし、このことは自分の視野を狭めるばかりでよくないとも思っていました。本インターンシップでは県職員の仕事だけでなく、県内企業の仕事も見ることができるので、本当に自分は公務員になりたいのかを確かめられるのではないかと思います。

以上2つの理由から参加を決意しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

本インターンシップでは特定の部署で5日間業務に従事するのではなく、色々な課、企業でお世話になりました。5日間で交通政策課での業務、日本原燃株式会社へのヒアリング、イベントの運営の補佐、株式会社青森テレビのインターンシップ、他のインターンシップ生とのグループワーク・プレゼンを行いました。

交通政策課は、新幹線・地域交通グループ、航空グループ、青い森鉄道対策グループに分けられていて、私は青い森鉄道対策グループに配属されました。青い森鉄道とは青森県の地方公共団体と民間企業が合同で出資・経営する鉄道会社です。青森県は線路や駅舎を所有していることで青い森鉄道から線路使用料を徴収したり、利活用推進に取り組んだりするなど関わっています。

私は文書の修正、出向職員の勤務帳簿の作成、事業報告書を基に必要な情報を打ち込む作業を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

「公務員はゼネラリスト」と聞いていた通り数え切れ

ないくらいたくさん仕事があると実感しました。これについて上司は「仕事に対応するために入ってから毎日勉強だよ。」とおっしゃっていました。公務員は仕事が多くて大変そうだと思うと同時に、いくつになっても学び、自分を高められる仕事だと今まで知らなかったやりがいを見出すことが出来ました。また1つの文書を出すのに何重もの確認をすることに驚きました。「県を背負って業務を行っているから、職員は間違いがないように色々な人にチェックしてもらうのが基本」と上司がおっしゃっていて、これが社会人として誇りと責任をもつことだと直に感じる事ができました。

インターンシップを通して、改めて青森の良さに触れ、地元で就職したいと思いましたが、地元就職か他県就職かはっきりとは決めきれませんでした。ここで得た経験を参考に納得のいくまで悩み、結論を出せたらよいと思っています。また、どこの職場も学ぶことばかりで貴重な経験をすることができましたが、私はやはり業務の幅が広い公務員になりたいと心から思えました。自分の気持ちを確かめられてよかったと思っています。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップは職場の雰囲気、業務内容を知り mismatchをなくすことが主な目的と言われることが多いですが、仕事や福利厚生について職員から生の声を聞くことができるほかに、社会人が仕事をする様子を間近で見ることができる貴重な機会だと思います。また、インターンシップ期間中はもちろんですが、その前後でも失礼がないようにビジネスマナーについて調べるといいと思います。学んだこと1つ1つはどこに就職するにしても必ず役に立つので、そういう意味でもインターンシップへの参加は自らを成長させてくれるものだと思います。

「現場」を見ることの大切さ

日立市役所 教育委員会 総務課

人間文化学科 2年

菊池優作

1. 参加の動機

私は子供の頃に、市の図書館や科学館をよく利用していました。また、日立市が長年取り組んでいる「ランドセル無料配布事業」の恩恵も受けました。そのため、日立市には非常に親しみを持っていました。大学生になった今、子供の頃を振り返ってみると、市から受けた恩恵の大部分が「市役所」経由のものであると感じました。こうした恩恵は当たり前のことではなく、必ずそこに「働く人」の存在があると思います。自分の慣れ親しんだ土地で、自分の受けた恩恵を与える側の目線、もしくは事業を動かす側の目線に立つ。そのためには実際の「現場」、特に、自分の慣れ親しんだ土地の行政を経験してみるしかないと思い、日立市役所のインターンシップへ参加することに決めました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私の派遣先である「教育委員会」は、日立市役所からは独立した組織で、教育委員会や教育長を筆頭に、市の教育行政を担っています。私の体験した業務は、市の食育講座「わくわくキッチン」や、職業探検少年団(市の小学生から中学生を対象にした、職業体験のイベント)での指導や引率から、用務員や教員の研修会、市内の小学校に設置されている薬品に関する帳簿のチェック、各自治体の奨学金制度の調査と入力などの事務作業まで、多岐にわたりました。用務員研修では、実際に左官の業務を体験し、壁にモルタルを塗る作業を行いました。職業探検少年団では、引率する側として職員の方と同行し、子供達の安全確保や、指導などの業務を体験しました。

3. インターンシップを通して修得したこと

様々な教育の「現場」を見ることで初めて気付いたことが多くありました。例えば、職業探検少年団で引率をしたことで、子供たちの安全確保をすることの大切さや、はしゃぐ子供達をうまく誘導することの大変さなどを実感しました。左官作業のモルタル塗りでは、実際に作業をしてみると、塗料の重さがずっしりと感じられ、用務員の仕事の大変さを物理的に感じることができました。「百聞は一見に如かず」ということわざにあるように、まずは自分が実際にやってみないとわからないことが多くある、と強く感じました。

実習を通して「教育の裏側」を間近で見ることができ

たのも、大きな収穫の一つです。私は、ランドセル無料配布をはじめとした市の教育事業を、当たり前のことと思っていました。ですが、企画立案・予算審議をする人、庁舎外で実際にイベント運営をする方などの、裏で事業を支える人々、思うように人を動かせなかったりする、といった、その人々の抱える苦勞を知ることにより、今まで持っていた「恩恵を受けられるのは当たり前」という考えを変えることができました。また、教育現場の裏側を知ることにより、改めて、日立市の取り組みを「素晴らしい」と思えるようになりました。「自分が安心・安全に生まれ育つことができた環境。これは、日立市役所の職員の方々をはじめ、教育に関わる数多くの人々の努力があって初めて成り立つものだ」という感想を、今回の実習を通して、抱きました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップというと、「自分にはうまくできるだろうか」と不安になるかもしれません。ですが、今回の実習では受け入れ先の方々が親切に対応してくださったので、進めていくうちに楽しさが不安を上回るようになりました。インターンシップに参加して、「実際のモノ」を見てみることによって初めて得られる気付きが多く、そうした「発見」は「現場」に自分が行って、そこで自分の体を動かしてこそ得られるものです。そうした意味でも、まずは現場に行ってみる、ということが大事です。

今回のインターンシップで得た経験は、有意義かつ楽しい、素晴らしいものでした。最後になりますが、今回わたくしを受け入れてくださった、日立市役所及び学校関係者の皆様方には、心から御礼申し上げます。

なりたい自分の将来像を描く

守谷市役所 都市整備部 都市計画課

人間文化学科 3年

久保 亜香里

1. 参加の動機

私は現在、公務員を目指しており、特に市役所で働くことを希望しています。数多くある市役所の中でも守谷市の都市計画課を選んだのは、自分が実際に利用する地元の公共交通に不満があったからです。具体的には、公共交通の運行経路や運行間隔などです。その公共交通がどのように市役所で管理されているか興味がありました。また、インターンシップに参加する前に、インターネットで都市計画課の業務内容について検索しましたが、内容が難しいため、わからないことも多く、実際に業務を体験することで職員の方に様々なことを伺いたいと思い、参加を希望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

守谷市役所都市整備部都市計画課には2つの担当グループがあります。都市計画事業、景観形成、つくばエクスプレス、公共交通運行事業などの業務を行っているまちづくりグループと開発行為許可及び申請、空き家などの業務を行っている開発指導グループです。

私は5日間のインターンシップでこの2つのグループを歩き来しながらお世話になりました。まちづくりグループでは、65歳以上で守谷市に住民登録をされていて、利用登録完了を受けた方を利用対象者とするデマンド乗合交通の業務を毎日行いました。実際に、私は、申請をされた方が守谷市に住民登録をされているかを調べたり、システムに申請者を登録する作業をしたりしました。また、景観形成、つくばエクスプレス、公共交通の説明を詳しくしていただいたり、実際にこれらの会議を見学させていただいたりしました。開発指導グループでは、ファイル整理の手伝いをしながら、実際に開発完了検査の現場に同行したり、守谷市にある空き家の現状を確認したりしました。

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通じて、市役所の職員がお客様や日々の業務に対して真摯に対応する姿に大変刺激を受けました。都市計画課では、毎日何件もの電話や窓口に来られるお客様がいます。その対応には、基本的な知識は勿論ですが、コミュニケーション能力が重要になってくると思いました。例えば、今回のインターンシップでは、デマンドタクシーを利用される高齢者の方々に対する対

応、開発行為を行う者への対応がありました。両者に対してどのように話したら的確に話が伝わるかは異なってきます。このように、様々な人と接するという点で、コミュニケーション能力は重要になってくると思いました。

職員の方とお話をする中で、市役所では数年単位で人事異動があるので大変だということを知りました。実際に私がお話を伺った方は、4月から都市計画課に配属となっており、未だ戸惑うことも多いと言われていました。また、その方は守谷市について理解するために休みの日に市内を散策したことがあると言われていました。これらから、市役所の業務は日々勉強することが重要であることが分かりました。私は、今回のインターンシップで、市内の他地区のことはほとんど知らないことを実感したので、普段自分が行かない地区について知ることが必要となってくると思いました。

4. 後輩へのアドバイス

長期のインターンシップに行くことは、大変勇気のいることだと思います。しかし、実際にインターンシップに参加することで自分を見つめ直し、将来について考える時間が増えるので、参加するのが良いと思います。また、私は実際に参加する前に都市計画課について調べていきましたが、普段学んでいる分野と異なる分野であるので難しいことも多くありました。そのため、事前にその課についてできる限り調べておくことをお勧めします。

最後になりますが、ご多忙のところインターンシップを受け入れてくださった守谷市役所の皆様には心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

新たな視点から見る水戸市

水戸市役所 市長公室 交通政策課

法律経済学科 3年

佐藤 光 星

1. 参加の動機

私は将来、公務員として働くことを希望しています。また地元である水戸市の行政の働きに触れることも多く、自分もその一員として市に貢献していきたいと考えていました。しかし、水戸市がどのような業務を行っているのか調べることはあっても、その内容を深く知ることや、水戸市で働く具体的なイメージを持つことはできていませんでした。そこで実際の現場を体験し、経験したことを通して、水戸市役所の業務内容を知り、理解を深めていきたいと考え、水戸市のインターンシップを希望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私は水戸市の市長公室交通政策課で5日間インターンシップに参加させていただきました。交通政策課では主に、公共交通の基本計画の策定、自転車利用のための環境整備、バリアフリーの推進、この3つの業務を行っていました。

私が体験させていただいた業務は、令和元年度第1回水戸市バリアフリー環境整備推進協議会全体会議の議事録の内容の入力、全国スマートIC出入交通量の入力为主でそのほかにも大洗鹿島線および水戸線時刻表special versionのシール貼りや、製本の手伝い、切手貼り、封筒への書類入れなども行いました。また、他の市の公共交通への取り組みを参考に、茨城県央定住自立圏勉強会に同行させていただいて、会議の様子を見学したり、茨城大学学生の自転車マナー向上のための情報発信手段について考え、それを課の皆様の前で発表する機会をいただいたりしました。インターンシップの後には、入力した議事録の市のHPへの掲載と、自動車マナー向上のための事業提案を参考にして、実際に事業を行ってくださったため、行った仕事が市に貢献したのだと感じる貴重な経験もすることができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップを通して学んだことは2つあります。

1つ目は水戸市役所の業務内容です。全体の中では極一部の業務であると思いますが、実際に行われている業務を体験させていただき働く上での具体的なイメージを持つことができました。また細かい作業が必要な業務を体

験させていただいて、そのような細かい作業の積み重ねで、情報を得たい人が、より簡単に欲しい情報にアクセスできたり、入力されたデータを見て現状や課題を明らかにできたりするのだと学び、どのような業務でも誰かの役に立つ、やりがいのあるものだと考えました。さらに、職員の方のお話を聞いて、働く課によって行われる業務は全く異なることを知り、さらに市が行っていることについて学んでいく必要があると考えました。

2つ目は情報管理の大切さです。今回、職場を体験させていただいて、実習前に想像していた以上に電話がかかってくることを知りました。またそれに加え、様々な方との関わりもあるため、受け取った情報は必ずメモを取って記録するなど、触れることになる膨大な情報を、しっかり管理することは社会に出る上で必要最低限な能力であると学びました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することで、外部からではわかりにくい、実際の仕事や、職場の雰囲気など様々なことを知ることができます。この経験は、就職への意識を高めたり、課題を見つけたりすることに繋がるため、将来働いていく上で役に立つものになると思います。もちろんこの経験は早ければ早いほど、時間に余裕ができるため、学年を問わず、興味がある分野がある方は積極的にインターンシップに参加することをおすすめします。

最後になりますが、お忙しい中インターンシップを引き受けてくださった水戸市役所の皆様に心より感謝申し上げます。5日間本当にありがとうございました。

「現場」を見て得られるもの

筑西市役所 保健福祉部高齢福祉課／総務部総務課／こども部母子保健課

現代社会学科 2年

山中 楓 可

1. 参加の動機

私は将来地元の市役所に勤め、地元の地域振興に貢献できる人間になりたいと考えています。しかし、市役所職員の方々の業務内容についてあまり知識がなく、市役所で働くということに対して明確なイメージを持つことができませんでした。そこでこのインターンシップを通して職員の仕事を実際に体験し、近くで見てみたいと思いました。インターンシップは3年次に行う場合が多いと思いますが、2年次のうちに体験することで早い段階で「働く」ということのイメージを明確にし、公務員に求められる資質を把握し、自分に不足している資質を大学生活で修得したいと考えたため参加を希望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私は筑西市役所保健福祉部高齢福祉課、総務部総務課、こども部母子保健課にお世話になりました。高齢福祉課では高齢者支援グループと地域包括グループに分かれて介護予防・生活支援サービスなど高齢者の生活に関わる業務を担っています。総務課では文書法制グループ、人事グループ、厚生グループに分かれて人事や職員の保健に関わること、各部課、行政機関等の一般庶務に関することなど多岐にわたる業務を行っています。母子保健課では各種検診や、子育てアドバイザー、女性相談などといったお母さんと赤ちゃんの健康に関する業務を担っています。

高齢福祉課では地域ケア会議、シルバーリハビリ体操への見学をさせていただきました。母子保健課では1歳6か月検診や2歳児歯科検診の見学とお手伝いをさせていただきました。総務課では筑西市の人口減少対策について職員の方々や他大学の学生との意見交換と、筑西市の仕事体験として「筑西市に若者を呼び込むためには」というテーマでの政策立案の体験をさせていただきました。また、最終日には先輩職員の方々との対話の会を設けていただき、市役所職員の業務内容や仕事のやりがいについてなど様々なお話を伺うことができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

この6日間を通して、市役所員として働くために必要な能力を知ることができました。なかでも「コミュニケーション能力」、「他者の気持ちを理解し考える力」、「問題解決能力」の重要性を実感しました。市役所の仕事は庁

舎外の仕事も多く、庁舎内の人間だけでなく外部の方、様々な世代の市民の方と関わる機会が増えます。そのため公務員の業務をする上でコミュニケーション能力や市民の方の立場に立って物事を考えることが重要であることを知りました。また地域ケア会議で高齢者一人一人が抱える問題を解決するためにケースワーカーの方などと共に意見交換をされている現場を見て、相手の気持ちや状況を考慮しながら問題を解決するということの難しさを直に感じました。物事を考える際には、他者の気持ちを理解し考え、多方面の視点から柔軟な思考を持つことが必要であることが分かりました。

今回のインターンシップを通して、社会人として働くために必要な能力を知ることができ、今後の大学生活で意識すべきことを見つけることができたということは私にとって非常に有意義な経験となりました。将来、住民の方の思いに寄り添える人材になるために、これからの活動で物事を多角的な視点から柔軟に捉え、他者の気持ちを理解し考えるということを意識しながら様々な経験を積んでいきたいです。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップへの参加を迷っている人は参加してみるべきだと思います。インターンシップを通して就職について改めて考え直し、「働く」ことへの意識を高め、将来の自分をイメージしやすくなる上に、この経験が将来自分の来を考える判断材料を増やすことができます。また、早い段階から始めることで様々な地域や職種を体験する機会が増え、自分の興味のある仕事が自分に合った仕事なのか、本当に自分がやりたい仕事なのかを考え直すきっかけにもなり、就職のミスマッチを減らすことにも繋がると思います。

最後になりますが、ご多忙の中インターンシップを受け入れてくださった筑西市役所の皆様に心より御礼申し上げます。

6日間本当にありがとうございました。

市民と深く関わる市役所

土浦市役所 こども福祉課

法律経済学科 3年

吉田 紗良

1. 参加の動機

今回、私がインターンシップに参加した目的は、「社会人として働く」という具体的なイメージを掴むことです。私は、大学卒業後の進路として公務員を希望しています。一口に公務員と言っても様々な役割や種類が存在しますが、特に地方公務員に興味があります。インターンシップに参加すれば、業務内容、職場や職員の方々の雰囲気、市役所と市民の距離感などを知ることが出来るのではないかと思います、地元の市役所での参加を決めました。

市役所職員等の地方公務員は数年ごとに他の部署へ異動することが多く、様々な分野での業務を経験することになるそうです。そのような中、私がこども福祉課を希望したのは、家族法を専攻としていることも理由ですが、専門性の高い分野で業務に携わるときにはどのような心構えが必要かを学ぶという目的もありました。専門分野や興味関心のある分野が配属される部署と必ずしも関連しているわけではないからです。

2. 派遣先の概要と業務内容

私は、8月19日から23日までの5日間、土浦市役所こども福祉課にお世話になりました。こども福祉課には、児童福祉係、保育係、少子化対策室の、2つの係と1つの室があります。児童福祉係は、子育て支援、児童手当、家庭児童相談等、児童福祉に関する業務を行い、保育係は、保育所や認定こども園、地域型保育、認可外保育施設に関する業務や保育所等の施設整備、維持管理に関する業務を行っています。少子化対策室は、土浦市の子育て世代包括支援センターの運営や妊娠届の受付及び母子手帳の交付、結婚支援等、少子化対策に関する業務を行っています。

1日目は、土浦市保健センターにて、赤ちゃんの身体計測に訪れた親子に遊び場の紹介を行う様子を見学し、その後庁舎にて、各係、室の業務内容等のお話を聞きました。2日目は、市役所からの手紙を折り畳んだり、封筒へ入れて糊付けしたりする作業を行い、午後は児童館の催し物をお手伝いし、訪れた児童とふれあいました。3日目は、子育て支援センターにて催し物のお手伝いをして、1歳未満の子を持つお母さん達が交流する様子を見学しました。4日目は、保育所で3歳児のクラスに「先生」として訪問させて頂き、子どもたちと遊んだり話し

たりしました。その後庁舎に戻り、家庭児童相談員として児童虐待に関わる方からお話を聞きました。5日目は、子育て交流サロンで行われた乳幼児ふれあい交流に参加し、中学生と共に、赤ちゃんの抱き方、オムツの替え方、着替えの仕方を学びました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回、インターンシップに参加して、業務の一部を経験したり、間近で見学したりさせて頂きました。市役所では、現在だけではなく、少子化対策室のように地域の将来像についても考えながら施策が推進されており、多角的な視点から市民を支えているということを知りました。それに加えて、役所の窓口に限らず、電話、通知等の手紙、場合によっては訪問をして、子どもを取り巻く家庭環境の現状を把握し適切な支援を行うこと、保育所や児童館、児童相談所等の各関係施設との連携、様々な人とコミュニケーションを図る大切さを知りました。これらの気づきから、将来、自分が社会人として働く姿の輪郭を想像出来ました。業務が非常に多種多様であることから、具体的とまでは言わずともイメージを掴むという目標は達成したと思います。職場や職員の方同士の雰囲気を実際に体感し、市役所が施設等を通して市民と深く関わっていることを確認出来たことは、私にとって非常に有意義な経験となりました。

4. 後輩へのアドバイス

何事も体験することで得られるものがあります。インターンシップも例外ではないと思います。初めは様々な不安から緊張してしまうと思いますが、職員の方が丁寧に対応して下さいます。また、私は施設へ見学に赴く際、公用車で送って頂くことが多かったのですが、車内で個別に職員の方とお話しする機会が数回ありました。ずっと受け身になるのではなく、自分から声をかければ、意外なお話が聞けるかもしれません。質問があれば積極的にすることもお勧めします。

国際協力と地域とのかかわり

JICA筑波 連携推進課

現代社会学科 2年

海老根 弘 人

1. 参加の動機

私は地元・地域に貢献したいという思いがあります。しかし、一言で地域に貢献したいといってもその取り組み方はたくさんあります。例えば、県庁や市役所といった自治体職員だけでなく、地元の民間企業など、様々な立場からのアプローチがあり、それぞれの立場が持つ強みやできることが異なっています。また、行政や観光、福祉など地域への関わり方も無数にあると考えます。私は、そのような数多くある選択肢の中から、地域振興に携わるうえでどの分野を専攻していくべきか悩んでいました。

そんな中、授業の中でJICAの取り組みを知り、国際協力が地域振興につながるのではないかと感じました。そこで、実際に地域の企業や、地方自治体との連携を行っているJICA筑波へのインターンシップに参加することが今後の進路を考えていくうえで非常に参考になると感じ、今回のインターンシップを志望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

JICA（独立行政法人国際協力開発機構）は、国内に15の拠点を持ち、日本政府のODA（政府開発援助）のうち2ヶ国援助を実施する機関です。また、世界150以上の国や地域で事業を展開しています（JICA筑波PROFILE,2018）。JICA筑波は、農業分野の国際協力の実施機関として茨城県と栃木県を所管し、途上国への技術協力事業である研修員の受け入れ事業やボランティア派遣のほか、JICAの事業や国際協力について一般の人に知ってもらうための活動を行っています。

私は今回、10日間のインターンシップを実施し、主にイベント補助やJICA筑波のHP・FBの記事作成を行いました。JICA筑波では国際協力の必要性を広める国際協力教育の一環として、つくば市内の小学生を対象とした「ちびっこ博士」や、JICA職員の家族に向けた「ファミリーデー」というイベントを定期的に行っています。そのイベント内で参加した小学生に向け、JICAについて紙芝居を用いて簡単な説明をしました。また、マラウイから来た研修員と一緒に現地の遊びを体験するコーナーがあり、私は司会進行を担当しました。HP・FBの記事作成では、「ちびっこ博士」といったJICA筑波が開催したイベントの報告記事を書き、JICA筑波のHP・FBに掲載していただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は今回のインターンシップに参加するまで、国際協力がなぜ必要なのか明確な答えを持つことができませんでした。援助が必要な人々に力を貸すことは確かに大事なことだが、日本も少子高齢化などの様々な深刻な問題に直面している現在において、国際協力の意義とは何だろうかと考えていました。しかしながら、今回のインターンシップを通して国際協力は外交の1つであり、援助を通じて途上国とのつながりをつくるという役割があることを知り、グローバル化が進行する現代でまさに必要とされていることだと感じました。また、地域と国際協力の関係についても知ることができました。茨城県を例に挙げると、東海村で干しイモの製造・販売に携わっている照沼勝一商店(株)がタンザニアで干しイモ事業を行っており、海外への市場開拓と同時にタンザニアの食糧問題の改善にも貢献しています。国際協力では、援助を必要とする途上国の人々へ力を貸すだけでなく、支援を行う側にとってもメリットがある、win-winの関係性を築くことができるという点が面白いと感じました。

4. 後輩へのアドバイス

少しでも自分の関心のある職種や分野があるのであれば、ぜひ積極的にインターンシップに参加することをお勧めします。実際に業務を体験しそこで働く方々のお話を聞くことは、今後の進路を考えるうえできっと参考になるはずです。

インターンシップ報告書 (第2部)

民間企業インターンシップ

メディア系インターンシップ2019 学生たちは何を学んだのか

人文社会科学部教授 村上 信夫

まずご多忙の中、学生を引き受けて頂いた各社に、心から御礼を申し上げます。

お陰様で、参加した学生が大きく成長しました。

本学におけるメディア系インターンシップは、2012年、筆者が着任した年に始まります。国立大学で唯一メディアのコースを有し、全国から学生が集って来ているにも関わらず、現場との接点が少なく、「茨城大ではテレビや新聞、出版は無理だ」と、就活を諦める学生が、多くいました。

そこで、「インターンシップを充実させ、メディア各社へ就職する学生を増やしたい」と考えた学部長に筆者が呼ばれ、派遣先を増やし、メディア系インターンシップを充実させるよう依頼されたのです。

前年の派遣先は県内2社のみ。まず在水戸の新聞各社の総局支局を訪ねて相談、さらに筆者が仕事をしたり、本を出したりした東京のテレビ、テレビ制作会社、出版各社などをお願いして回りました。

それから7年、テレビ、ラジオ、出版、新聞など、今年は20社（募集ベース）になりました。特に、新聞各社の水戸総局支局に引き受けて頂いている状況は、他に類をみない充実ぶりで、ありがたいことだと感謝しております。

以後、メディアを志望するならまずインターンシップという雰囲気も生まれ、全国紙、地方紙、テレビ局、広告、PRなどメディア企業への就職実績も目に見えて上がりました。

メディア系インターンシップでは、期間中、参加した学生に毎日、日誌を提出し、学生—教員—派遣先の上司との間で情報共有を行います。日誌には「事実をこだわる」「つき詰める覚悟」「責任感」などの言葉が記され、現場での学びが貴重なことが伝わります。

全部の企業で先輩との懇談の場を設けて頂いて

おり、その際に「全国をまわれ」「もっと新聞を読め、テレビのニュースを見ろ」と就活に対する考えの甘さを一喝された学生も多くいます。これも大きな学びです。

その一方で、問題もあります。東京の出版社に派遣予定の学生が、直前に辞退しました。その学生は東京に親戚、友人がなくホテルを予約したものの、高額なため親が反対したのです。本人は自分の貯金で払うので問題ないと考えていたようですが、両親の反対は強く、結局、辞退。相手先企業に大変失礼なこととなってしまいました。

東京でのインターンシップは生活費、交通費がかかり、中にはホテルやウイクリーマンションを借りるケースもあります。さらのその期間、バイトが出来ないためお金を稼げないと学生には大きな負担です。

そのことは説明会などで何度も説明していますが、折角、意欲と機会がありながら、水戸という立地のため阻まれます。しかし、メディアを志望する場合、どうしても東京が中心となります。立地のハンディを乗り越え、現場を見て学ぶことも大事だといえます。その支援は、今後の大きな課題です。

メディアの現場は理想と現実が混在しています。そのリアルを知ることは、入社後のアンマッチを防ぐために必要なことです。メディア大変革の時代、メディアの未来はますます面白く、メディアを目指す学生はぜひインターンシップに参加し、現場の風を肌で感じて欲しいと思います。

何事もトライ

株式会社 ジェイ・スポーツ

現代社会学科 3年

篠塚 純貴

1. 参加の動機

私は、元来映像制作に興味があった。所属するゼミでもCMを製作するなど、映像制作の一端に触れてきて、将来もそのような仕事ができればと心の隅で思っていた。また、趣味として野球観戦が好きだった。現地で観戦することも時折あったが、ほとんどがテレビ中継での観戦だった。野球中継がどのように制作されているのかも興味があった。

そこで、スポーツを専門に取り扱うジェイ・スポーツの体験学習に参加することで、テレビ局の基本的な業務を学ぶと同時に、スポーツを取り扱うメディアが一体どういうものなのか知りたく思い、体験学習への参加を決意した。

2. 派遣先の概要と業務内容

ジェイ・スポーツは、日本で唯一の4チャンネルマルチ編成のスポーツテレビ局。テレビ放送のほかに、ジェイ・スポーツオンデマンドでの配信やスポーツグッズの販売、旬のコラムやYahoo!へのニュース配信など、スポーツに関する様々な事業を展開している。今年、ラグビーワールドカップ2019日本大会の全48試合を生中継したことでも有名だ。

体験学習に参加したのは7日間。大きくインプットフェーズとアウトプットフェーズの2つに分かれた構成だった。

インプットフェーズでは、ジェイ・スポーツの概要や、編成・渉外・事業企画などについて学び、座学が中心だった。

アウトプットフェーズでは、番組制作のスタジオ見学やプロデューサーへのインタビュー、プロ野球の現地観戦などを行い、最終日には、社長・役員らを前にプレゼンテーションを行った。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回の体験学習を通して学んだことの1つに、「グループ内の意見をどのようにまとめ、決定していくか」ということがある。ジェイ・スポーツのプロモーション動画制作。30秒の動画を製作するにあたって、どの素材を選ぶか、どの順番でつなげるかも重要だったが、グループ内の意見をどのようにブラッシュアップしていくかに非常に苦勞した。もちろん他のインターン生もスポーツ

が好きで、中には自分以上にスポーツが好きな人もいた中で、「いかに自分のクリエイティブを伝え、納得してもらおうか」を第一に考えていた。しかし、それを意識するあまり、制作の序盤では、他の意見に耳を傾けることがあまりできなかった。プロモーション動画制作という実習が、グループで行う実習であったことの意味を考えたときに、制作前段階のコンセプトメイク・素材集め・進行中の編集も、全てメンバーの協力があって進行できているということを再確認した。自分一人では、動画の制作など到底出来ない。それ以外にも、多くの人の協力があって初めて動画制作が出来ている、という一番重要なことを改めて確認することができた。

また、体験学習の中で一番感じたことは、「自分の好きなことを仕事にする」ことの楽しさだ。研修での講義は、どの仕事も魅力的に感じたし、自分の仕事を楽しくそうに話す社員の方々の様子が鮮明に思い出される。プロ野球観戦やサッカー番組の見学は、それらのスポーツが好きだからこそ伝わってくる熱意・やりがいを感じた。自分の仕事に誇りを持っていることがとても伝わってきた。

4. 後輩へのアドバイス

映像制作やスポーツに興味を持っていれば、絶対に参加すべきである。ここでしか体験できない様々なことを経験させてもらった。充実したプログラムだからこそ、学ぶこともたくさんあったし、楽しさも人一倍あった。ジェイ・スポーツの体験学習は、少数精鋭で、周りの大学は東京の有名私大ばかり。緊張もするが、いずれは就活でこの環境で勝負すると考えれば、慣れておくという意味でも、体験学習に参加するメリットは大きい。

興味が1mmでもあれば、インターンシップに参加する意義はある。やって後悔することはない。何事もまずはトライしてみる事が大切。

インターンシップで学んだこと

株式会社 やんかわ商店

現代社会学科 2年

高橋 葵

1. 参加の動機

将来、マスコミ業界への就職を考えている。そのため、様々なマスコミ関連の業種を実際に経験することで自身のスキルアップや適性判断に繋がると考えたからだ。自分の可能性を広げる一歩として以前から興味があったテレビ制作の現場を学べる会社を探した。その中で、バラエティ番組を中心に数多くの番組を制作するやんかわ商店さまでインターンシップをさせていただくことにした。

もうひとつの動機は、就職活動へ向けて2年生のこの時期からでも主体的に動いていくべきだと考えたからだ。2020年度以降、就職協定廃止の動きが見られるので、私達学生も就職について早め早めの対策を行うことが重要だと考えたからだ。来年からの本格的な就活を視野に入れ、自身の経験値を上げるために参加を決めた。

2. 派遣先の概要と業務内容

実際のテレビ番組のロケや収録の準備・同行し、主にアシスタントディレクターさんのサポートを行った。また、映像制作課題として港区の魅力をアピールするプロモーション動画を制作した。

- 1 日目 オリエンテーション・映像制作課題のテーマ決め
- 2 日目 映像制作課題の構成決めと撮影・次の日のロケ準備
- 3 日目 テレビ埼玉「いたくろむらせのオンとオフ」ロケ同行・映像制作課題の編集作業
- 4 日目 「バラ売り」会議同行・映像制作課題の編集作業
- 5 日目 「バラ売り」の撮影準備・映像制作課題のプレビュー
- 6 日目 映像制作課題の再編集・「バラ売り」収録準備・収録
- 7 日目 コミュニケーション研修

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを終えて痛感したのは、主体的に行動する重要性だ。上司から指示されたことだけをするのではなく、何をすればより作業がスムーズに進むのか常に考え自分から行動を起こさなければいけないと学んだ。インターンシップの始めの数日は言われたことだけで、自分から仕事をもらいにくい積極性がなかった。しかし、一緒にインターンシップに参加した先輩が自ら動く姿を見て、私もこのように動かなければ、という気持ちになった。それからは、「何かやることはありますか？」という一言が言えるようになった。この姿勢は今後も意識していきたい。

また、アシスタントディレクターさんをはじめスタッフの仕事がすぐ近くで見て、綿密な準備を行うことの大切さを学んだ。ロケや収録にあたり何日も前から、当日の流れ、必要な物、想定される事態を考慮し準備を進めていた。台本の内容を頭に入れるだけでなく、コーナー

が始まる何分前に何を準備し誰が動かなければいけないか、など台本プラスアルファの情報を理解している必要があるのだと感じた。綿密な準備の大切さは、大学生活にも当てはまることではないかと考えた。ゼミなどの授業でも事前の調査と準備がより深い理解と調査力の向上に繋がると思う。

映像制作課題に取り組み受け手側の目線を考えることで、今までよりも広い視野を得ることができた。港区の魅力発信をテーマに、誰にどうやって伝えるのか企画段階から構想するのは初めての経験だった。どの角度から撮影したら見やすい映像になるか、どのカットが必要か、取材ではどのようなことを聞き出せば良いかなど、取材・撮影・編集作業を通して、どうすれば受け手に分かりやすく伝わるかを常に考えることができた。客観的に物事を見ることができるようになったと感じている。

最終日に受講したコミュニケーション研修で習得したのは、良い第一印象持たせるスキルと簡潔な文で相手に情報を伝えるスキルだ。自分が話す動画を見て、思いの外暗い印象だったことに驚いた。社会に出てから第一印象はいつそう重要になるので、きはきはきと自然な笑顔でコミュニケーションを取る努力をしようと思う。また、取材オファーや上司への伝言などを例に、簡潔にかつ情報を正確に伝えるためのスキルを学んだ。どの情報を伝えるのか取捨選択し、どの情報を先に持つていくのか、研修を終えてからは、メールや電話対応をする際に強く意識するようになった。

マスコミに関するだけでなく社会人としてのマナーも学んだ。挨拶・時間厳守・敬語はもちろん、気遣いの重要性を多く学んだ。資料のホチキス留めでは出っ張りを潰して引っかからないようにするなど細やかな気遣いを上司の方々から教えていただいた。収録に参加した際、ディレクターさんが使う道具をセットから離れたところに置いていたら、ディレクターさんから「もっと近くに置いて」と指摘を受けた。周りを良く見て、気遣いを忘れないことが重要だと実感した。

4. 後輩へのアドバイス

多くの方がおっしゃっているように、インターンシップに早すぎるということは絶対はないので少しでも興味があれば1・2年生でも参加するべきだと思います。ですが、重要なのは「参加すること」ではなく、「参加して何をするか」だと考えます。それは、人脈が欲しいでも良いし、具体的に技術を学びたいでも良いし、何かしら目的を持って参加して欲しいです。参加することだけに満足せず、インターンシップを通してたくさんの方を吸収したら良いと思います。

受け入れ先企業の方々には、私達に多くの時間を割いて指導にあたってくれます。感謝の気持ちを忘れず、謙虚な姿勢でインターンシップに参加してください！

人と差をつける準備

株式会社 やんかわ商店

現代社会学科 3年

久保 葵

1. 参加の動機

私はテレビ業界を目指しており、その中でも最もやりたいのがバラエティ番組である。やんかわ商店さんはまさにバラエティ番組を制作している会社。昨年のインターンシップ報告会でも充実したインターンシップであることが感じられた。さらに、ゼミで行っている新年会のゲストとしてやんかわ商店のAD・清水さんが来られた時、インターンシップに行くことを約束した。

2. 派遣先の概要と業務内容

やんかわ商店は主にバラエティ番組を制作する制作会社である。

インターンシップは1週間にわたって行われたが、その中の主な活動は2つ。

1つ目は港区のプロモーション動画の制作。これはやんかわ商店が港区のシティプロモーションクルーとして認定を受けた上で行うもの。港区の魅力を発信できるようにどこでどんな動画を撮るか企画し、撮影場所にアポを取り（今回は会社が行った）撮影・編集・プレビューを行っていく。私達は麻布十番商店街の古き良きお店を紹介し、港区の固定されたイメージを変えてもらえるような動画を制作した。

2つ目は実際の現場に行き、ADさんの仕事をするというもの。テレビ埼玉「いたくろむらせのオンとオフ」では事前に買い出しをし、当日1時間の外ロケではほとんど荷物持ちのみ。Kawaiian TV「バラ売り」の生放送では、事前にカンペの準備や買い出し、当日は楽屋やスタジオの準備やケータリング買い出しなど。

3. インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップでは、事前の準備の重要性が学べた。それは番組の収録現場がスムーズに動くことができるためである。例えば、上で述べたテレビ埼玉「いたくろむらせのオンとオフ」。参加したロケは「突撃隣の朝ごはん」といって、朝の直売所に行って食材を買い、突撃したお家で朝ご飯をご馳走してもらおう、というもの。これは前回のロケの教訓でADさんが、アポなしで急に家に上がりこむのにスリッパが必要で買ってほしいと依頼があった。実際には使わなかったのだが、もしも現場で「スリッパがほしい」となった場合、用意ができていたらすぐに取り出せる。番組の進行もスムーズに

いき、スタッフの準備の良さに会社としての信頼も得ることができる。つまり次の機会にもつながるといっても過言ではないのだ。

4. 後輩へのアドバイス

まず、インターンシップでは遠慮なくたくさん質問をすること。熱心に取り組んでいることがインターンシップ先の人に伝わるからだ。そして、自分にできることをいち早く見つける努力をする。事前の準備段階で「これも準備しておいたほうがいいのか」と気付けば、ADさんに聞いてやること。他の人より先に気付くことができるのは、番組のためにもなり、自分のためにもなる。

また、基本的なこととして、「インターンシップで体験をしている」という考えではなく、「その会社の一員として働いている」という自覚を持つこと。インターンシップで来ているから、というのは相手から見れば関係ない。仕事ぶりはもちろん、挨拶などの礼儀もきちんとするべきだ。これらはどこの業種であろうと重要なことなので覚えておいてほしい。

テレコムスタッフの一員として

テレコムスタッフ

現代社会学科 1年

今野 亜美

1. 参加の動機

幼い頃からテレビ業界に興味がありました。番組を視聴することは簡単ですが、その制作側を知る機会はほとんどありませんでした。そこで、今回のインターンシップでは数日間に渡って現場に携わることができる貴重な経験になると思い、参加しました。

インターネットで検索したり、お話を聞いたりするだけでは知るのが難しいことを実際の現場に立ち会い、肌で感じてみたかったです。また、自らの積極性とコミュニケーション次第ではインターンシップを通して新たな人脈を築くことができるチャンスになると思いました。

2. 派遣先の概要と業務内容

テレコムスタッフでは「世界の車窓から」や「みらい遺産Human×Lands」などのテレビ番組や「盆唄」などの映画を制作しています。その中でも私は5日間「チャリダー★快汗！サイクルクリニック」というBS1で放送されている番組を担当しました。

初日は映像編集(オフライン編集)とテロップ入れや色味の調整を行う編集(オンライン編集)の2つの編集工程を見学しました。4日目に担当番組の収録があったので前日、前々日は主に収録の準備をしました。衣装の準備、足りない備品やケータリングの買い出しに行きました。隙間時間には今後の番組のためのリサーチをしていました。打ち合わせにも参加させていただき、そこでは収録当日に誰がどの役割を担うかと動き、タイムスケジュールを確認しました。収録当日はスタジオのセッティングや人手が不足している部分のサポートを行いながら、この方は収録中に何をしているのかなど教えていただきました。最終日には音の編集(MA編集)を見学させていただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私はこの5日間で「気遣い」は良い結果に繋がるために必要不可欠だと強く感じました。どの場面でも周りの方の行動に気を配り、気持ちよく効率的に動けるために自分は何ができるかを常に考えている必要があります。特に収録の日にはより気遣いの重要性、思っていたよりも気遣いできていない悔しさを感じました。スタッフの方がしていたのはディレクターがカンペを書こうとしているのを見たらすぐにペンを渡す、誰かが捜し物をして

いる様子だったら声をかけるなど小さな気遣いだけでもするとしらないでは大違いのことでした。その場に慣れている方の行動に注目したり、どこに目を向けているのかを伺ったりして気遣いのポイントを得てきました。メディアの場面に限らず、今後も心得たことを行動に移していきたいです。

さらに関わるすべての人の連携と確認抜きでは番組制作は成り立たないことが分かりました。連携し合うためには自分が何をするのか、何をしたのかのひとりひとりの意思表示と伝達が欠かせません。私も確認を繰り返し、正確な報告を忘れないようにしました。日頃からの連携や確認が信頼を築き、収録の際のスムーズさやよりよい番組の完成へと繋がっていきます。

4. 後輩へのアドバイス

1年生でインターンシップに参加して本当に良かったです。スタッフの方と共に動いたりしていくことであの時こういうことができた、こうすれば良かったと気がつくことが多くありました。気づきを手にした状態で次のインターンシップに取り組めるため、ワンランク上の学びや経験を得られると思います。

また、一度実際の現場を体験したというのは大きな強みになります。「あなたもテレコムスタッフの一員であるという気持ちを持って振る舞いましょう」と言われましたが緊張で、なかなか簡単にはできませんでした。日を重ねるにつれて、雰囲気慣れ、徐々に堂々と振る舞うことができるようになりました。積極的に声をかけたり、質問をしたりしなければ得られない情報もたくさん隠れています。堂々としなければこのような行動もなかなかできないため、緊張や恥ずかしさを捨てるのが大切です。

めったに見られないメディアの世界に飛び込める貴重な機会になります。1年生では早すぎるなんてことはないと思います。自分自身の興味や好奇心をぜひ行動に移してほしいです。

テレビ制作と向き合う人々

トラスト・ネットワーク

現代社会学科 3年

久保 葵

1. 参加の動機

将来の志望がテレビ業界である私にとって、トラスト・ネットワークさんのインターンシップに参加することは、テレビ業界を実際目で見ることのできるいい機会になると思った。さらに、ゼミのOGの先輩が務めている会社でもあり、憧れの会社の1つであった。

2. 派遣先の概要と業務内容

トラスト・ネットワークは主に報道番組を制作しているテレビ朝日グループの制作会社である。

1 DAYインターンシップなので、1日の流れを紹介する。

10時～ 自己紹介・会社説明@トラスト・ネットワーク本社

12時～ 昼食@テレビ朝日社食

13時～17時 放送準備、回線センター、マスター見学@テレビ朝日

見学では各箇所をまわって説明を受けたり、質問をしたりする。放送準備では提供音声の収録、回線センターでは各地方に設置されたカメラを動かす、マスターでは番組表の書き換えなどの体験をした。

3. インターンシップを通して修得したこと

この1日で感じたのは、テレビ番組ひとつに対して関わる人の多さと、その人たちの仕事への真剣さと厳しさだ。テレビ業界の裏方の仕事ですぐ頭に浮かぶのは、企画を考えたり、本番に向けて準備をしたり、出演者のケアだったりかもしれない。しかし、放送準備では放送予定の番組のCMのファイリングで視聴者が観て問題ないかを細かくチェックしている。マスターでは映像を流している間、ずっと見張って緊急のニュースがあれば対応して速報を出している。番組を作ったら終了、ということは絶対にありえないが、ついつい見逃しがちな行程を知ることができた。企画を考えてからマスターから流すまで、テレビ業界を目指す人間として、こういった人も携わって放送できている、ということは忘れてはいけないと思った。

また、今回見学させていただいた場所で働く方々は、放送の無事故3000日を記録している。これを達成できたのも、仕事に向き合う姿勢が真剣で、厳しさを持ち合

わせているからだ。上で述べたCMのチェックは特に大事で、お金がかかっている。2人がかりで音の大きさやサブリミナルなどのチェックをしているものもある。マスターも全国の視聴者に届ける瞬間を担っている。生放送という失敗の許されない場面では、的確な指示と落ち着いた対応で臨んでいた。常に緊張感を持って仕事をしている人がいるからこそ、テレビは楽しんで観ることができるのだと分かった。

4. 後輩へのアドバイス

将来どの業界を目指そうか迷っている人にはおすすめ。なぜなら、1日で制作会社が行っていることを知ることができ、その一部の仕事を実際に見学できるからだ。ただし、将来をテレビ業界に決めている人ならば、この1 DAYインターンシップのみでは満足した結果は得られないだろう。そういった人には、もっと現場の仕事に参加させてもらえるようなインターンシップにも参加することをおすすめする。

「軸」

茨城放送

現代社会学科 3年

庄 司 果 織

1. 参加の動機

高校生の頃、地元のFM局で、ラジオパーソナリティを務めたことがある。それがきっかけで、ラジオの仕事に興味を抱いた。しかし、ラジオといえばパーソナリティという認識しかなかったため、実際は、どのような人たちがいて、どんな仕事があるのかということを知りたいと思い、今回参加した。

2. 派遣先の概要と業務内容

ラジオを通して、茨城県内の市政・事件・イベントなどの情報を伝える。

業務内容は、主に、取材に同行しメモを取ったり、写真撮影をしたりなどのアシスタント。その他、新聞スクラップや野菜、果物の高値をアナウンサーに読んでもらうための市況記入、イベント情報記入などの情報収集。また、番組で使用する曲をすぐ探し出せるようにレコードとCDに番号が書かれたシールを貼る。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、修得したことは3つある。

まず、1つ目は、「何を伝えたいのか」という軸を持つということだ。特にメディアは、「相手に伝える」仕事である。ここの軸がぶれてしまうと、結局、何を伝えたいのかが分からない番組になってしまい、リスナーは離れていく。常にこの意識を持つことが大切だと学んだ。

2つ目は、「インプット」である。相手（リスナー）に伝わるように伝えるためには、まず、自分自身が理解・解釈しなければならない。そのためには、インプットが必要不可欠である。私は、このインプットが足りていないことに気がついた。何も情報を入れないまま取材に同行してしまっただけに、「何のことについて話しているのか、分からない」という状況に陥ったことがある。聞いたことがない単語が聞こえてきて、そこで思考がストップ。もし、自分で原稿を書け、と言われたら、何も伝えることはできなかっただろう。取材に行く際は、「知っている」ことが前提だ。そのため、インプットは、かなり大事ということを実感した。インプットということに関連して、何でも「興味」を抱くことも大切であると学んだ。普段、自分があまり触れないことに対して、アンテナを高くしておくこと。そうすることで、インプッ

トの量も幅も増えるだろう。

3つ目は、「挨拶」である。もっとも基本的なことであるが、もっとも重要なことでもある。人を相手にする仕事のため、人間関係の構築が大事である。挨拶は、その入り口であると学んだ。茨城放送の総務の方に「新人のうちには、できているのは当たり前だが、これが、年月を重ねる毎にできなくなってしまう人がいる」と教わった。自然にできるように普段から、身につけておこうと思った。

4. 後輩へのアドバイス

初めは、分からないことだらけで不安に思うかもしれない。しかし、それを恐れるのではなく、何でも吸収しようという姿勢でいることが大切だ。毎日、新しい知識が入ってくる。それは自分の糧になると思う。

意識しておくべきことは、基本的な“挨拶”。ただ言えば良いというものではない。しっかり相手の目を見て、元気に笑顔で言うこと。そして、大事だな、自分の今までの考えとは違うな、と思ったことは、ひたすらメモを取る。担当の方から、様々なことを学ぶ。その際に、理解できないことがでてくると思う。そこでも、遠慮せずに積極的に質問してみると良い。

ただ、何となく、指示された作業をするのではなく、「この仕事は何のためにやっているのか」・「働いている人は、どんな動きをしているのか」など、考えながら学んでいくと良い。そうすることで、もっと知りたい、これはどういうことだろう、など好奇心が湧き、茨城放送や働いている人のことを深く知ることができると思う。

「伝える」という仕事

朝日新聞 水戸総局

現代社会学科 3年

生 田 梨 帆

1. 参加の動機

私は記者の仕事を経験したいと思い、今回のインターンシップ参加を決めました。以前から記者の仕事に興味を持っていました。興味を持ったきっかけは、昨年ラジオ局のインターンシップに行った時です。展示を取材してニュース原稿を書くという体験をさせていただきました。取材してきたことを伝えるという仕事は難しかったのですが、とてもやりがいを感じました。その時から記者の仕事に興味を持ち、新聞社のインターンシップに参加してみたいと思っていました。

また、朝日新聞にした理由は、私のゼミで開かれる懇親会に朝日新聞の記者の方がゲストとして参加してください、お仕事の話をしてくださいました。お話の内容に魅力を感じ、朝日新聞のインターンシップに参加しようと思いました。

2. 派遣先の概要と業務内容

朝日新聞社は日刊の全国紙です。発行部数は610万部で、業界では2番目に多いです。44の総局と222の支局を持ち、国内外の取材網は302拠点あります。私はそのうちの水戸総局にインターンシップに行きました。

1日目は、朝日新聞水戸総局総局長である蛭牟田繁さまに朝日新聞社のお話を伺いました。朝日新聞での働き方についてお話を伺ったり、インターンシップ参加生からの質問に答えていただきました。次に編集業務を見学しました。次の日の紙面が出来上がっていく様子を拝見しました。

2日目は、阿見町にある予科練記念館に行き、記念館を見学した後、元予科練練習生である戸張礼記さまのお話を聞きました。

3日目は、茨城県立歴史館に記者の方と一緒に取材に行きました。その後、実際に取材してきたことをもとに記事を書いて、添削していただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私がこのインターンシップで一番感じたことは、伝えることの難しさです。実際に取材に行って記事を書いてみるという体験を通して、様々なことを学びました。取材に行ったときは、取材の仕方がわからなかったのですが、聞いたり見たりしたことは、細かくメモをしたつもりでした。しかし、記事を書くときに足りない情報が出てき

て、もっと細かく取材しておけばよかったということもありました。そして書き上げた記事を読んでも、情報不足もありましたが、文章力が足りず、読みづらくて、わかりにくい記事になってしまいました。記者の鹿野幹男さまから「記事を書くときには、読者が行ったり来たりしないように1回読んだだけで意味が伝わる記事を書くように」とアドバイスいただきました。

全体を通して、記事を書くときは一番伝えたい事について絞る必要があるとご講評いただきました。そして文章力を上げるために新聞記事を模写するという方法を教えていただきました。後日、教えていただいた方法を実践してみました。シンポジウムの記事を選んで模写してみると、何がこのシンポジウムの中で一番伝えたかったことなのか、一度記事を読むだけでわかりました。また読者に分かりやすく伝えるために必要な要素は何なのか、何を取材しないといけないのかも模写を通してわかりました。

これらの経験から、どんなにすごいことを取材しても、伝える力がなければ読者には伝わらないことを実感し、改めて情報を伝えることの難しさを感じました。それと同時にやりがいのある仕事だと思いました。3日間貴重な体験をさせていただきました。

4. 後輩へのアドバイス

目指す業界が決まっている人も迷っている人もインターンシップに行った方がいいと思いました。今回のインターンシップで業務を経験し、実際に働いている方の話を聞いてみて、イメージと違っていただけ部分もあり、新しい魅力を発見することができました。現場に行ってみて初めて分かることも多いため、少しでも気になる業界があるならインターンシップに行くべだと思いました。

相手からの景色を想像する記者の仕事

朝日新聞 水戸総局

現代社会学科 3年

岸本靖子

1. 参加の動機

私は、新聞記者になることが将来の志望だ。そのため、自分の抱えている記者職へのイメージが、インターンシップへの参加でより明確に分かると思い、参加を希望した。ゼミの活動の中で記者さんたちに会わせていただく機会はあれど、仕事をされている姿を間近で見る機会はなかなかないので、記者の方々が日々どんな思いを抱え具体的にどんなお仕事をしているのか、非常に興味があった。

なぜ朝日新聞社を選んだかということ、9月3日から5日間、私は東京本社でインターンに参加していて、そこで抱いた朝日新聞社の印象と、朝日新聞水戸総局との印象がどう合致し、どう異なっているのかを確かめたかったからだ。

2. 派遣先の概要と業務内容

<1日目>

朝刊紙面と総局長による講義・質問、翌日朝刊の確認作業、懇親会

<2日目>

「予科練平和祈念館」見学・戦争体験者戸張さんにご講演いただく

<3日目>

茨城県立歴史館取材、原稿執筆、講評・質問

3. インターンシップを通して修得したこと

記者の方が、記事の読者の感覚をととても意識されていることが、最も大きな発見だった。

1日目のプログラムでは、朝日新聞社の紙面作りに関して、総局で講義を受けた。時代の中で、差別・偏見が注視されるようになり、マスメディアに対する風当たりも厳しい。女の子も写っている子どもたちの写真に「ぼくらの」という見出しの表現が使われるといけない、など細かい配慮がなされていた。女性が家事をする前提になってしまっているという理由で「家事に協力的な夫」という表現も良くないとされていた。会社を挙げて、マニュアルを作ったりして、丁寧に紙面の中に誤解を生む表現がないかをチェックしている姿勢を見て刺激を受けた。

また、3日目には茨城県立歴史館に取材し、原稿を執筆した。例えば展示品の「金メダル」に関する記述も、

どのくらいの大きさだったか、現物を目の前にしているのは文章を書く私なので、質感、色味、重さなどできるだけ細かく相手にも伝わる具体的な情報の伝え方は、非常に大事だと感じ、今後文章を書く際に最大の注意を図れるようになった。

書く作業に限らず、「相手をより意識すること」が不可欠だと感じる場面がたくさんあった。

4. 後輩へのアドバイス

自分が気になったことは、絶対に質問した方がいいと思う。記者の方々は学生の質問に対して、丁寧に、分かりやすい言葉で答えようとしてくださるのでためらう必要は全くない！

挨拶は、はきはきと大きな声で。

立ち居振る舞いは、かしこまらず、自然体でいいと思う。

懇親会などでどんどん記者さんとお話しすべき。私は今回、記者さんたちの学生時代や、就職活動に関してたくさんお話しした。懇親会後は御礼メールを送り、自分の気持ちを伝えると良いと思う。

新聞社のインターンは、取材に同行、それをもとに原稿を執筆するという実践的な体験ができる場合があるので、自分で課題を設定し、積極的に参加すればするほど力になると思う。

就活を始める上での、足掛かり

朝日新聞 水戸総局

人間文化学科 3年

高瀬寛人

1. 参加の動機

大学3年生になって、政治や経済に関心を持ち、共同通信の記者として働いておられた古賀先生のゼミに参加した。授業を受けるうちに、記者の仕事に惹かれるようになった。そのため、実際に記者として働いている人に会って話を聞き、自分に何が足りていないのか知りたいと思い、インターンシップに参加することを決めた。以前から朝日新聞を購読しており、企業や記事の内容に、親しみを持っていたため、今回の朝日新聞水戸支局の訪問に応募させていただいた。

2. 派遣先の概要と業務内容

朝日新聞社は、各都道府県に総局を置いており、県内にある支局を取りまとめている。訪問した水戸総局は、茨城県の取材網を束ねる拠点であり、県内にある6つの支局、つくば支局、土浦支局、鹿島支局、日立支局、取手支局と連絡をとり、記事を執筆、編集している。

インターンシップの行程

1日目：水戸総局に伺い、総局長さんとお話しし、編集作業を見学。その後、総局長さんと、記者さんお三方に、懇談会を開いていただいた。

2日目：阿見町町にある「予科練平和和記館」を訪問。記念館の展示を見た後、予科練生の生き残りである戸張さんに、インタビューをした。

3日目：茨城県立歴史館の展示会を訪れ、記者の取材に同行。実際に記事を書き、記者の方から添削を受ける。

3. インターンシップを通して修得したこと

若手記者の方から、年次の高い方まで、話す機会に恵まれ、また企業側から、そのように心遣いを頂けたおかげもあり、様々な立場から、記者として働くためのアドバイスを頂けた。

朝日新聞の記者の方々とは話して印象に残ったことは、出版社からきた方、ほかの新聞社から移った方など様々なキャリアを経て、現在の仕事に就いていることだった。また、記者の方々との会話から、記事を書く上でのコツを教えていただき、就職活動に向かう姿勢を意識させら

れた。

4. 後輩へのアドバイス

インターンを通じて、朝日新聞のどなたからも、本当に親身になって、就職活動の相談して頂けたことに驚いた。訪問する際は、企業のかたに失礼がないよう、自分で勉強できる部分は、しっかり準備していくことを心掛けるべきだと思う。志望する会社の社風を知り、興味のある職種の人に積極的に会うことが、就活のスタートラインに立つことだと感じた。

話を聞くということ

朝日新聞 水戸総局

現代社会学科 3年

野手 さくら

1. 参加の動機

ゼミ活動で何度か朝日新聞社で働く方にお会いする機会があった中で、毎回抱く印象が、「仕事を楽しんでいる」ということだ。もともと新聞社に対して堅いイメージを持っていた私の中にあった印象とは180度変わるほど、皆さん気さくで、仕事に対する思いが強い。そんな方が多く働く朝日新聞社で実際に就職体験をしてみたいと思い、参加した。

2. 派遣先の概要と業務内容

朝日新聞水戸総局は、日本各地に置かれている総局の1つ。茨城県内には水戸総局のほかにも、6つの支局がある。

業務内容は主に、蛭牟田総局長によるお話、予科練平和記念館の見学、戸張礼紀さんのご講演、茨城県立歴史館での取材、記事執筆。お話を聞いて質問をするという点で、取材の在り方を学んだ3日間だった。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップでは、主に人の話を聞くことに専念した3日間だったと思う。その中で実際に記事を書いたのは3日目の取材だけだった。しかし、全てにおいて、もしも記事を書くとしたら…と考えながら、質問をしていった。

その中で学んだことが、2つある。

まず1つ目は、取材にあたって、前知識をどこまで入れることができるかが、取材を効率的に行うカギだということだ。

3日目の歴史観の取材で感じたことなのだが、取材をするにあたって、話を聞きながら、展示を見ながら、記事の構想を考えながらと、あらゆることを考えていなければいけない。記事にすることをイメージしながら話を聞かないと、取材漏れが出てきてしまう。かといって、展示の見学と取材を同時並行で行わないと、情景を伝えることができなかつたり、大切な情報を逃したりすることも考えられる。限られた時間の中でこれらのことを網羅するとなると、どれだけ事前に知識を蓄えておけるかがとても重要なポイントであることが分かった。

2つ目は、記事を書く際に、何かに強くフォーカスすることだ。取材中、たくさんの情報が頭の中に入ってくる。特に今回の様に展示会の取材では、何十にも及ぶ展

示物があり、どれも魅力的なものばかりだ。私は、限られた新聞記事の中でできるだけ多くの情報を読者に伝えようと考えてしまっていたが、それは見たまま、聞いたままの情報でしかない。自分の中で、何が面白いのか、来場者は何に惹かれているのか、どれか1つを見に行くとしたら…という視点で、焦点を当てることで、メリハリのある分が書けるということを学んだ。

今回のインターンシップは、懇親会を含めて、人の話を聞くことを徹底して行った3日間だったと思う。ただ話を聞くのではなく、自分の知りたいこと、また、その場にはいない第三者が知りたいだろうと思うことを考えながら、頭をフル回転させていたと実感する。新聞社の取材に限らず、聞きたいことを聞くということの大切さと難しさに気づかされた。そして、それを受け入れてもらえる環境であったことに心から感謝したい。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップは、初めて行く場所で、たくさんの大人が働く中で、初めて会う将来のライバルとともに切磋琢磨するという点で、緊張する。しかし、そんな中でも大切にしなければならないと思うのが、「思ったことは何でも言う」ということ。これは、朝日新聞水戸総局長の蛭牟田さんから頂いた言葉だ。ある程度の緊張感が必要だと思う。しかし、せっかく参加したインターンシップなので、疑問はすべて解決し、自分のできる全力を出して、今の実力を確かめるという意味でも、堅くなりすぎずに、ありのままの自分で、自分の気持ちに素直に取り組むことも重要なのではないかと思う。

記者としての貴重な体験

東京新聞 水戸支局

現代社会学科 3年

小野 嶺 奈

1. 参加の動機

参加の動機は2つある。

1つ目は、メディア業界に興味があったからだ。ゼミの活動で出版社、広告、新聞記者の方々にお会いした。そこで、お仕事に大きなプライドと責任を持ちながら、仕事を楽しんでいる姿に憧れを持つようになった。新聞記者が自分に合っている業界なのかということ、記者としての仕事を肌で感じたいと思った。

2つ目は周りの人に強く勧められたからだ。教授から「新聞社に行った経験は何事にも活かせる」と勧められた。また、昨年同社にお世話になった先輩方のインターンシップ報告を聞いて、実際に記事を書いたり取材に行かせていただけたりすることを知った。「長期受け入れかつ、実際の仕事を体験できるのは東京新聞しかない」と思った。

2. 派遣先の概要と業務内容

・5 daysインターンシップ

- 1日目 東京新聞の概要説明、記者さんに同行、記者クラブの会見に参加、記事執筆の見学
- 2日目 茨城ロボッツ選手の知事表敬訪問の取材に同行、記事執筆、県議会の広聴、添削
- 3日目 ひたち海浜公園へ取材同行、記事執筆と添削、いばらきの秋梨おもてなしフェアへ取材同行
- 4日目 いばらきの秋梨おもてなしフェアの取材×2、記事執筆と添削
- 5日目 校閲

3. インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して、自分の知識不足と細部までこだわる力が足りていないことを実感した。

そう思ったきっかけは、インターンシップ1日目の記者会見に参加させていただいたことだ。強風によって大洗の原子炉の冷却施設の一部が倒壊し、県庁の記者クラブで会見が行われることになった。送られてきた資料には、専門用語も使われており、正直分からないことばかりだった。私は福島県出身で原発については分かっているつもりだったが、圧倒的にインプットが足りないと痛感した。

記者会見では各社細かい詳細を質問していて、中には

鋭い質問をしている記者もいた。調べたら分かることは皆頭に入っているということは大前提だ。限られた時間で、的確に鋭い質問をするプロ。それが記者であり、そのためには日々勉強や経験を重ねていき、人として成長しなければいけないと痛感した体験だった。

また、新聞記事は影響力があり大きな責任が問われる。読む人に正確な文章を誤解無く伝えるために、細部までこだわっていらっしやると感じた。取材をする際に同行させていただいた記者の方は、固有名詞の漢字や読み方、状況、値段など細かく何度も聞いていた。特に印象に残っているのは年齢だけではなく、生年月日も聞いていたことだ。取材から新聞記事として紙面に掲載される間に誕生日を迎える方は、年齢だけお聞きすると掲載日には間違った数字を載せてしまうことになるからだと教えていただいた。

そして、文章を3回添削していただいた。その際に、自分の文章と記者の方の文章はまったく違うことが分かった。例えば、日常では「かなり」などの表現を使うことも、記事ではどのくらいの大きさなのか数字を使って大きさなどの表現していた。現場に行った記者しか分からないことを、記事を見た人が想像できるように明確な表現を使うことが求められるという。

支局では主に茨城の地域面を担当されていた。私はインターンシップに参加する前まで事件や事故を中心に取材していると思っていたが、地域面の取材対象は地域の出来事や季節ものが多かった。5日間を通して、一般人が絶対に入ることができない場面に参加することができ、たくさんの市民との出会いがあり、自分が知らなかった茨城県の魅力を発見した。自分の知らない土地に行き、外からの目線で新鮮な気持ちで取材する記者という仕事は毎日刺激的で魅力的だと感じた。

4. 後輩へのアドバイス

- ・自分の興味のある業界はできるだけインターンシップに参加し、そこで働いてる人にたくさんお話を伺うなど、肌で感じるといいと思います。
- ・時間を割いてくださり貴重な経験をさせていただいているので、失礼のない態度で。挨拶は大きな声で、笑顔。

情報の最先端である新聞社

読売新聞社 水戸支局

現代社会学科 3年

久保田 雄 大

1. 参加の動機

今回インターンシップに参加したのは、情報の最前線を体験したかったためである。現在、情報は無料で手軽に手に入れることができる。自分も日頃のニュースは、ネットやテレビ、Twitterのトレンドから得ている。自分の周りを見ても紙の新聞を読む若年層は多くないと感じる。しかしネットニュースは、元をたどれば新聞記事の転用である。ゆえに新聞記者の重要性を強く感じている。また私は、新聞や情報を取り巻くビジネスモデルに興味があり、様々な産業で起こっている電子化の波に新聞業界はどう対応しているのかを、現場を見て知りたい。取材の仕方や文章の書き方などを体験し、情報の扱い方の基本を学ぶために、読売新聞のインターンシップに参加した。

2. 派遣先の概要と業務内容

読売新聞水戸市支局では、主に読売新聞茨城県版の紙面の作成を行っている。入社後、各新聞社の朝刊を確認する。他社に抜かれた記事が無いかをチェックするためだ。その後、取材に赴く。取材が終わると記事を執筆し、デスクのチェックを受ける。今回、体験させていただいたのは、主に取材と記事執筆の実践練習だ。1日目は水戸支局内で読売新聞社について支局長の本間雅江さんから読売新聞について教えていただいた。2日目は、水戸地方裁判所にて裁判員裁判の傍聴をし、裁判記事を書く練習を行った。読売新聞水戸支局記者の岩井友里さんに裁判を傍聴する際の取材の技術を学んだ。3日目は、茨城県庁で県政記者クラブを見学し、加えて県議会の傍聴をした。読売新聞水戸支局記者の山波愛さんに県政担当記者の説明をしていただいた。4日目は、支局長の本間さんとともに茨城町にある印刷工場アサガミプレスいばらき株式会社を見学し、取締役工場長の大友勲さんにお話を伺った。それをもとに、茨城大学の学生がインターンシップでアサガミプレスを視察したという記事を執筆した。最終日には、アダストリアみとアリーナで行われた茨城ロボットの試合の取材を同行させていただいた。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、新聞記事の文章の書き方の基本を修得することができた。必要な情報から書く。つまり情報が逆三角形になるイメージで記事を書

くということが重要である。また記事の執筆の練習で、5W1Hを意識しながら、前文に入れる情報を取捨選択し、記事の核となる部分をどうまとめるかが特に意識すべきことだと学んだ。

加えて、裁判の取材で、新聞記者の必要性を実感した。裁判を傍聴したことがある人は、多くないだろう。自分の関心のない話題の情報を収集する人は少ないからだ。しかしその情報がないことが原因で我々の生活に不利が生じることもあるだろう。だからこそ新聞は必要で、新聞記者が我々の目と耳の代替になっていると思った。報じることが新聞の役割であることを改めて実感した取材だった。事件のニュースバリューによって、報じられる経過にも差があり、報道のされ方によっても事件の規模や社会における重大さなどが分かるということも併せて学んだ。

4. 後輩へのアドバイス

インターンを受けてみて様々なことが学べた。そして報道が我々の生活にどう関わっているか、身をもって体験することができた。私は志望先がはっきりと絞れていないが、メディア業界で就職したい場合さまざまな経験が役に立つと考え、新聞社のインターンシップを受けた。また自分の文章を良くしたいという思いもあった。先日朝日新聞の人事部の方の講演を受けた際、就職活動では分かりやすい日本語を用いるべきであることを学んだ。分かりやすい日本語とは新聞に載っている言葉である。実際に自分で記事を書いてみて、いい意味で自分の言葉の実力不足を痛感するとともに、書き方についても学べた。是非、新聞社のインターンを受けてみてはいかがだろうか。

新聞記者を知る

読売新聞 水戸支局

現代社会学科 3年

篠塚純貴

1. 参加の動機

私がこのインターンシップに参加した理由は、新聞記者の仕事を生で見たかったからだ。

これまで、所属するゼミや講演会で現役の新聞記者にお会いし、仕事に関するお話を数々お聞きしたが、実際にはどのような仕事なのか、自分の目で確かめたくなった。その時、このインターンシップを知り、参加することを決めた。

日本全国の人が読んでいる新聞記事。それらがどのような工程を経て、記事になるのか。記事の書き方と共に知りたかった。また、記者が行う取材を直接見てみたかった。取材の所作、テクニックなどを観察して、自分のこれからに生かせないかと思ったからだ。

2. 派遣先の概要と業務内容

インターンシップに参加したのは5日間。

読売新聞水戸支局では、主に県版の紙面作成を行っている。朝刊の確認や、取材。取材が終われば記事の執筆。デスクのチェックを受ける。

今回、体験させていただいたのは、主に取材と記事執筆の実践練習だ。1日目は、読売新聞社の概要を、水戸支局長の本間雅江さんから教えていただいた。2日目は、水戸地方裁判所にて裁判員裁判の傍聴をし、裁判記事を書く練習を行った。午前には水戸支局記者の岩井さんに裁判を傍聴する際の取材の技術を学び、午後には記事執筆の練習を行った。3日目は、茨城県庁で県政記者クラブを訪問し、その後水戸支局記者の山波愛さんの付き添いのもと県議会の傍聴をした。4日目は、支局長の本間さんとともに、茨城町にある印刷工場「アサガミプレスいばらき」を訪れ、取締役工場長の大友勲さんにお話を伺い、施設の見学を行った。支局へ帰った後は、茨城大学の学生がインターンシップで印刷工場を視察したという趣旨の記事の執筆をした。最終日には、水戸市・アダストリアみとアリーナで行われたBリーグの茨城ロボッツの試合の取材に同行させていただき、試合を観戦した。試合終了後には、監督記者会見にも同行させていただいた。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップ中、3回にわたって記事執筆の練習を行った。その時実感したのは、人に伝わる文章を書くということの難しさだ。新聞社の記事は、書く練

習をすればするほど、文章の基本に忠実だなと感じた。5W1Hの徹底や、逆三角形と呼ばれる新聞記事の型を崩さないことだ。新聞記事が読みやすいのも、記事執筆の教育が社内で叩き込まれ、出稿時にもデスクのチェックを通して記事としての品質が保証されているのだなと感じた。

また、支局長の本間さんのお話で印象に残っているのが、新聞記者のやりがいとして「新聞記事1つで社会の流れが変わること」と挙げていたことだ。例えば、読売新聞教育部のすっぱ抜いた医学部入試問題。まさにその記事1つで、社会の流れが大きく変わった。様々なメディアで取り上げられるようになり、新聞記者をやっている良かったと強く感じたという。新聞記者の仕事に対する誇りに触れた一幕だった。

4. 後輩へのアドバイス

今回のインターンシップのプログラムで、裁判の傍聴・県議会の傍聴・印刷工場の見学・プロスポーツの取材見学など、普段の生活では滅多にできない様々なことを経験することができた。ここまで多くの場所を訪れることができたのも、新聞社のインターンシップだからである。たまたま今回のインターンシップがそうだっただけかもしれないが、新聞記者になれば、様々な場所に取材に行く。その一端に触れることができたのではないかと、思う。

また、メディアの基本である新聞社のインターンシップに参加したことで、他メディアへの見方も変わる。なぜ新聞記事が信頼されているのか。なぜ新聞記者の取材が一流と呼ばれているのか。その理由を自分の肌で実感することができた。これを読んでいるあなたも、ぜひ新聞社のインターンシップに参加し、新聞記者の仕事を感じてもらいたいと思う。

PRの仕事を経験してみよう

株式会社フロンティア・エンタープライズ

現代社会学科 3年

田村花世

1. 参加の動機

これから就職活動をしていくにあたり、興味のある仕事がいかにどのような業務をしているのか、自分で見たり聞いたりして学びたいと考えたため。1日だけでは分からないことも多いと思ったので、1週間以上の日数を受け入れてもらえるところを探して参加した。

2. 派遣先の概要と業務内容

PR活動、セールスプロモーション、マーケティング戦略などのコンサルティングもしている代理店で、多くのインターンシップ生を長期で受け入れている。

主に、クライアントに送るためのPR活動の広告換算額と掲載一覧記事をまとめたレポートを作成する業務を経験した。

私は、埼玉にある川越氷川神社の縁結び風鈴のイベントと、ディズニーチャンネルおよびディズニー XDを担当した。その他に掲載依頼先に送ったリリース資料の電話でのフォローや、発売予定のDVDや配信予定のテレビ番組の視聴などを行った。

3. インターンシップを通して修得したこと

PRの仕事について自分が理解していない部分が多かったことを実感した。

レポート作成は、期間中毎日やっていた。量が多く、時間もかかる地道な作業であると思った。しかし、ひとつひとつの記事を読んでみたり、転載先を見てみたりすることで、送ったリリースは同じなのに内容が違ったりといった新たな発見があった。与えられたことをただやるのではなく、その中でも自分で工夫してさらに良くできることがたくさんあると感じた。また、PRの仕事について知り、働く人の想いややりがいを感じることもできた。

これから就職して仕事をするにあたって、どうしても大変なことや辛いと思うことがあると思う。今回のインターンを通して、今まで逃げていたことに向き合い、自分がすべきことをしっかり考えなければならぬと痛感した。今後は、考えるだけではなく必ず行動に移して意欲的に活動していきたい。また、何事もプラスに考えるようにしようと感じた。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに参加する前に、その職種や会社、

体験させていただける業務内容についてよく調べておくことが大切である。

私の場合は1日に何時間業務を行うかを自分で自由に決めることができたが、会社の雰囲気が分かるし、社員の方に気を遣わせてしまうことがあるため、始業から終業までいた方がいい。

実際に業務を経験している中で、想像と違うと思うことがあるかもしれないが、貴重な体験をさせていただいていることに変わりはないので、プラスに考えられるような工夫をすることが大事である。

また、時間は限られているのでどうすれば有効に時間を使えるのかを常に考え、たくさん質問をして、学べることを全て吸収できるように、緊張しすぎずコミュニケーションと笑顔を絶やさずに励んだほうがいい。

地域の可能性の発見

株式会社 筑波銀行

大学院 人文社会科学研究所 1年

ZENG SUMENG

1. 参加の動機

私がインターンシップに参加したのは、銀行の仕事に興味を持っているからです。大学院を修了した後に、日本で就職しようと考えている私は、今の時期から自分が興味を持っている業界に対して、仕事の内容、働く意義などについてきちんと知っておく方が良いと考えました。研究についても金融の内容を扱っているのです、日本の金融業がどのような機能を持ち、実践しているのか知りたかったです。研究している金融の内容が実際はどのようなのか、現場では何がどのように行われているのかを直接知って行動したいと思い、インターンシップに参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

私のインターンシップの受け入れ先は筑波銀行です。地域振興部の方が窓口になっていただき、この部署で取り組む内容を体験することができました。筑波銀行では地方活性化のために、『あゆみ』というプロジェクトが行われています。その具体的な取り組みとして、筑西市観光資源調査発掘協議会、かすみがうら市役所、かすみキッチン、北茨城市観光協会及び株式会社JTB 茨城南支店など色々な企業、組織との連携があり、テーマに応じて柔軟に対応しながら様々な活動が展開されています。インターンシップの期間中、実際に北茨城市、筑西市、かすみがうら市に足を運び、一緒に活動しました。北茨城市では海と街並みを活かしたノルディック・ウォーキングの企画運営について意見したほか、筑西市では郷土料理を観光資源にできないかという挑戦を目の当たりにすることができました。かすみがうら市ではレンコンのさまざまな活用について意見交換し、実にさまざまな活動があることを実感しました。何より、融資が必要となるか否かではなく、その前段階となるさまざまな地域の活動に目を向けることの大切さを肌で感じ、あらためて金融業の奥深さを知ることになりました。

3. インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して学んだこととして、地方銀行は実に幅広く地域社会に精通し、理解を深めようとする努力を積み重ねているのだと感じました。普段銀行の店頭で見るイメージとは大きく異なります。しかしこれも、大切な業務のひとつです。実際に、今回訪問し

たかすみがうら市の「かすみキッチン」は、筑波銀行が出資した企業です。「かすみキッチン」は食事を提供するだけでなく、サイクリングなどで訪れるインバウンド顧客に対し、霞ヶ浦の土産も提供していますが、その動向や地域への波及効果も銀行は理解しなければなりません。大企業向けの融資ばかりでなく、あるいは財務諸表の分析や担保物件の調査に留まらない、丹念な中小企業の理解や経営者の能力が開花するための支援も、大切な取り組みなのだと感じました。その点を、今回のインターンシップを通して、実感しました。

4. 後輩へのアドバイス

留学生である私が、日本企業のインターンシップに参加するのは、今回が初めてでした。解らないことも多く、不安もありましたが、足を運んだことのない地域に赴き目で見ることで、さまざまな発見がありました。地方銀行の挑戦を肌で感じるだけでなく、地域の魅力の発信の重要性や、企業が成長することの期待など、さまざま考える機会になりました。大変勉強になりました。

街づくりからみる銀行員の姿勢

株式会社 筑波銀行

大学院 人文社会科学研究所 1年

QIN GUANQIAO

1. 参加の動機

インターンシップに参加した理由は、地方銀行ひいては金融業界の仕事現場を見たかったからです。大学院修了後は日本での就職を考えている私は、就職する業界はまだ決めていないので、まずはこのインターンシップを通じて金融業界の様子を知りたいと思いました。前年度のインターンシップ報告書を読むと、このインターンシップに参加することで銀行の立ち位置や業務内容を知ることができるということがわかりました。また、金融論の授業を受けた経験から、授業中に議論した銀行の内容と実際の様子がどれくらい一致するのかも知りたかったです。こうした理由から、このインターンシップに参加することを決意しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

派遣先の株式会社筑波銀行は、茨城県を基盤に関東エリアで業務を展開している地方銀行です。同行はファースト・コール・バンクを目指して人々の生活や産業の発展に貢献していきます。東日本大震災により、茨城県でも広範な地域にわたって甚大な被害が生じ、東京電力福島第一原発の事故などで風評被害が生じました。こうした背景から、同行地域振興部では2013年3月から2016年3月までの「地域復興支援プロジェクト『あゆみ』」を策定し、2016年4月からは、このプロジェクトをさらに継続発展させ、地域経済や地域社会の面的な復興・振興に貢献していきます。今回のインターンシップは、同行と連携している各地方公共団体及び各地方における筑波銀行の取引先を訪問することを中心に展開していました。普段あまり行ったことのない北茨城市・つくば市・筑西市・かすみがうら市へ足を運び、地方振興に向ける取り組みの実態を見学しました。また、各地方公共団体や企業の経営者と話し合い、その取り組みのきっかけや効果などを伺いました。このほか同行の本部ビルにて銀行の業務内容を体験し、事例に応じて提案するグループワークもさせて頂きました。

3. インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップで修得したことの1つは、地方経済発展と地方銀行は密接に関連していることです。普段あまり実感できませんが、地方経済発展は地方銀行の営業の基盤である一方、地方銀行の存在は地方経済の発

展を促進しています。そのため、同行地域振興部は、積極的に地域創生に取り組んでいます。修得したもう1つのことは市場のニーズに応じて事業を発展することです。例えば、株式会社ひのでやは、時代の変遷とともに変化したサツマイモへの需要と印象を見据え、高付加価値のサツマイモ系商品を開発することで、事業を拡大できました。こうしたことを目の当たりにすることができたのは、収穫でした。そして修得した3つ目は、銀行員にとって提案する力の重要性です。取引先の法人及び個人に有用な提案をできれば、銀行自体の収益にもつながります。この5日間で同行の方々からの提案する姿勢を見て、とても勉強になりました。

4. 後輩へのアドバイス

当初、銀行のことをどれくらい学べるか不安もありましたが、実際に参加してみると、学ぶことの多いインターンシップでした。銀行業または公務員関係に興味のある人には特におすすめです。銀行と地方公共団体の基本業務からこれから取り組んでいく事業も知ることが出来ます。企業経営をしたい人も、各企業の経営者との話からも、いろいろ有意義な話を伺えると思います。将来の進路をまだ決めていない人も、このインターンシップを通じて地方金融業界の実態を見ることが出来ますので、就職活動の際に参考になると思います。

地域の実情から何が提案できるか

株式会社 筑波銀行

人間文化学科 3年

若菜美里

1. 参加の動機

私が筑波銀行のインターンシップに参加した理由は、銀行の業務について興味があったからです。以前より金融機関への興味は持っていたものの、就きたい業界は定まっていませんでした。インターンシップを通じて金融業界、銀行について理解を深め、自身の職業選択へ役立たいと考え参加しました。銀行の業務としてまず思い浮かぶ窓口など営業店での業務について学ぶだけでなく、地方自治体や民間企業への訪問等を通してさまざまな業界・企業に触れることができる点も魅力的であると感じ、参加を決めました。

2. 派遣先の概要と業務内容

派遣先である筑波銀行は茨城県を基盤に東京都、千葉県、栃木県、埼玉県に展開する地方銀行です。同行は“First Call Bank”、つまり「最初に相談したい銀行」を実現すべく、質の高い金融サービスの提供を行っています。さらに、東日本大震災以降、「地域復興支援プロジェクト『あゆみ』」を策定し、地域の復興支援を行ってきました。2016年4月からは、このプロジェクトを継続発展させた「地域復興支援プロジェクト『あゆみ』」を策定し、県内外自治体・学校との連携や地域の企業への支援、SDGsに向けた再生可能エネルギーへの融資・投資、子育て支援、ダイバーシティへの対応など多岐に渡って地域社会・経済の発展へ寄与しています。

本インターンシップでは筑波銀行の業務として、融資や定期、信託商品だけでなく人材や後継者の育成、ビジネスマッチングといった商品・サービスも提供していることや、お客様の顕在的・潜在的なニーズに対して解決策を提供する、提案型の営業を行っていることを学び、提案型の営業をモデルケースを用いて体験しました。さらに、『あゆみ』プロジェクトについて説明していただくだけではなく、実際に協定を結んでいる自治体を実際に訪問し、地方創生への取り組みや、自治体と連携し支援を行う同行の業務について学びました。具体的には、北茨城市民夏まつりの運営補助や市内見学、筑西市のモニターツアーへの参加、かすみがうら市役所への訪問を行いました。6次産業化を進める企業にも訪問し、経営者の方からお話を伺いました。同時に、そういった企業へ融資や投資を行うだけでなく、アドバイスや提案を行う同行の業務についても直接目にすることができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

本インターンシップを通して学んだことの1つは、話の伺い方や提案の仕方です。例えばかすみがうら市では、サイクリングプログラムの運営や地域特産物の販売、レストランの運営を行っている、(株)かすみがうら未来づくりカンパニーを訪問し、社長にお話を伺いました。社長と行員のやり取りの中で、「訪日外国人にも訪れてもらうにはどうしたらよいか」といった投げかけや「レストランで提供している野菜の販売やレシピの提供等を行ったらどうか」といった提案を行っている姿が印象に残りました。これらを見学する中で、銀行側の勧めたいものを押し付けるのではなく、お客様の話をきちんと伺った上で提案を行うことが重要だと学びました。目に見える問題点やニーズだけでなく、お客様も気づいていない潜在的な問題点やニーズを見つけ出し、解決策を提案することが銀行員には求められており、そのためには相手の話を引き出すような聞き方や質問が必要になります。お客様に関する情報や、接することのできる時間が限られている中で、適切な提案を行うためには、相談しやすく第一に頼られるような信頼関係を築くこと、その上で金融や経済に関する知識だけでなく、社会で起きている出来事や市町村ごとの特徴、その業界では常識とされているような知識等も幅広く身に付けておくことが必要になると感じました。

4. 後輩へのアドバイス

先に述べたように、事前に銀行や訪問先の市町村について調べてから参加することで、金融や経済を専攻していなくても、より深い質問や理解に繋がると身をもって感じました。銀行業務について学ぶことができるだけでなく、地方自治体や民間企業の取り組みなど多岐に学ぶことのできるインターンシップです。金融系に興味のある方だけでなく、公務員や他の業界を志望している方にとっても有意義なインターンシップになると思います。

関心から始めるインターンシップ

社会福祉法人 三富福祉会

人間文化学科 3年

白 須 遥 香

1. 参加の動機

私はこのインターンシップに至るまで、就職についてあまり考えたことがなかった。そのため、今回の訪問先は将来自分は何になりたいかではなく、いま何に関心があるのかに基づいて選択した。私は身体や知的に障害がある人に対する支援について関心を持っていたので、この三富福祉法人に問い合わせたところ、快く受け入れてくださった。訪問先が決まった当初は、実習を通して現場に従事する方々について知り自分が社会人となって働く姿を少しでも思い描くことが出来れば良いと思っていたが、企業について調べてみると、法人理念である「その人らしく生きる」ための支援に次第に関心を寄せるようになった。そこで今回は、自分が実際に障害者福祉の分野の職業で働くのかよりも、この分野で働く人々がどのようにして利用者の方々と関係を構築しているのかという視点で、インターンシップに参加した。

2. 派遣先の概要と業務内容

社会福祉法人三富福祉会では「その人らしく生きる」ための支援を日々行っている。障害があることによって特別なニーズが生じるが、それに応えなければならない。なぜなら、普通の生活を断念したりその人らしく生きることを諦めたりする理由にはならないからである。障害があっても主体的に生きて自己実現を可能にするために、法人の各事業で働く職員は特別なニーズに応えることを使命として働いている。

5日間にわたるインターンシップは3か所の事業所で行った。1日目の実習は「サポートセンターハロハロー番館」という中程度の障害を持つ利用者が通う事業所から始まった。業務内容としては、午前の活動の書道と午後の活動の音楽鑑賞の準備と活動自体への参加、食事や身体の異常確認の支援の見学が主であった。2日目は「ワーキングハウスプロペラ」という作業場が併設された雑貨店で行われた。メモ帳やハガキの原料となる木の皮を、利用者と共に叩きながら加工した。午後は1日目の事業所に戻り午後の活動に参加した。1日目とは異なり、2日目の実習は利用者の方々の目線に立った活動内容であった。3日目からは重度の障害を持つ利用者が通う障害者支援施設「白樺園」で実習を行った。午前と午後の活動があることは1日目の活動と変わらない。しかし、この支援施設ではそれらの活動よりは1日3回の食

事や入浴などの最低限の生活支援が大きな比重を占めていた。そのため、活動内容もそれらの見学や手伝いが主であった。5日目の実習は活動場所は同じであったが、この日は年に一度の白樺祭が開催された。担当の職員に付いて行き運営の手伝いをすることや、利用者と一緒に出店を回るなどの指示は予め受けていたものの、この日に限っては何より祭り自体を楽しむことが大切だった。

3. インターンシップを通して修得したこと

実習前から気になっていた「その人らしく生きる」という理念について、5日間を通してそれは利用者だけに向けたものではないということに気づいた。午前や午後の活動では横になったり、出て行ってしまったりする利用者がいた。しかし、職員の方々も音楽の時間の選曲中に昼休みに紛失した物を突然探しに行ってしまうなど、利用者には劣らず自由に振舞っていた。利用者との対面のやり取りに加え、立場は関係なくその場の雰囲気共有することで、互いに居心地の良い環境が成り立つということを学んだ。最初は利用者の行動に戸惑うことが多かった。前述した気づきから、深いことは考えずそれらの行動に向き合うことを試みると、嬉しそうに伝えてくれたり、顔や名前を覚えてもらえたりした。実習前に彼らが見せる行動の一つ一つには意味があると説明を受けていたが、そのことを身をもって知ることが出来たのは良い経験となった。また、障害の程度に関係なく利用者は自分たちと同じように人格を持った一人の人間であるとも仰っていたので、利用者からの反応はなくても敬意をもって接することを心掛けた。

4. 後輩へのアドバイス

数年後に就職活動が控えていると分かっている、自分が社会人として働く姿が浮かばない人は多いと思う。そのような人でも、普通に大学生活を送るだけでは得られない学びを得ることが出来る点が、インターンシップの最大の利点ではないかと考える。将来像が描けないのであれば、今受けている授業や所属するサークルなどの日常の行いから自分の関心を考えて、それに基づくことも企業選びの方法の一つとして挙げられると、自らの経験を通して気づくことが出来た。

おもてなしの第一歩 — 注意と気遣い —

水戸プラザホテル

人間文化学科 2年

坂上 奏子

1. 参加の動機

私が水戸プラザホテルでのインターンシップに参加したのは、大学受験の時や、旅行の際に泊まったホテルでの経験を通して、ホテル業に強い関心・興味を持ったのがきっかけです。

かつて茨城大学受験の際、水戸市内のホテルを予約し、荷物を宅急便で事前に送っておいたのですが、ホテルに行ってみると逆さまに置かれ、謝罪もなく、数日間をあまりいい気持ちで過ごすことができませんでした。しかし、その後大洗に旅行する機会があり、そのとき泊まったホテルでは、従業員の方が荷物を持って部屋まで案内して下さったり、質問にも丁寧に答えてくれるなど、数日の滞在をとっても気持ちよく過ごすことができました。

この体験から、ホテルでの時間は泊まった人の心をと強く左右するのだと感じました。ホテル利用の目的は様々ですが、私たちはホテル自体というより、観光や仕事を目的として利用することが多いです。しかしホテルでの滞在時間は長いと、気持ちよく過ごせないと何となく嫌な思い出になります。逆に、ホテルでの時間が素晴らしいと、目的に関わらず、いい旅だったと思える、そんな「ホテルの力」に惹かれ、その力をもっと近くで見たいと思いました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸プラザホテルは伊勢甚グループが展開するホテル事業です。伊勢甚グループは1724年呉服商として開業し、サービス業を中心とした様々な事業領域を経て、現在ホテル・ブライダル・不動産業を柱としています。2001年に開業した水戸プラザホテルは森の中の迎賓館をコンセプトにしており、各所に緑を取り入れつつ、ヨーロッパクラシック調のインテリア・デザインで癒しの空間を作りながら、高級感あふれる非日常を味わうことができます。

今回のインターンシップで参加させていただいた業務はベルパーソンとレストランです。ベルパーソンとはホテルの玄関でゲストをお迎え・お見送りと、荷物や依頼物を部屋まで運ぶ、いわゆるデリバリーを職務としています。地味な業務のようでも、ホテルの格式を感じさせる重要な立場であり、立ち姿など気をつけることがたくさんあります。顧客にとってはベルパーソンがファースト・インプレッションになる訳ですから、インターンシッ

プと言えど、重要な役を担うことになりました。このほか、ホテル内にあるレストランでは、比較的簡単な給仕や、後片付け、お客様がお使いになるナブキンの用意を主に行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して習得したことは2つあります。まず、視野を広く持ちながら、注意を向け続けることです。例えばベルパーソンの業務では、ゲストをお迎え・お見送りの際、自動ドアの開閉を先んじて行動するのですが、一日目はどちらか一方に注意が偏ってしまい、慌ててドアを開けるということが度々ありました。他にも困ってらっしゃるゲストがいたら声をかけるなど、自分の周囲に広く意識を向けることはホテル業務において必須といえます。

もう一つは細やかな気遣いです。例えばゲストルームを開ける際、極力指紋をつけないようにノブは指で挟むように開ける、キャリーケースは転がさず、ゲストが触れてないほうをお持ちして運ぶといった、一見わからない気遣いがとても大切にされていました。これは多くのゲストに来ていただくことではなく、お一人お一人に快適な時間を提供することをサービスの目的としているからこそだと思います。ゲストが触れるもの・環境をより良く保とうとすることを基本として実践することで、サービス業務に心がこもり、それはおもてなしとしてゲストに伝わります。

4. 後輩へのアドバイス

水戸プラザホテルはお客様とのコミュニケーションを大切にしているホテルです。どの部署の社員・学生も必ずホテルの現場で働き、経験を積んでいます。お客様との関わりの中で、マナーといった技術的なことはもちろん、対話・対応のような人と通じ合う力が養うことができる仕事です。人と積極的に関わりたい、人との出会いを大切にしたいという方に自信をもって推奨できるインターンシップです。

インターンシップで学んだこと

香陵住販 株式会社

人間文化学科 3年

山口 優香

1. 参加の動機

私はインターンシップに参加することは決めていましたが、自分の志望する職種などは具体的に決まっていませんでした。しかし、自分の生まれ育った茨城県で就職したいという思いがあったため、茨城県に本社がある企業や支社を多く置いている企業を探したところ、香陵住販株式会社のインターンシップを見つけました。私には不動産を訪れた経験がなく、不動産とはお客様に物件を紹介する所という漠然としたイメージしか持っていませんでした。そこで、自分にとってあまり馴染みのない不動産でのインターンシップという経験は、今後の業界研究や就職活動に活かせるのではないかと考え、今回の応募に至りました。

2. 派遣先の概要と業務内容

香陵住販株式会社は水戸市を中心に16店舗を展開している地域密着型の企業です。また、茨城県に本社がある唯一の上場企業でもあります。店舗数、賃貸仲介件数や管理戸数は茨城県内でトップクラスであり、地域密着型企業でありながら東京に支社を置き、総合不動産会社としてより広いネットワークを築いています。

今回のインターンシップは5日間でした。初日は本会で会社や不動産業界の説明を受けた後、ホームページなどに載せることを想定した物件の写真撮影を行い、撮影した写真を使って物件のプレゼンをしました。2日目から4日目までは、茨大前支店での店舗研修でした。外観と内観の写真を撮りながら様々な種類の物件を見て回り、撮った写真を加工してホームページに載せる作業をしました。さらに、アパートの賃貸契約や内観の様子を見学させていただきました。最終日は再び本社に戻り、3日間の店舗研修で学んだことを活かしながら不動産用語に関するクイズを解いたり、賃貸営業の疑似体験を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は初対面の人と話すことが苦手なため、営業職ではなく事務職を希望していました。しかし、香陵住販株式会社でのインターンシップに参加して、営業職の楽しさに気づくことができました。例えば、物件の内見の際に、収納が多いことやキッチンが対面式になっていることなど、それぞれの物件の魅力をお客様に伝えるために

は、事前にその物件についての情報を調べ、どうすればうまく説明することができるのかを考えておくなど入念に準備をする必要があるため、そういった点でやりがいのある仕事であると感じました。

また、趣味などのプライベートを充実させることの大切さも知りました。今回のインターンシップでお世話になった方々はそれぞれが何かしらの趣味を持っており、休日にはその趣味を楽しんでいることが会話をしていると伝わってきました。ライブに行くことやキャンプをすることなどの趣味があることによって、生きていくのに必要なお金を稼ぐためだけではなく、仕事と余暇のメリハリを大切にするという意識が生まれ、同時に仕事へのモチベーションも高まっていることがわかりました。提供する物件に特徴があるだけではなく、周辺の街にさまざまな機能があり、それを活かした暮らしが可能です。住宅を紹介し提供するということは、住宅を求める人にとって望ましい、あるいは楽しい暮らしの提案が不可欠であり、さまざまな思いめぐらせながら働くことは、とても楽しいことだということを実感しました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップへ参加することに対し、不安を感じる人は多いと思います。しかし、インターンシップに参加することによって学ぶことは多く、そこでの経験を通して自分の視野を広げることができるので、恐れずに参加してください。気になっている企業があったとしても、その企業に実際に行ってみないとわからないことは沢山あります。職場の雰囲気や具体的な仕事の内容は、インターネットで調べるだけでは確かなことはわかりません。そのため、積極的にインターンシップに参加し、情報を集め、これからの就職活動に役立ててほしいと思います。

議員インターシッブ

NPO法人ドットジェイピー（綿引健議員事務所）

法律経済学科 2年

柴田 菜生

1. 参加の動機

私は今回の議員インターンシップに参加した理由が2つあります。

1つ目は、将来なにをやりたいかが明確に決まっていなかったことです。議員インターンシップは公務員志望の学生が多く参加していると思っていましたが、説明会で一般企業志望の学生もこのインターンシップに参加していると説明を受けました。また他にも、私と同じように進路が明確になっていない人も参加したということを知り、参加する決め手の一つとなりました。

2つ目は、純粋に議員の方々とは普段どのような仕事をしているのかと疑問に思ったことです。参加する以前は、議員の方たちは私たち一般市民と距離が遠いと思っていました。しかし、議員の方なくして市民の意見を反映させるのは難しいと考え、彼らはどのように交流を図っているのか知りたいと思ったのも議員インターンシップに参加するきっかけの一つとなりました。

2. 派遣先の概要と業務内容

NPO法人ドットジェイピーは、若年投票率の向上を目標とする法人です。全国25拠点で約500人の大学生スタッフが中心となり、年2回、学生を対象としたインターンシッププログラムを提供し、また若年層向け政策コンテストを実施しています。今回お世話になった綿引健議員は、国民民主党所属で水戸市議会議員1期目の議員の方です。

私が綿引議員の下で行った業務は、水戸黄門まつりや国体の壮行会などのイベント参加、ボランティア団体の方々と一緒にティッシュ配り、9月に行われた定例会の代表質問で読むための質問作成を主に行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私が今回の議員インターンシップに参加して得られたことは多くありました。中でも、私として一番修得できたと思うことは「自主性」です。私は今まで人に言われるままに行動していました。その方が何も考えずに動けばいいからです。しかし、社会にでたら自立し自分で考え行動しなくてはなりません。綿引議員に最初にお会いした際に、「自主性を持って取り組んでほしい」と言われました。活動初日はよくわからず指示されるのを待っている状態でしたが、活動を重ねていくにつれて自分で

考えて行動するよう心掛けました。その結果、自分で考え行動することの大切さを再認識しました。なぜなら、たとえ失敗したとしても自分の納得がいく答えが得られるからです。以前までは人に言われて行動していたので、納得いかないことがあったとしても何も言えませんでした。しかし、自主的に行動を起こすことにより、何事も自分が納得できる答えを追求することができるようになりました。

4. 後輩へのアドバイス

将来に迷いのある人はもちろんですが、やりたいことが決まっている人もぜひ参加してほしいです。インターンシップは職種内容を知るだけでなく、社会人としてのマナーやスキルを得ることができるからです。また、この企業や官公庁のインターンシップも学生1人だけのものはあまりないと思います。自分とは違う価値観をもった学生と交流したり、同じような境遇の人と出会い、情報を分かち合うことができるかもしれません。

はじめ、議員インターンシップは公務員志望の人が参加するもののかなと思い、断ろうと思っていました。しかし、説明会で一般企業志望の学生も多く参加していると聞き、私と同じように迷いのある人やまだ決まっていない人もいるのかなと思い、自分のやりたいこと・したいことが少しは見つかるかもしれないと感じて応募することに決めました。

私は今後も多くのインターンシップに参加しようと思っています。未だ将来やりたいことが明確になっていないためそれを探すのも目的ですが、応募する過程でエントリーシートを書く機会も増えるからです。議員インターンシップでもエントリーシートを書きましたが上手くまとめることができませんでした。なので、エントリーシートを書くことに慣れたり、面接をしたりと就活を意識しながら今後も挑んでいきたいです。

議員インターンシップ

NPO法人ドットジェイピー（綿引健議員事務所）

法律経済学科 2年

石井 温子

1. 参加の動機

私は、地域市民のために働ける職に就きたいと考え、市役所の職員を高校の時から目指してきた。

しかし、大学の講義を受け民間企業の機能や様々な職業を知るうちに公務員だけが地域の人々の為に働いているのではなく、民間に就職しても人々のために働けるし、むしろ民間の方が影響力大きく人々のために働けるのではないかと考えるようになり、市役所に勤めるのが本当に自分に合っているのか迷い始めた。そこで私は将来について、より考えて様々な経験や知識を積むことにした。そして、タイミング良く先輩から、インターンシップに興味ないかと声を掛けてもらい、説明会に行くことにした。その説明を聞いて、勧められた議員インターンシップの内容がもともと目指している公務員系のものであることが分かり、せっかくならば今回このインターンシップに参加し、次の機会に民間のインターンシップに参加すれば、双方の機能を自分の目で見ることができ、迷いを解決させられる糸口になるかもしれないと考え、議員インターンシップに参加した。

2. 派遣先の概要と業務内容

私が参加した議員インターンシップは2か月間の中で担当となった水戸市市議会議員の綿引議員と日程を調整し、約14日間活動した。

活動内容は、大手門などの施設やイベント見学、浜田小学校リーダー研修会のボランティア、議会質問の作成など地域の人々と関わるものや地域の現状を体感できる活動を行った。施設見学では、施設の歴史や構造、イベント見学ではイベントの概要についてはもちろん、イベントの裏側にある問題点なども教えてもらい、地域活動をする際の地域との向き合い方を学べるものだった。各ボランティアは、実際に地域の人々と接するもので、特に浜田小学校のリーダー研修では小学生やその親御さん方、先生方と接し活動をする中で、各々が1つのイベントに懸命に取り組むことで一体感が生まれイベント成功に繋がることを目の当たりにし、各個人が集団の中に加わり一員として活動する重要性を実感した。

議会質問の作成は、まず水戸市の現状を見て各部門について問題点を考え出し、約1か月かけて質問の内容を綿引議員に手伝ってもらいながら深めていく。この業務がもっとも水戸市について考え、調べられるもので水戸

市の現状についての知識を多く知ることができた。また、綿引議員から問題点の抽出方法や質問作成の方法を教えていただき、これから地域の改善を考える機会がある際に参考とするには十分な知識を身に付けることができた。

以上のように、議員インターンシップは総じて普段より地域を意識し活動するものだった。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して修得したものは、まずはスケジュール管理能力である。インターンシップ期間の2か月間のうちに私は他にもアルバイトや集中講義、政策立案のプロジェクト、友人との約束など、比較的多くの予定が詰まっていたが、手帳での時間管理やメモでのタスク管理をすることで、どの予定も踏み倒さずにやり遂げることができた。

次に、主体的に取り組む姿勢である。これは綿引議員から提示された望ましい活動姿勢であった。活動する中で困った時は議員などに相談し、手助けしていただいた場面もあったが、基本的には自分で考えて行動した。そのため、言われる前に行動するという意識するようになり、インターンシップ外でも主体的に行動するようになった。

地域活動的知識だけでなく、日常生活においても重要な能力や姿勢を修得でき、とても良い経験ができたと思う。

4. 後輩へのアドバイス

私のように将来に迷いがある人はもちろん、自分の強みが分からない人や、より知識経験が欲しい人など自己啓発のために動きたい人にもぜひインターンシップを勧めたい。普段の授業で教科書や本に書いてある知識を学ぶことはできるが、インターンシップでは教科書や本に書いていない知識を学び、知識を生かして実際に活動に反映するという体験ができる。この経験はきっと何かしらの形で自分の力として役に立つと思う。

加えて、私はこのインターンを先輩の紹介がきっかけだった。人との縁はまた異なる縁を連れてくる。大学内でたくさんの人と交流しながら大学生活過ごし、自分の力になる縁をたくさん作ることを勧める。

インターンシップ報告書 (第3部)

PBL型インターンシップ

専門科目「プロジェクト演習」におけるインターンシップ

人文社会科学部地域志向教育プログラム委員長 神田 大吾

人文社会科学部の2年次以上向け専門科目「プロジェクト演習」は、学外協力者からご提案いただいたプロジェクト課題に、1年を通じてチーム単位で取り組むPBL（Project Based Learning）授業です。学生たちは4月から課題提案者様とミーティングを重ねながらプロジェクト課題に取り組み、授業のほぼ半ばに当たる夏季休業期間にインターンシップに参加し、そこで学んだ事柄をフィードバックすることで各プロジェクト活動を深化させ、12月の活動報告会で活動の成果を発表するという授業です。

今年度は「自分たちのチカラで、水戸の公共交通を変える」（水戸市役所市長公室交通政策課）、「こみっとフェスティバルを開催します!!」（水戸市役所市民生活課）、「ICT学習ツールの提案」（NTTコミュニケーションズ株式会社）という三つの課題にインターンシップが組み込まれていました。

このインターンシップは、知ることと、学ぶことの宝庫です。

まず、百聞は一見に如かず。普通の大学生は「実際に社員の方々がどのような仕事をしているのか、どのような環境で働いているのか」を全く知りません。インターンシップに参加したお蔭で、社会人として働くとはどういうことなのか、自分の目で見て、知ることができました。そして、「新しい知識や考えを得られるだけでなく、自分に足りないものや未熟さを知るきっかけになります」（小笠原さん）と述懐しています。

また、考えて学ぶ貴重な時を過ごせます。例えば市民生活課でのインターンシップに参加した学生は、派遣期間中、同課が掲げる「協働」とは何か、「常に考えながら活動していました」（大塚さん）。そのため、フェスティバルが「集客をする、ということだけでは目的達成にはならない」と気づき、課題について、さらに深く考え抜かねばな

らないことに思い至りました。プロジェクト課題をじっくり調査・研究してからインターンシップに派遣される、PBL型インターンシップならではの学びと言えます。

また、大学から外に出て実社会を体験すると、大学での学修意欲が刺激されました。市役所が「地域のために働いているにも関わらず住民から感謝の言葉ではなく、クレームを受けることがある」と知って、「今後は、市役所だけでなく県庁や、企業の地域とのかかわり方も調べていきたい」（海老根君）と考えた学生は、大きな一歩を踏み出しました。大学での授業とインターンシップとの相乗効果で、これから先がととても楽しみです。

今年もまた、学生たちは多くを学び、成長することができました。これはひとえにインターンシップを受け入れてくださった方々のご指導の賜物です。業務ご多忙の中にもかかわらず、皆様が温かく、きめ細かく、優しくご指導くださったことに篤く御礼申し上げます。どうも有難うございました。今後とも引き続きインターンシップにご協力いただければ誠に幸いと存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。

付記：授業内容と各チームのプロジェクト活動の詳細は

プロジェクト演習公式ホームページ

<http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/project.html>

同、公式Facebook

<https://www.facebook.com/IUChiikipg/>

をどうぞご覧ください。

実習を通して気づいた市役所での働き方

水戸市役所 市長公室交通政策課

現代社会学科 2年

海老根 弘 人

1. 参加の動機

私は今回のインターンシップに「プロジェクト演習」という授業の一環として参加しました。この授業では、学外の方々あるいは履修学生自身から提案された課題に、学生がチームを組んで一年を通じて取り組みます。私たちのチームが取り組んでいる課題は、水戸市役所交通政策課から提案された「水戸の公共交通をより良いものにしてほしい」というものです。一年を通して水戸市役所交通政策課と連携しプロジェクトを進めていくのですが、加えて夏休み期間に一週間のインターンシップをさせていただくという授業内容となっています。実際に学生がプロジェクトの連携先へインターンシップに参加することで、実際の現場において経験を積み臨機応変に考える力を養い、プロジェクトをより良いものとすることができます。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は、交通政策の企画及び調整に関する業務や、高齢者・障がい者の方々の移動などの円滑化の促進に関する法律に関する業務、また、自転車走行空間整備の企画及び調整に関する業務を行っています。私が行った業務内容としてはまず、水戸市内を走るバス会社の各系統の年間利用者の数の整理・分析を行いました。それぞれのバス会社ごとに前年度比が大きく増加している系統と減少している系統を調べ、その原因を分析しました。また、水戸市が抱える課題に対しての簡単な企画の立案をしました。将来的な人口減少問題を解決するための「水戸市まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づいた取り組みを考え、提案させていただきました。加えて、大洗鹿島線の利用促進に有効な中吊り広告のデザインや車両を活用したイベントを発案しました。水戸市役所交通政策課では、水戸市内の小学校で「交通バリアフリー教室」というイベントを開催しているのですが、そこで高齢者体験用の装備の装着の手伝いなどを行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップの経験を通して学んだことは、市役所という立場での地域とのかかわり方です。市役所は県庁と比べると現場レベルの仕事の割合が高く、地域の人々と触れ合うことや地域の問題に直接取り組む

ことが多いということを実感しました。私もインターンシップ期間中に実際に市内の小学校に行き、バリアフリーの重要性を子供たちに直接教える教室の補助をし、市役所の仕事の市民との距離の小ささを感じました。私はこの市役所の仕事の現場レベルでの取り組みができるという点が面白いと感じました。国や県のような規模の大きな取り組みをすることは難しいかもしれませんが、地域の住民の声に耳を傾け、地域が抱えている問題を丁寧に把握して適切な取り組みをすることが可能なことは、地域との距離が小さい市役所の長所だと考えます。しかし、この市役所の市民との距離の小ささは時に働くうえで難しさもあるということ由市役所職員の方から教えていただきました。市役所の仕事はいつも市民に感謝される仕事とは限りません。例えば、市民税額などでは市民から税金に関する不満や仕事に関するクレームなども聞かなければなりません。自治体を運営していくには、そのような仕事は必要不可欠です。しかしながら、地域のために働いているにも関わらず住民から感謝の言葉ではなく、クレームを受けることがあるということは、市民との距離が近い市役所で働くうえで考慮しなければいけないことであると感じました。今後は、市役所だけでなく県庁や、企業の地域とのかかわり方も調べていきたいと考えています。市役所のように、それぞれの立場によって地域とのかかわり方の特徴やできることが違ってくると考えます。サイトなどで情報を収集することや、職員の方のお話を聞くだけでなく、実際にインターンシップに行き自分に合った地域とのかかわり方や働き方を探していきたいです。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップの良い点は職場の雰囲気を実際に体験できることです。その雰囲気の中で業務を体験することで、本当に自分にその職種が適したものなのか掴めるかもしれません。もし、インターンシップを通してその職種が自分には合わないと感じとしても落ち込む必要はありません。インターンシップの経験から、将来自分が就く職業とのミスマッチを防ぐことができます。就職した後に後悔しないためにも積極的インターンシップをすることをお勧めします。

交通政策課の仕事を体験して

水戸市役所 市長公室交通政策課

法律経済学科 2年

荒川 祐太

1. 参加の動機

プロジェクト演習の授業の中で、水戸市の交通に関することをさらに知りたいと思ったからです。また将来の就職先として公務員を希望しており、どのような仕事をしているか興味があったからです。市役所の業務は窓口業務以外に普段目にするのがないため、特に興味を持っていました。交通政策課をインターンシップ先として希望したのは、どの自治体であっても交通政策は重要だと考えたからです。交通の利便性が低いことは、流通や市民の生活に大きく影響を及ぼすからです。

2. 派遣先の概要と業務内容

私は水戸市の交通政策課という部署で5日間インターンシップに参加させていただきました。水戸市交通政策課は、市民が安心して移動できる交通体系を実現することを基本理念として業務を行っています。業務内容は自転車の事故防止のための専用レーンの設置、バス路線の再編やバリアフリー化そしてユニバーサルデザインの導入などです。

インターンシップでは、初日に水戸市交通政策課が行っている業務の大きな説明を受けました。その後は、バス利用に関する宣伝ポスターの折り込みや10月から増税による運賃の変更を交通政策課で作成したマップに張り付ける作業などを行いました。また、バス利用者の増加に関する考察や調査部会での委員の誘導などを行いました。バス利用者の増加に関する考察では、分析の難しさや報告文書を作る難しさを体感できました。

3. インターンシップを通して修得したこと

まずインターンシップを通して、単純な作業をどれだけ丁寧に早く行っていけるかが大切だと感じました。普段は職員の方々が前述の宣伝ポスターの折り込みやマップへの貼り付け作業を行います。これに加えて、交通政策課には、1日何十本もの電話対応があります。さらに進めている施策の業務があります。職員の方々は多忙な中で、深く考える必要のない作業と考える必要のある作業を交互にはさみながら効率的に作業を終わらせていました。単純な作業を丁寧に早く終わらせることが優先度の高い仕事を進められる要素の一つだと感じました。そのため、単純な作業でも効率的に終わらせられるように工夫することが以前より意識的にできるようになりました。

次に、報・連・相の重要さに気づけました。報・連・相は重要であると言葉では理解していましたが、実際に業務を行ってみて、仕事を任せられると、どれも初めての仕事で細かなことが分かりません。そして、自身が予測して仕事を行うと間違いを犯します。私は宛名の貼り付け作業の際に、途中で偶々相談できたため、ミスをしませんでした。その時、相談をしなければ、再度宛名を印刷してもらうことになり職員の方々に迷惑をかけます。なぜ報・連・相が重要なのか身に染みて理解できました。

最後に、挨拶や言葉遣い、礼儀作法などの常識的なことが自分にまだ足りていないと気づけました。職員の方々と5日間仕事を間近で行っていて気づきました。当たり前のことを当たり前に行っていられませんでした。これからの大学生活の中で、今回のインターンシップで得た様々な気づきをもとに、勉学等に励んでいこうと思います。

4. 後輩へのアドバイス

5日間のインターンシップに行くことに不安を感じる学生もいると思います。私も短期のインターンシップにさえ行ったことがなかったため、今回が初めてのインターンシップなこともあり、不安が尽きませんでした。しかし、職員の方々は終始丁寧に業務内容を説明してくださり、またこちらが緊張していることを見て、優しい言葉をかけていただきました。5日間の中で不安は消えていきました。「不安だから行かない」といったことはお勧めしません。不安は杞憂に終わると思うのでぜひ参加してみてください。インターンシップで得られたことは多く、なによりも新しいことに挑戦することに対する自信も持てました。不安を理由に行かないといったことはとても損だと感じました。大事なことなのでもう一度、言いましょう。ぜひ参加してみてください。

市民に寄り添って働くということ

水戸市役所 市長公室交通政策課

法律経済学科 2年

匂 阪 浩 聡

1. 参加の動機

私は、将来公務員への就職を考えています。公務員といっても色々ありますが、今回は市民にとって身近な存在である市役所でインターンシップを行うことを考えました。また、私のチームは、水戸市の公共交通の利用活性化に向けた活動を行っています。その関係で水戸市役所交通政策課には大変お世話になっています。そこで業務体験をさせていただくことで、職員の皆様が、いかにして様々な交通事業者と連携して活動しているか、また、交通や道路の整備、交通指導などを通して、市民や観光客が、快適に過ごせるよう尽力している姿を間近で見ることができ、業務内容を学ぶに適切な場所と考えたからです。また、市がどれほど市民に寄り添っているかを間近で見られることも動機の一つです。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所交通政策課は、水戸市の公共交通を多くの人に快適に利用してもらうために、交通事業者にサービスの向上を働きかけたり、様々な事業者が皆一定の売り上げが出せるように調整したりする業務を行っています。その他には、自転車マナーの向上のための交通指導やバリアフリーの推進といった業務も行っていきます。

業務内容は以下の通りです。

・パソコンの入力作業と考察

茨城交通から提供された、2017年度と2018年度の全運行系統の売り上げが記されたデータをもとに、2018年度の前年度比利用者増加系統と減少系統を1位から10位までエクセルに書き並べ、全体での利用者の増減を調べました。そして、それをもとに、増減理由につながる要素を挙げ考察しました。

・各種作業

資料のホチキス止め、封筒に宛名と住所が書かれたシールを張る作業、書類を封筒に入れる作業などを行いました。

・庁舎外業務

アダストリアみとアリーナで行いました。今度建設される立体駐車場に設置予定のエレベーターと同規模のものがそこにあり、車いすの方に試乗してもらうというものでした。最初に担当者から、エレベーターの説明があり、その後、試乗しました。そして、感想などを言ってもらい、それに対して担当者が答

えていました。

私たちは、市民を説明会場やエレベーターに案内する仕事や、発言者にマイクをお渡しする仕事を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

職員が市民に対応している場面が多々見られました。市民がどんなに苦情を言ってきたとしても、真正面から丁寧に対応することの大切さを学びました。やはり、市民と接する機会が多い分、応対するすべをしっかりと身に付けていることが見てわかりました。

また、様々な作業を通して、効率的な仕事のこなし方を考え、身に付けられました。資料のホチキス止めを例に挙げます。この作業は、パソコン作業の合間の単純作業です。この期間、2人でインターンシップを行いました。ホチキス止めには、用紙をきれいに重ねて整える作業と、それを止める作業の二つがあります。私たちは、前者の作業と後者の作業とで分業することにしました。このほうが、一つの作業に専念でき、その分スピードを上げることができます。

以上のように、限られた時間で、より多くの作業を短い時間でできるように考え、努めました。

4. 後輩へのアドバイス

挨拶は大きな声で堂々とできるように身に付けておきましょう。出勤時、退勤時はもちろん、外で市民とあった際にも挨拶をすることが大事です。また、パソコン業務が大半を占めるので、ワード・エクセルを使いこなせるようにしておくことをお勧めします。ホチキス止めといった作業は、簡単ですが多いので効率が重視されます。パソコン業務の合間に気分転換に行くとよいでしょう。複数人で行う際には得意不得意で分担するとよいでしょう。

市役所での働き方を体験して

水戸市役所 市長公室交通政策課

法律経済学科 2年

山形賢志

1. 参加の動機

私はプロジェクト演習を履修し、水戸市の公共交通を改善するプロジェクト課題を選択しました。この課題を進める中で、交通会社だけでなく、行政とのミーティングや調整が必要となり、水戸市役所の市長公室交通政策課様でインターンシップをさせていただくことになりました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課様は、以下のような業務を行っておられます。

- ・公共交通の企画及び調整に関すること
- ・広域交通体系に関すること
- ・高齢者・障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律に関すること
- ・自転車走行空間整備の企画及び調整に関することなど

(出典 : <https://www.city.mito.lg.jp/soshiki/01000/kout-su/index.html>)

インターンシップでは、水戸市役所庁舎内において、鹿島臨海鉄道のさらなる発展のために利用者増加を目標に、効果的な宣伝方法を考案しました。案としましては、現実の車両を使ったりリアル脱出ゲームや、現地の高校生に出演してもらうPVの作成などを考案しました。また、水戸市の路線バス利用者数の増減をデータより計算し、水戸市の冬季の気候が変化したためにバス利用者が増えたのではないかと、といった推測を立てました。

また、渡里小学校において、高齢者・障がい者体験の補助をしました。約40人の小学4年生を対象に、体の動きを抑制したり、重りを付けたりする器具を装着して高齢者の方の動きづらさを体験したり、車いすでバスに乗車することで、障がい者の方の気持ちを理解したりするという催しで、器具の装着などをお手伝いしました。

3. インターンシップを通して修得したこと

交通政策課の須藤文彦様に水戸駅方面を案内してもらい、水戸駅の交通の問題を教えてくださいました。そこで、路線バスの発着が北口に偏っていること、行政としてはこれを解決したいが、バス会社も営利目的でありボランティアではないため交渉が難しいこと、南口のバスターミナルの回収も必要だが難しいということを知りま

した。

また、私たち学生チームKoMiKoのツアー案（公共交通改善のため）を市役所の方々に紹介し、アドバイスを頂いた時、須藤様や同じ課の根本浩徳様以外の方にチームKoMiKoのツアー案をご説明するのが初めてであったため、プロジェクトを1から理解してもらう必要があり、相手が正確に理解できるように、情報の取捨選択が必要でしたが、これはかなり準備をしないとその場で戸惑ってしまうとわかりました。また、同じ日程でインターンシップに参加したチームメイトの海老根弘人が主に説明する場では、自分の話すことがなくなり、思考が停止しているように感じるがありました。主体的な活動をしていないと、自分の意見を持てなくなるようです。

4. 後輩へのアドバイス

市役所の方とは普段お話しする機会はないと思います。当然、インターンシップに参加する前は緊張することだと思います。僕もそうでした。しかし、案ずることはありませんでした。市役所の皆さんは好意的に受け入れてくれますし、まじめに業務をしていれば、まず不安なことはないと思います。ただ、市役所の運営は税金で賄われており、たとえインターンシップ生といえども市役所の運営を妨げるようなことはしないよう注意してください。挨拶をし、時間を守り、積極的に活動し、創意工夫を忘れない。先方に迷惑をかけないように意識しつつ、先方の役に立つこと、それがひいては自分のためにもなることを忘れず実践するようにしてください。

水戸の公共交通を守る

水戸市役所 市長公室交通政策課

理学部地球環境科学コース 2年

伊藤玲美

1. 参加の動機

私は現在、履修中の「プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」において、公共交通の利用促進を目標としたプロジェクトを進めています。これに際して市役所職員の視点から水戸の交通について考えたいと思い、交通政策課に応募致しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

交通政策課では、主に水戸市の公共交通機関の利用を促進することを目的とした政策を立て、実施しています。また、取り扱う公共交通機関は、路線バスやタクシー、電車、さらには自転車などといった車両を幅広く対象とし、市民の足を守っています。そのため、現在運行中の電車の利用者を増やすための広告の作成や、新たな交通手段の開拓を行なっています。さらには交通機関のバリアフリー化にも力を注いでおり、体験期間中には市内の小学校で茨城交通さんや国土交通省の方々と共に開かれた「バリアフリー教室」の補助業務まで行うことができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回の派遣で、『1000円タクシー』という企画の職務の視察をさせて頂きました。これは水戸市内でも、駅やバス停がなく交通の便が良くない地域で運用されているタクシーで、国土交通省の実証実験として現在(2019年4月1日～2020年3月31日)試用運転されています。交通課の方に伺ったお話によると、このプロジェクトが発足したのは数年前で、現在の試用運転の段階に至るまでは長い時間がかかったと仰っていました。膨大な時間をかけていること、またそれが最終的なゴールではなく、持続可能なものにするための継続的なケアを行なっていることから仕事の責任の重さを知りました。それに加えて、そのようなプロジェクトを一つ企画するだけでも、様々な方面からの協力者が非常に多いことに驚きました。

また、派遣期間中に市役所の新庁舎の見学とご説明を頂きました。これにより、水戸市の防災対策やバリアフリーへの意識を感じることが出来たと同時に、最新の設備を備えた施設であるとわかったため、市民としての安心感を抱きました。そして1時間の昼休憩では、職員の方から公務員試験の相談に乗って頂いたり、ワークライフバランスの助言を頂いたり、常に有意義な時間

を過ごすことが出来ました。

4. 後輩へのアドバイス

理学部で市役所の交通政策課にインターンシップに行くという人はあまりいないと思います。しかし、2年生のうちに別の分野に関わる職場へ体験に行くことは、将来を考える上で大いに役立ちます。別の視点から追求していきたい分野を見つめ直せることに加え、そこで新たに探究心の芽生えるものとの出会いがあるかもしれません。今のうちに色々な世界を見ておくことをお勧めします。

「協働」を考える

水戸市役所 市民生活課

現代社会学科 3年

大塚 萌

1. 参加の動機

私は将来、茨城県に就職したいと考えています。特に、市や町に貢献したい、地域に関わりたいという思いが強いです。そこで、水戸市役所の市民生活課で、市役所の方々が地域に対してどのような思いを持っているのか、実際にどんなお仕事をしているのかを知りたくて、インターンシップ（履修している「プロジェクト演習」の授業の一環）に参加しました。

また、市民生活課と私たち「こみフェスチーム」は、2月にイオンモール水戸内原で行われる「こみっとフェスティバル2020」に向け、毎月1回会議を行っています。普段、私たちは参加者側ですが、今回は事務局側として参加させていただきました。事務局が会議に向けて、どのような準備を行っているのかを知る良いきっかけになったと思います。

2. 派遣先の概要と業務内容

市民生活課は、主に市民活動・地域コミュニティなど水戸市や市民生活に根差した活動をしているところです。市民が安心した暮らしを送れるようにさまざまなことを行っています。業務内容としては①水戸芸術館にて「花の絵コンクール」の展示②こみっとフェスティバル実行委員会準備③こみっと広場・こみっとルームの活用方法を考える、です。①について、このイベントは、水戸市住みよいまちづくり推進協議会主催で毎年行われているもので、幼稚園生・小中学生を対象としています。今回は、受賞作品の展示をお手伝いさせていただきました。②こみっとフェスティバルの実行委員会会議に向け、会場準備や資料配布を行いました。また、水戸市市制施行130周年に向けた企画案を発表するなどしました。③こみっと広場・こみっとルームを市民の方々に知ってもらうためにはどうすれば良いかを考え、発案と実際にこみっとルームの改善を行いました。（「こみっと広場」とはインターネット上のサイト、「こみっとルーム」とは水戸市役所2階の協働スペースのことです。）

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップは「協働ってなんだろう？」という視点で常に考えながら活動していました。市民生活課は、事務的な作業だけでなく、市民の方々がどうすればより豊かな生活を送ることができるかを考えなが

ら、様々な市民と協力し企画や活動を行っているということを知りました。こみっとフェスティバルも協働という視点から考えると、ただフェスティバルを行い集客をする、ということだけでは目的達成にはならず、フェスティバルによってボランティアに対する考え方をプラスなものへ変える、フェスティバルを通してボランティアに興味を持ってもらい参加してもらおう、ということまでしなければ協働というところを達成できていないと感じました。水戸市市制施行130周年の企画を考えることやこみっと広場・こみっとルームの活用方法を考えることも、市民の方々のより豊かな生活につながっていることが分かりました。

4. 後輩へのアドバイス

今、漠然と市役所に就職したいと考えている人は少なくないと思います。そういう人は、実際に市役所へインターンシップに参加してみることをお勧めします。人の話を聴くだけではよくわからないことも、実際に自分の目で見て、聴いてみると、職場の雰囲気や仕事などがよくわかります。また、水戸市役所に行くと、自分が行った部署のこと以外にも、水戸市のことをより深く知ることが出来ます。たとえ短い期間でも、自分でインターンシップに参加し、確かめてみることをお勧めします。

私のように、今まで全く公務員という職種を考えていなかった人でも、1度インターンシップに参加してみると、就職に対する考え方が変わるかもしれません。私もこの2日間で考え方が大分変わりました。実際に組織の中に入って仕事をすることは、とても貴重な体験です。皆さんもぜひ、2年生のうちからインターンシップに参加してみたいかと思いますが、

市民を第一に考える視点

水戸市役所 市民生活課

現代社会学科 3年

小野 嶺 奈

1. 参加の動機

動機は、2つあります。プロジェクトの一環だったことと、市役所の仕事に興味があったからです。専門科目「地域PBL演習」の中で、こみっとフェスティバルの企画と運営に参加するというプロジェクト課題を選択しました。その取り組みの一環として市役所でどんなお仕事をされているかを知るためにインターンシップに参加しました。

また、水戸市役所の市民生活課の方々にお世話になっています。月に一度水戸市役所に行き、会議に参加し、こみっとフェスティバル当日までどう広報をしていくかを考えています。この約半年のこみフェスチームの活動を通して、まちの人たちに元気を与えるためにイベントなどを運営している市民生活課のお仕事に興味を持ちました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所は水戸市中央にあり、財務部、市民協働部、都市計画部など多方面から水戸市の住民の生活を支える役所です。

今回は2日間受け入れていただきました。業務内容としては、普段参加させていただいている月に1度のこみっとフェスティバル実行委員会の会議の準備や当日の進行、こみっとルームやこみっと広場の活用方法、こみフェスチームとして水戸市市制施行130周年に何ができるかを考える時間をいただきました。こみっとルームに関しては役所内にあるスペースで、何の部屋かが分かりづらいという問題意識を持ちました。そのため誰でもフリースペースだとすぐにわかってもらうため、画用紙で名前を作成して貼りました。水戸市市制施行130周年に向けては、記念すべき年のため形に残るものを作りたいという意識から、130人の笑顔で「130」という大きなモザイクアートを作ることを市役所に提案しました。また、若い人にもこみっとフェスティバルを知ってもらうために動画投稿サイト「Tictok」にゆるキャラ・みとちゃんを出演させてPRするというのも併せて提案しました。

3. インターンシップを通して修得したこと

市役所の仕事は、自分が想像するよりもクリエイティブな仕事だと感じました。今まで私は、「市役所＝事務

仕事」というイメージがありました。しかし2日間インターンシップに行かせていただいて、むしろ考えることが多くて面白いお仕事だと思いました。

「こみっとフェスティバルを広報したい」という目標でも、伝えたいターゲットや目標人数を考えると、まったく違う企画や戦略を立てなければいけないことを実感しました。皆に伝えることを目標にすると誰も自分ごと化できなくて、誰にも刺さらない広報になってしまうため、今回同じ日にインターンシップに参加した3人はその意識を持ち、若い人たちにこみっとフェスティバルの存在を知ってもらうことを目標にしました。若者をターゲットにしたからこそ、若者に人気のアプリを使うことが有効なのではないかと提案できたと思います。

また、住民の生活を支えるというのは素敵な仕事だと思いました。インターンシップを担当してくださった市民生活課の橋本様は「どうしたら水戸市の人たちが笑顔になってくれるかを常に考えている」と教えてくださりました。私はこの言葉に非常に感動しました。

今回私たちは市民生活課のお仕事の一部に関わらせていただきましたが、市民生活課はこみっとフェスティバル以外にもボランティアについてやイベントなど他方から水戸市を支えています。一番住民の生活を直接支えられ、笑顔を見ることができるのは市役所のお仕事のいいところだと思いました。

4. 後輩へのアドバイス

自分の興味のある業界はできるだけインターンシップに参加し、そこで働いてる人にたくさんお話を伺うなど、肌で感じるといいと思います。また、どんな仕事を任されても、時間を割いてくださり貴重な経験をさせていただいていることには変わりありません。失礼のない態度で臨んでください。基本として大きな声での挨拶と笑顔は絶対です。

ただやるのではなく、考えてやる

水戸市役所 市民生活課

現代社会学科 3年

庄 司 果 織

1. 参加の動機

私は、「地域」に興味があります。将来、地元の活性化のために何かできれば良いと考えています。地域を活性化させるためには、市民の力が必要です。そこで、昨年から受講しているプロジェクト演習で、「市民生活課」の存在を知りました。ボランティア団体・NPOが集まって、日頃の活動の成果や魅力をアピールするイベント「こみっとフェスティバル」のように市民と協働して、何かを成し遂げる部署です。私は、市民との協働というところに魅力を感じました。しかし、具体的には、どのような仕事をされているのか分かっていませんでした。そのため、この目で確かめたいと思い、参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

市民との協働をし、市民と共にイベントや事業などを行う部署。業務内容は、チラシの袋詰め、こみっとフェスティバル実行委員会議の資料作成、水戸市市制130周年記念イベントの案の考案など。

3. インターンシップを通して修得したこと

「とにかく、考える」ということを学びました。そして、ただ考えるのではなく、「細部まで考える」ということが大切なのだ気づきました。担当の橋本様から、「何でこの作業をするのか、課題は何かなどを考えながら、やってみて。」というアドバイスを頂きました。業務の中に、詐欺・悪徳商法などの消費者トラブル啓発のチラシの袋詰めの作業があったのですが、私は初め、地道な作業だなとしか思っていませんでした。しかし、頂いたアドバイスを思い出し、「課題は何か」と考えていくと、「チラシを配布しても見てくれない」ということだと感じました。「どうすれば見てもらえるのか」と、一緒に活動していたメンバーで考え、学校で講演をしたり、高齢者の目の付きやすいところにポスターを設置すれば良いのでは？など、様々な意見が出ました。1人では思いつかないようなことも、皆で話し合えば、何か新しいことが生まれるのだと気づきました。

また、今回のインターンシップで、市民生活課の役割について理解が深まったと思います。市民生活課は、市民と協働して何かを成し遂げる部署です。役員が上で、市民が下ということはありません。お互いに同じ立ち位置で、物事を考えていきます。地域活性化は、市役所の

役員のみだけでは足りません。そこで、市民が何を思い、どんなことに困っているのか、など「課題」を見つける必要があります。そして、その課題を市民と協力して解決していくことが求められます。お互い対等の関係というところが、素敵だなと思いました。

今回、得ることができた考えを将来、地元に貢献する際に活かしていきたいと思います。

4. 後輩へのアドバイス

「ただ与えられた仕事をやるのではなく、考えてやること」です。上記でも述べましたが、「何でこの仕事をやるのか」「市民の方に見てもらおう、知ってもらおうためにはどうすればいいのか」など、考えていくと楽しいです。ただやらされている仕事はつまらないし、何も得ることができないと思います。

また、インターンシップは、学びの場だと思うので、分からなければ積極的に質問をすることが大切です。市民生活課は、優しい方ばかりで、何でも丁寧に教えて頂きます。知識がないことは、恥ずかしいことかもしれませんが、私自身もあまり知識がなく、知らないことばかりでした。だからこそ、この機会に色々なことを聞いて学ぶと良いと思います。

最後に当たり前のことですが、挨拶と御礼は、目を見て笑顔ではっきりと言うことです。相手に聞こえなければ、それは、挨拶でも御礼でも何でもありません。別のインターンでも「挨拶ができる人は、仕事もできる人だ」ということを教えて頂きました。それだけ、挨拶というものは、最も基本的で最も大切なものです。

常に市民の方々を考え、工夫をする仕事

水戸市役所 市民生活課

現代社会学科 3年

田岡 真美子

1. 参加の動機

私は昨年からこみっとフェスティバルという、水戸市内のボランティアや市民活動を市民の方々に知ってもらうイベントの運営に関らせていただいております、昨年も水戸市役所市民生活課へのインターンシップにも参加しました。昨年は初めてのインターンシップだったため、緊張もあり、指示された仕事をするのが精いっぱいでした。今年は2回目ですので、仕事内容の把握や指示された仕事をこなすだけでなく、市役所の方々がどのような思いで仕事をしているかという細かいところまでインターンシップを通して知りたいと思い、今年も参加させていただきました。また就活も始まっており、市役所という職場が自分に合っているかどうかについても実際に体験できる良い機会になると考えました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市民生活課は市民協働部の中にある課の1つで、町内会・自治会の活動の支援や市民センターの管理、市民活動やボランティア活動の補助など、市民の方々の生活を支援する課です。

まず1日目の最初に、市民生活課の位置づけや、協働とは何かについて学びました。次に、市民生活課の管轄であり、市役所内にある水戸市消費生活センターに伺い、仕事内容についてお話を伺い、消費生活についてのイベントで配布するチラシや啓発品の袋詰め作業を行いました。午後は、市制130周年を祝うものをこみっとフェスティバルでも残そうということで、その案を考えました。2日目は、午前中は市制130周年の案出しを行いました。またこみっとフェスティバルの広報活動について何かできることはないか考案しました。午後は、市役所2階にあるこみっとルームの活用方法について検討し、実際に部屋に行って部屋の模様替えを行いました。また、ボランティア関係のイベントで配布するアンケートの改善を行い、より充実したアンケートを作成しました。更に、こみっとフェスティバル実行委員長と次回会議の打ち合わせを行い、市制130年記念の案を提案させていただきました。その後、こみっとフェスティバルの各SNSを更新し、広報活動を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

この2日間で学んだことは「ただ仕事をこなすのでは

なく、工夫することが求められる仕事」であるということです。

1日目の消費生活センターでの作業では、どうしたら市民の方に消費生活に関心を持ってもらえるかと考えたものでありますし、配布する際にもどうしたら受けとってもらえるかも考える必要があります。2日目に行ったこみっとルームの利用法の提案でも同じです。市民の方々が利用できる場所なのに、うまく活用してもらわなければ意味がありません。ただ場所や情報を提供するだけでなく、どうしたら活用してもらえるか、工夫することが求められているのだと学びました。

また2日目のこみっとフェスティバル実行委員長との打ち合わせを行った際には、市民の方がどうしたいか、市役所は何をどう補助するのかという協働の場面を見ることができました。2日間で、市役所の仕事は、ただ事務作業をこなすだけでなく、市民の方々の生活をより良くするために、どのような手助けをし、協働していくかについて柔軟に考えなければならない仕事だということを知りました。また実際に仕事を体験してみると、自分に仕事ができるかについても現実的に考えることができました。

4. 後輩へのアドバイス

気になるインターンシップには積極的に行くべきです。なぜなら行かないとわからないことがたくさんあるからです。ぜひ行って、雰囲気や実際の仕事内容などを体験してみてください。就活で他にアドバイスすることは、自分が仕事を選ぶ際の譲れない軸を決めることです。私は最初、県内でもいいし、東京でもいいやと思って就活をしていましたが、東京のインターンシップに行った後に、やはり県内で働きたいと思いました。働く場所という軸以外にも、転勤の有無や休日出勤の有無など自分が働いていることを想像して、譲れない軸をはやめに決めることが大切だと思います。軸を決めることによって、自分に合いそうな会社や職種を見つけることが出来ると思います。

こみっとフェスティバルをより良くするために

水戸市役所 市民生活課

法律経済学科 3年

中 崎 航 汰

1. 参加の動機

今回、私がこのインターンシップに参加した理由は、2月に開催されるこみっとフェスティバル2020を今まで以上により良くするためにはどうしたらいいかを、水戸市役所の方々との交流を通して詳しく吟味していきたいと考えたからです。今年度のこみっとフェスティバルは、例年とは違いステージとブースが同じ会場であるということが決定されているため、今までとは違ったこみっとフェスティバルの形、特に横のつながりを重視したイベントになると考えられます。また、水戸市市制施行130周年記念ということで、インパクトがある催しも同時に必要になってきます。これらを満たしたイベントを開催するためには、やはりこみっフェスチームのメンバーだけでなく、水戸市役所の方々、また市民の方々と協働が重要だと感じ、それを通して良いこみっとフェスティバルを作りたいという想いで、このインターンシップに臨みました。

2. 派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市民生活課協働係は、主に市民との協働の推進を行っており、将来にわたり、誰もが幸せに暮らしていくことのできる町の実現のために、健全で豊かな消費生活を送ることができる都市を目指しています。今回の、2日間のインターンシップでは、まず初日の午前中に花の絵コンクールの展示準備に参加した後、午後は、簡単な事務作業をしたのち、こみっとフェスティバルについてのアンケートの訂正やアイデア出しを行いました。2日目は、午後から行われる第4回こみっとフェスティバル実行委員会に向けての会場準備及び資料作成、イベント案のアイデア出し、プレゼン資料の作成などを午前中に行いました。午後からは、こみっとフェスティバル実行委員会に実際に参加し、終了後はこみっと広場、こみっとルームの新たな活用方法について考えました。

3. インターンシップを通して修得したこと

まず私はこのインターンシップを行う前までは、水戸市役所の職員の方々はどういった内容の仕事をされているのかということをもっと知らなかったということを感じたいと思います。インターンシップを通して私はそれらについていくつかのことを学びました。まず一つは、水戸市役所内でも仕事内容がかなり多種多様であるとい

うことです。今回は市民生活課協働係にお世話になりましたが、すぐ横の部署では全然違う仕事を行っていることに驚きを感じました。また、内容が一部違うだけでも、その案件を扱う部署が違うという点から、細かく仕事内容が振り分けられているように感じました。2つ目は、市民生活課協働係の仕事内容についてです。はじめはやはり協働という言葉にピンと来ない、協働ってなんだという考えが自分の中にはありました。しかし、このインターンシップで市役所の方々と市民の方々がどのようなかわり方をしているのかということを実際に見て、私は協働とは、人々が協力することに加えて、主体性を持って、決められた役割ではなく、自ら役割を見つけて、同じ目標を達成していくことだという風に感じました。市民生活課協働係では、その協働を市民の方々と行っていくと同時に、さらに多くの市民の方々と協働の関係を築けるように、広報活動を通して、協働の推進を行っているということを学びました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに参加したいと考えているならば、まず自分がそのインターンシップをなぜ行うのかということをもっと自分ですっかり分かっておく必要があると思います。これをきちんと把握しておくことで、実際にインターンシップを行う際に、ほかの人たちよりもスムーズにインターンシップの内容を学ぶことができるのではないかと考えます。また、事前に受け入れ組織についての下調べを行うことも重要です。同じ組織でも部署によっては行う仕事はかなり変わってくると思います。そのため、自分が体験したいと思っていたインターンシップとは違うものに参加してしまうというミスが起きてしまうことも考えられます。こういった間違いがないよう、きちんと下準備をしていくことが必要であると考えます。

企画者としての経験

水戸市役所 市民生活課

現代社会学科 2年

黒澤卓矢

1. 参加の動機

私はプロジェクト演習で各プロジェクトが紹介された時、自分の住む水戸市の提案した課題「こみっとフェスティバルを開催します!!」に強く興味を惹かれました。市役所が主催する大きなイベントに企画の段階から触れられることが魅力的ですし、チームで課題に取り組む活動にインターンシップも組み込まれていました。普段暮らしている市を動かしている市役所を、この授業によってもたらされたインターンシップという機会を通して拝見したいと考えたのが動機です。

2. 派遣先の概要と業務内容

派遣先の市民生活課の仕事の中心は「協働」です。市がもともと抱えている課題を、市民から寄せられたアイデアを通して解決するために、ボランティアやNPOといった市民団体と連携し、協働すること（同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働くこと）を主な業務としています。そこで私たちは、その市民団体の交流の場となるイベント「こみっとフェスティバル」の実行委員会に委員として加えていただき、月に一度の実行委員会に参加していますが、その過程で市民生活課でのインターンシップがあり、フェスティバルに向けた準備の仕事や、市民生活課の日常業務を体験することとなりました。

1日目は午前中に市民生活課の橋本隆志様から「協働とは何か」のレクチャーを受けた後、市民生活課の仕事を学ぶ一環として、市役所内に置かれた水戸市消費生活センターにおいて、消費生活についての催しで配布するチラシや啓発品を袋に詰める作業のお手伝いをしました。午後は、今年が水戸市市制130周年に当たるため、「こみっとフェスティバル」でも何か特別に参加者の心に残ることができないか、企画の案を出すミーティングに参加しました。2日目は午前中は後述するイベント関連の作業、午後は市役所2階のこみっとルームを見学し、市民の方々がもっと利用しやすくなるにはどうすれば良いかの案を出したり、実際に部屋の模様替えをしました。また、ボランティアを対象としたアンケートについて意見を出し合ったり、こみっとフェスティバルのフェイスブックの記事更新を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップの業務の1つに「こみっとフェスティバル内で使用される『水戸市市制130周年記念イベント』の案を企画・検討する」というものがあり、そこで私は、子供でも楽しんで企画に参加できるように、水戸市にちなんだ景品のガチャガチャをアイデアとして提出しました。大きな言い方かもしれませんが、このとき私は生まれて初めて、自分1人で1つの企画を構想し、そのアイデアについて自身でプレゼンテーションをし、また他の人の意見を聞き、企画としての調整（市の職員の方と相談してガチャの筐体や景品の用意など企画の詳細についての決定）を行ったり、更なるアイデア（親子連れに案内役のスタッフを付けてイベントに参加しやすいように配慮する）を引き出したりするという経験をしました。アイデアを思いついたら、勇気を持ってとにかく言うこと。すると人から質問され、それに答えることでさらに考えが深まります。また他の人がいろいろ提案してくれて、初めのアイデアがさらに大きく成長していくのだな、と実感することもできました。ガチャガチャは実際に「こみっとフェスティバル」で実施されることになりました。インターンシップでのこの体験から、仲間とチームを組んで仕事をするとはどういうことなのかを知ることが出来たように思います。

4. 後輩へのアドバイス

2年生の内からインターンシップに参加することに不安を感じる人も少なくないと思います。しかし、人は場数を踏んで成長していくものです。偉そうに上からものを言うてくるやつだと思われるかもしれませんが、是非とも失敗を恐れず挑戦してみてください。

課題とゴール

NTTコミュニケーションズ 株式会社

現代社会学科 3年

生田 梨帆

1. 参加の動機

私はIT系の仕事に興味を持っていました。授業でIT系の仕事をしている人からお話を聞く機会があり、文系でもできる仕事があることを初めて知りました。そこでIT系の仕事を実際に見たいと思うようになり、インターンシップの参加を決めました。また、私はプロジェクト演習という授業でNTTコミュニケーションズ株式会社が運営するインターネット検定のカリキュラムを改訂するという課題に取り組んでいます。実際にインターンシップでインターネット検定に関わる方々のお話を聞くことは今後のプロジェクトを進めていく上で必要になってくるのではないかと考えました。

2. 派遣先の概要と業務内容

NTTコミュニケーションズ株式会社はNTTの長距離・国際通信事業を担う会社であり、NTTグループの主要企業の1つです。NTTコミュニケーションズ株式会社はインターネット検定も行っています。インターネット検定とはインターネットの基礎知識からビジネスの最前線で活かせる実践的なICT知識を身に着けることができる検定です。

1日目はNTTレゾナント株式会社の方々とホームページの改訂について意見交換をしました。次に株式会社CBTソリューションズの方々とIT業界、webマーケティング、就職体験についてのお話を聞きました。

2日目はNTTコミュニケーションズ株式会社の吉川昌吾様とチームのメンバーでグループワークを行いました。内容は1日目に学んだことと、プロジェクト演習の今後の目標、自分の棚卸についてでした。KJ法を使ってグループワークを行いました。自分の棚卸では自分の強みや弱み、人生の目標を一人ずつ発表しました。最後に大手町のビルに移動しオフエスを見学しました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私が今回のインターンシップを通じて修得したことは課題とゴールを設定することの大切さです。これは様々な場面で感じました。

まずはインターネット検定のWEBページ改訂について意見交換した時です。NTTレゾナントの方々の改善提案では課題が明確であり、改修のポイントがわかりやすく提示されたため、プレゼンを聞いていて、説得力があ

りました。クライアントに満足してもらう企画を行う場合は課題とゴールを明確化しておく必要があると感じました。

次にグループワークを行った時です。プロジェクトのゴールを1人ずつ付箋に書き、照らし合わせてみると、一人一人の考えるゴールが違ったことに驚きました。普段のミーティングでも、目的がはっきりせず、自分たちのやっていることに不安を感じる時が多々ありました。改めて自分たちのゴール設定の甘さを痛感しました。今回のプロジェクトでは、ゴールを自分たちで設定する必要があります。しかし私たちはゴールをしっかり話し合っ

て設定するということができず目的と手段が混同していたことに気づくことができました。最後にオフィスツアーの時です。見学したオフィスは最先端のICTを導入して、働きやすい環境を整えている印象を受けました。オフィスを移転するにあたって、社員にアンケートを実施して課題を明確化しコンセプトを決めて、移転を実施したことが分かりました。このように2日間のインターンシップの様々な場面で課題とゴール設定の重要性を感じました。今後メンバーで話し合っ

4. 後輩へのアドバイス

私は今回のインターンシップ中で後悔したことがあります。それは積極的に質問できなかったことです。せっかくお忙しいところ私たちのために時間を割いてくださったのに、質問できず、この機会を生かしきれませんでした。そのため、お話を聞くときは質問するつもりで聞くようにした方がいいと思いました。質問する意識があるかないかで、話の内容の吸収率が全然変わってくると思いました。

「社会人として働く」ということ

NTTコミュニケーションズ 株式会社

現代社会学科 3年

小笠原 彩 葉

1. 参加の動機

私がこのインターンシップに参加した理由はIT業界に興味があったこと、また自分が会社で働くイメージを明確にしたいという思いがあったからです。大学で学ぶ中でこの業界に興味を持ったものの、実際に社員の方々がどのような仕事をしているのか、どのような環境で働いているのかを具体的には知りませんでした。インターンシップを通じてそれらを学び取ることでIT業界への理解を深め、同時に「社会人として働く」という経験をする事で今後の自身の就職活動に役立てたいと思い、インターンシップに参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

NTTコミュニケーションズ株式会社は、日本電信電話株式会社（NTT）の完全子会社であり、特に長距離・国際通信事業を担っている企業です。国内外に多くの拠点を持っており、先進的なICT技術の活用によりクライアントの課題解決やスマートな社会の実現に取り組んでいます。

2日間のインターンシップでの業務内容としては、会社紹介やIT業界での仕事内容の説明を受けたり、実際にクライアントとの打ち合わせに参加して私たちの提案を発表・意見交換させていただいたりしました。また全部で3つのオフィスを訪問させていただき、本社でのオフィスツアーや社内で導入されているICTを活用したサービスなども体験しました。これから就職活動を控えた私たちのために、若手社員の方が自身の就職活動を振り返ってのお話やアドバイスをしてくださる機会も設けていただきました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、IT業界で働く人々、働く環境の様子を身近で学びました。そしてそれは、今まで漠然としていた「社会人として働く」という意識を芽生えさせ、参加の動機でもあった自分が会社で働くイメージの明確化にもつながりました。

私たちがチームで取り組んでいる課題に「インターネット検定公式WEBページの改訂」というものがあります。打ち合わせに参加させていただいた際、その課題で実際にページ制作の部分を担当されるNTTレゾナント株式会社の方の提案を聞き、私はその提案の伝え方や流

れの論理性に非常に感銘を受けました。自分の言いたいことを相手に説得力を持って分かりやすく伝えるということが実践されており、今の自分の力不足を実感すると同時に、より質の高い提案ができるよう改善したいと思いました。

またインターンシップ中に3つのオフィスを見学させていただき、社員の方が普段どのような場所で働いているのか自分の目で見て学ぶことができました。特に本社の大手町ビルでは社員同士のコミュニケーションを促すような工夫が随所に見られ、より良い環境づくりが目指されている様子に魅力を感じました。オフィスを見学させていただいたことで社会人として働くにあたり、「働く環境が充実していること」が自分にとって大切な要素であることも改めて実感しました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップへ参加することは新しい知識や考えを得られるだけでなく、自分に足りないものや未熟さを知るきっかけになります。社会の一員として働くことの責任感を身をもって認識し、様々な人と関わりながら活動するという経験はきっと自分自身をより成長させてくれるはずですが、そのためにも、インターンシップに参加することはとても意義のあることだと思います。初めは誰でも緊張しますが、勇気を持って、興味のあるインターンシップには積極的に参加してみてください。

相手に伝えるということ

NTTコミュニケーションズ 株式会社

現代社会学科 3年

岸 朱 里

1. 参加の動機

私が今回インターンシップに参加した理由は、地域PBL演習という授業の一環で、NTTコミュニケーションズ株式会社様からインターネット検定のWebページ、公式テキストの改定という課題をいただいたためです。私自身、テキストやWebページといったメディアを制作するということが興味があり、メディアを制作していく過程はもちろん、メディアを制作することを生業としている方々の考え方を学びたいと思ったため参加しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

NTTコミュニケーションズ株式会社は、クラウド、ネットワーク、セキュリティ、コンサルティングを提供し、顧客企業のグローバルビジネスをサポートしている会社です。インターンシップでは、Webページ改定案についての会議や、インターネット検定公式テキスト改定案についての活動の進め方や内容の話し合いを行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

この2日間のインターンシップを通して、相手の立場に立って考え、伝えるということの大切さを学びました。1日目に行った、NTTレゾナント株式会社様とのWebページ改定についての会議の際に、相手の立場に立って考え、伝えるとはどのようなことをいうのか実感できました。その会議の中で、NTTレゾナント株式会社が作成されたプレゼン資料が論理的に作成されており、とても分かりやすく、内容量も多いのにもかかわらずスムーズに聞くことができたことが強く印象に残っています。会議で使用した、ICTラボチームからの提案として私が作成したプレゼン資料とは大違いであったために印象に残り、多くのことを学ぶことができました。プレゼン資料作成について、自分の考えを分かりやすく論理的に伝えるだけではなく、どのようにしたら相手に納得してもらえるかということが大切だということを知りました。

地域PBL演習という授業でNTTコミュニケーションズ株式会社様から今回いただいている課題のインターネット検定公式テキストの改定、Webページ改定は、当たり前のことですが、直接自分たちからは見えない利用者がいます。そのことを頭では分かっているものの、活動し

ていく中で改定案を出すことに気持ちが向いてしまい、どうしても抜けてしまう部分であると感じます。改めて利用者にとって使いやすいテキスト、Webページは何かということ念頭において活動していきたいと思えます。また、課題である改定案提出の際にも、相手に納得してもらい、採用していただけるような資料作りを心掛けたいと思えます。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップでは、学べるものがたくさんあります。受け身の姿勢でインターンシップに参加するのではなく、自分が何を学びたいのか、何を知りたいのかを考えながら活動し、分からないことがあれば積極的に質問すると思います。そうすることで自分が知りたかったことに加え、新たな気づきが多く出てくると思います。普段の大学生活とは違い、社会人の先輩方と話す機会が多くあるので、社会人の考え方というものに触れ、新しい考え方ができるようになると思います。今回私がインターンシップで学んだ、相手の立場に立って考え、伝えるということも社会人の考え方であり、インターンシップの活動を通してお話しさせていただく中で学べたことです。身になることはいつでもどこで出てくるのか分からないので、アンテナを張り積極的に活動してください。

インターンシップを通じて学んだ 自分に必要な考え方

NTTコミュニケーションズ 株式会社

現代社会学科 3年

並木舞香

1. 参加の動機

私はまだ自分の将来をどんなものにしたいのか、明確ではありませんでした。業界を調べる中で、一番よくわからなかったのがIT業界でした。今日では、どんなものもインターネットに常時つながっている時代です。ネットがなければ現代の私たちは今のように生活できなくなります。それらを支えるIT業界とはどんな仕事なのか、文字での説明ではなく実際に目で見て体験したいと思い、参加を希望しました。

2. 派遣先の概要と業務内容

NTTコミュニケーションズ株式会社(以下、NTTコミュニケーションズと略す)はまさにIT業界の企業のひとつで、インターネット接続の電気通信事業を展開するプロバイダーを担っています。NTTコミュニケーションズの先進的なICT技術を用いて、ネットワークやクラウド、アプリケーションなど幅広いサービスを世界中のお客様へ提供している企業です。今回のインターンシップでは、NTTコミュニケーションズのウェブページの改訂に向けた打ち合わせへ参加させていただいたほか、NTTコミュニケーションズとつながりのある他の企業の方からのIT企業の業務説明や、「自分の棚卸し」というグループワークもありました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップでは、プロジェクトに携わる際に常にお客様の目線で考えることの必要性と、目的とそれを達成する手順を明確にすることの大切さを学びました。私は、NTTコミュニケーションズの方と検定の教材の改定案を考えるプロジェクトに参加させていただいています。既存の教材に付け加えたり省略したりする内容を決めることは難しく、どう進めていけばよいのかと難航していました。しかし、ウェブページ改訂の打ち合わせの中で担当の方が「お客様がウェブを利用する際に通る流れを全てやってみた」とおっしゃったのを聞き、私にこの姿勢が足りていなかったことがわかりました。ただ教材を読み進めていくだけでは使う人のことを考えた改訂はできません。ネット社会を生きる私たちに今どんな知識が必要なのか、何を学びたくてこの教材を手に入るのかを常に頭に入れておくことが、効果的な改訂につながると感じました。また、「自分の棚卸し」という

グループワークでは、自分なりの人生の目的、現在の自分、目的を達成するための中間目標を立てるワークを行いました。最初は、このワークは自己分析のためのものだと思っていましたが、ゴールをどこにするのか、そのための手段は何か、といった目標達成に向けて物事を順序だてて進めることの重要性を考えさせられるものであり、私たちのプロジェクトに大きく関わるものとなりました。チームで先が見えない中でプロジェクトを進めてきましたが、このインターンシップを通してプロジェクトの目標達成に向けた筋道が少しずつ見えてきました。今回のインターンシップで培ったことを今後に生かし、プロジェクトの成功に向けて引き続き活動していきたいです。

4. 後輩へのアドバイス

今年度のインターンシップでは、実際の打ち合わせに参加させていただき、私たち学生からも提案を行いました。次年度も提案するという内容のものがあれば、チーム内での議論を深めておく必要があると思います。学生が考えるものと企業で働く社員の方々のものとはクオリティの差が出てしまうのは仕方のないことかもしれません。しかし、社員の方々は私たちのインターンシップのためではなく、あくまで仕事のためにいらっしゃいます。そのため、4月からの活動で得た知識や情報、データ等を踏まえ、チーム内での議論をより深めたうえで提案に臨むのがよいと思います。また、様々な企業の方からお話を頂く機会があったため、それぞれの企業についての情報も調べておき、事前に聞いてみたい質問を手元に準備しておく、質疑応答の時間が充実したものとなると思います。

活動を通して得た学び

NTTコミュニケーションズ 株式会社

現代社会学科 2年

栗原千怜

1. 参加の動機

私がプロジェクト演習D（PBL型インターンシップ）への参加を決めたのは、本格的に就職活動が始まる前に、なにか社会体験となるようなものに取り組まなければならないという焦りを感じていたからです。将来どのような職に就きたいのか、何がしたいのかが全く決まっておらず、このままだと何も行動しないまま大学生活を終わってしまうのではないかという危機感があり、そんな自分を変えたいと思っていました。だからといって、1人でインターンシップに参加するにはまだ勇気が足りない、と感じていた時に、プロジェクト演習Dの存在を知りました。授業の一環として実際に就業体験ができるので、自身の成長のきっかけ・社会人としての基礎力を身につける絶好の機会になると思い、参加を決めました。

2. 派遣先の概要と業務内容

派遣先であるNTTコミュニケーションズ株式会社様は、世界でも有数の電気通信事業者であるNTTの、長距離・国際通信事業を担う完全子会社です。同社は2001年より、ICTリテラシーに関する普遍的な知識を体系化した資格サービスとして知られるインターネット検定「.comマスター」を提供しています。

今回のインターンシップのメインの活動となったのが、NTTレゾナント様とのWeb改善提案についての意見交換です。このプロジェクト演習Dにおける私たちの課題が、NTTコミュニケーションズ株式会社様が運営している「.comマスター」という資格試験の教材と、そのWebサイトの改善案の提言であり、今回のインターンシップでは後者の方に主にフォーカスを当てて行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップで学んだことは大きく2つあります。1つ目は、課題解決のプロセスに関することです。今回、NTTコミュニケーションズ株式会社様の吉川昌吾様から与えられていた課題は「テキストの改善」という大きなものでした。大学生目線での意見が欲しいとのことでしたので、どのような内容を追加・詳細にするべきかを考えるために、私達は茨大生を対象にアンケートを実施しました。しかし、アンケート実施後、今後の活動をどのように進めればよいか分からなくなり、活動

が行き詰ってしまいました。そのような状況の中で、今回のインターンシップに参加することになったのですが、その中で吉川様からのアドバイスを受けて、活動の出口が見えるようになりました。アンケート実施後に行き詰ってしまったのは、「テキストの改善」という課題において、そもそもの目的と問題、目標が明確にできていなかったからでした。課題解決において、解決の目的となりが問題なのか、どこまでのレベルでの課題解決を目指すのかをまず明確にしておくことの大切さをこの経験から学びました。2つ目は、社会人の仕事ぶりです。レゾナント様との意見交換の場でのことだったのですが、プレゼンの仕方から資料の完成度まで、すべてに圧倒されました。学生のうちに、社会人の方々の仕事ぶりを間近に拝見できる機会は滅多にないと思うので、とても身になる経験ができたと思います。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップは3年生になってからでいいのではないかと、そんな風に考えている人も少なくないと思います。実際、私もそう考えていた時期があったのですが、インターンシップを終えて、2年生のうちに取り組むことができ良かったと感じています。インターンシップは、その企業の仕事内容や職場の雰囲気を自分の目で見て知ることができるのが大きな特徴だと思いますが、それ以上に、社会人に求められる能力や自分に足りない要素はなにかということに気づくことができる点が大きなメリットだと思います。また、プロジェクト演習Dはグループでの活動になるため、主体性や協調性を学ぶこともできます。活動を通して得た学びは、就活の時はもちろん、社会人になってからも活かせるものだと思うので、積極的に参加することをお勧めします。

現場で学んだこと

NTTコミュニケーションズ 株式会社

現代社会学科 2年

小 瀧 千 尋

1. 参加の動機

私は、前学期から「プロジェクト演習」という授業を履修しており、NTTコミュニケーションズ株式会社が提供しているインターネット検定「ドットコムマスター」の公式テキストの改訂提案と、WEBページの改訂提案について、チームを組んで取り組んでいます。今回、このプロジェクトをご提案いただいたNTTコミュニケーションズ株式会社の方が、インターンシップも受け入れて下さることになり、参加することになりました。実際に企業の方と業務を遂行することで、社会人としてあるべき姿を知ることができ、それが今後のチームとしての活動の糧になるのではないかと考えました。

2. 派遣先の概要と業務内容

NTTコミュニケーションズ株式会社は、世界最大規模の通信事業者のひとつである日本電信電話（NTT）の長距離・国際通信事業を担う完全子会社であり、NTTグループの主要企業の一つです。世界70カ国／地域以上の拠点をもち、クラウド、ネットワーク、セキュリティ、コンサルティングの提供を通し、顧客企業のグローバルビジネスをサポートする会社です。

2日間のインターンシップの活動では、NTTレゾナント株式会社の方とのWEBページ改訂提案の打ち合わせ、CBTソリューションズ株式会社の方からIT企業での仕事内容のお話、NTTコミュニケーションズ株式会社の本社にお伺いしてオフィスツアーに参加させて頂くなど、様々なことを経験させていただきました。また、インターンシップ中に自分の棚卸しの時間を設けて頂き、人生の大きな目標を設定して、それを達成するために、何を優先しそのために何をすればよいかなどを見つめ直すことができました。

3. インターンシップを通して修得したこと

私は、このインターンシップを通して、普段の生活では得ることのできないことをたくさん学ぶことができました。NTTレゾナント株式会社の方々とのWEBページ改訂提案のミーティングでは、自分の意見を相手にわかりやすく伝えること（プレゼン能力）の重要性を学びました。企業の方が作成した資料は、プロジェクトのゴールが明確で、それに到達するための導線がしっかり引かれ、且つ私たちが理解できるレベルに合わせ分かりやす

くまとまったもので、想像以上のクオリティに驚きました。今後は、今回の学びを生かして相手の心に残るようなプレゼンができるようになりたいと思いました。

他にも、主体性を持つことの重要性を学ぶことができました。最初は、実際に企業の方とお仕事をさせて頂くことに緊張してしまい、あまり積極的に行動できませんでした。しかし、自分がこのインターンシップで学びたいことは何なのか、この学びを今後どのように活かしていきたいのかを考えながら主体的に取り組むことが大事であり、それによって得られる成果も違ってくると思いました。

4. 後輩へのアドバイス

私は、このインターンシップを通して、「百聞は一見に如かず」という言葉がある通り、自分の中で想像を膨らませるだけではなく、実際の社会を肌で体験することが重要だと感じました。自分が将来何をやりたいのか、自分は何が得意なのかがまだ明確でない人でも、インターンシップに参加することで必ず新しい発見ができるはずです。もし今、インターンシップに参加するかどうか迷っているのならば、是非参加することをお勧めします。しかし、その時は受動的にならず、常に主体性をもって行動することが大切だと思います。企業の方々は、私たち学生のために貴重な時間を割いてくださっているということを自覚し、自分の全力を尽くすことができればよいと思います。

経験から学ぶ

NTTコミュニケーションズ 株式会社

現代社会学科 2年

関 澤 南

1. 参加の動機

私は「プロジェクト演習」において、NTTコミュニケーションズ株式会社様からいただいたプロジェクト課題、インターネット検定のテキスト改訂・課題提案について、同じ授業を履修した人たちとチームを組んで取り組んでいます。インターンシップで学んだことをプロジェクトの課題達成のために活用したいと思い、NTTコミュニケーションズ様のインターンシップに参加しました。また、実際に業務内容や職場の雰囲気を感じることによって、今後の職業選択に生かすことができると考え、参加を決めました。

2. 派遣先の概要と業務内容

2019年に設立20周年を迎えるNTTコミュニケーションズ株式会社は、顧客のデジタルトランスフォーメーション実現に貢献し、ICTの活用による経営課題の解決やスマートな社会の実現に取り組むことを目的とした企業です。2019年7月のグローバル事業の統合を通じ、提供できるサービスメニューの拡充やサポートエリアの拡大を行いました。

インターンシップの期間は2日間でした。初日は田町グランパークタワーにて、Web改善提案についてNTTレゾナント様と修正提案検討、CBTソリューションズ様による会社説明、意見交換等を行いました。2日目、汐留ビルにて前半はグループワーク活動、後半は大手町プレイスに場所を移しオフィス見学を行いました。

3. インターンシップを通して修得したこと

2日間という短い期間でしたが、時代を先駆けるサービスや技術を提供するために自らの改革と発展を怠らない企業体制を肌で体感しました。最新ICTを活用した新しい働き方を取り入れており、常に先進的なサービスを提供するため様々な取り組みが推進されていて、感銘を受けました。

取り組みの1つとして、2日目に見学させていただいた新オフィス大手町プレイスはNTTコミュニケーションズのコーポレートガバナンス“Transform. Transcend”を実現するためのサービス開発拠点となっています。こういった発見は実際に足を運ばなければ得られなかった経験であり、貴重な体験をすることができました。2日間のインターンシップを通して、社会に出てからも常に新

たなものを創出しようとする姿勢を持ち、変化を恐れず進むことが必要であると感じました。

4. 後輩へのアドバイス

インターンシップに少しでも興味を持っている人は、早期の参加をお勧めします。早期にインターンシップに参加することによって実際の業務に触れるだけでなく、今まで気付かなかった新たな発見にも繋がるからです。将来の方向性が定まっていなくても、新たな知見を得ることができ、今後の将来計画に役立てることができ、また、将来志望する業種、業界がある程度決まっている人も、選択肢を狭めずに様々なインターンシップに参加してほしいです。幅広い業種、業界のインターンシップに参加することで、志望する職種に囚われず、様々な選択肢があることを知ることができると思います。自分から積極的に情報収集し、是非インターンシップに参加してみてください。

最後になりましたが、お忙しいなかインターンシップを受け入れて下さったNTTコミュニケーションズ様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

編集後記

今年度のインターンシップも各位のご協力のもと終了しようとしている。今年度のインターンシップでは、一生懸命精進した学生といい加減で無責任な学生の差が目立っていたように感じる。就職率も上昇一方のこのご時世では、いわゆる「あかん」学生も職に就けるだろう。ただ時代というのは移ろいやすいもの、ダメな者がすぐに淘汰される時代が到来した時、泣くのは手を抜いて生きてきた者であることを忘れないでほしい。バブルの生き残りからのアドバイスです。(井澤 耕一)

学生が書いた日誌に目を通しながら、担当の方からのリプライが大変充実していることに驚かされます。そのような先達の姿勢や背中を見て、彼らも社会人として育っていくことと思います。丁寧にご指導いただきました皆様に、心より御礼申し上げます。(添田 仁)

辛口の感想を述べる。メディア系のインターンシップは、報告会で皆の前で報告を行い、報告書の最終稿を提出して終了となる。が、今年、何時まで経っても報告書を提出しない学生がいた。何度も連絡し理由を尋ねると、「報告書をなくした。単位は入らない」。だが、考えて欲しい。既にインターンシップというサービスの提供を受けているのである。本学のインターンシップは、企業と教員、先輩たちとの信頼の積み重ねで成り立っている。その結果である「体験」を享受しながら、報告書という対価は支払わない。そんな「タダ乗り」が許されないことは、自明である。「単位は入らない」といえば、済む話ではない。報告書をまとめながら、この学生とのやりとりを思い出した。この制度を長く続ける為には、教員、職員の実力はもちろんだが、学生自身の意識もまた重要である。(村上 信夫)

「プロジェクト演習」のインターンシップレポートが、今年もまた報告書に掲載されました。インターンシップ委員会のご配慮に感謝申し上げます。学生の皆さん、学部で実施されているインターンシップの全てがこの一冊で分かります。どうぞひととおりの目を通し、興味のあるインターンシップに積極的に参加してみてください。(神田 大吾)

私は、筑波銀行や水戸プラザホテルなどの民間企業の窓口としてお仕事をさせていただきました。今年度は留学生の大学院生の参加もあり、少しずつインターンシップが担っている意味が変わってきているとも感じました。職業をより身近に感じる機会として機能するだけでなく、日本の企業がいかに地域社会の中で機能すべく挑戦しているのかを知るうえで、大きな意義があると思います。受講者の皆さんにとって、かけがえのない経験であれば幸いです。(今村 一真)

この体験から、目標や課題などなにか気づいたことがありましたか？参加しただけで満足せずそのとき感じたことを振り返り、考え、次につなげることが大切です。誰かと話すことから振り返ってみませんか。キャリアセンターの個別キャリア相談では、エントリーシート添削や面接対策での利用のほか、なんとなく話したいと訪れる学生も多いです。話しているうちに新しい気づきが生まれます。ぜひ聴かせてください。(小泉 崇人)

【スタッフ】

■人文社会科学部

・学務グループ 清家 佑華

■キャリアセンター

・センター長 西川 陽子

・専任教員 小磯 重隆

・インターンシップコーディネーター
菊池美也子 橋本 琢磨

・キャリア支援室長 小泉 崇人

・就職支援グループ

石川 雅也 鹿志村やよい 中野 杏里

茨城大学人文社会科学部